# 介護過程展開の実践力向上のための調査研究事業 報告書

令和 2(2020)年 3 月 公益社団法人 日本介護福祉士養成施設協会

#### 第I部

#### ■第1章 調査研究の概要(3ページ~)

- ・介護福祉士養成教育や介護現場における介護過程の展開の実践力の向上を図ることを目的に、 介護過程の教授法について実践研究を行った。
- ・介護施設関係団体、職能団体、養成校等の関係者により構成される検討委員会(委員8名)を 設置し、調査研究の方向性や方法等を検討。
- ・養成校の教員等により構成される作業部会(委員 15 名)を設置し、各種調査の企画と実施、事 例集作成等を実施。

#### ■第2章 養成施設対象アンケート調査(10ページ~)

- ・目 的:介護過程の展開の教授に焦点をあて、養成校における教育方法や内容等について現 状と課題を把握するとともに、具体的な教育事例、養成校と実習施設との連携等の 実践事例等について情報の収集・分析を行うことを目的に実施。
- ・実施概要:日本介護福祉士養成施設協会会員 361 校を対象 郵送及びメールにて調査実施 回答数 128 校、回収率 35.5%
- ・結果概要:養成校で介護過程を教授する上での課題を集約した結果、①介護過程の授業内容や 教授方法、②教員自身の能力や教育体系、③多様化する学生への対応に整理するこ とができた。

①では観察力・洞察力、コミュニケーション能力を身につけ、情報収集に活かすための指導の難しさ、情報の分析・解釈・統合の概念を教授する難しさ、②では教員自身の現場経験や教授経験による介護過程の教授力、所属する養成校の教育体系や他の科目との教育の順序性や連携、③では学生の文章力、語彙力、理解力、コミュニケーション能力の差が大きいこと、留学生への対応、高齢期の生活をイメージできない、学内での学びを介護実習で活用できないなどがあげられた。

これらの課題を解決するために、養成校では身近な事例の活用や、独自に映像教材やシートなどを作成すること、また、学習の時期(カリキュラム)の工夫など、様々な取り組みが行われていた。取り組みの一部は、本報告書第II部において実践事例として紹介している。

また、実習施設で介護過程を指導する上での課題を集約した結果、①実習施設や 実習指導者によって指導方法や指導内容に差がある、②養成校で教授している内容 と実習施設での指導に乖離がある、③学生の学習到達度の設定に整理することがで きた。これらの課題を改善するためには養成校と実習施設の連携が重要であること が明らかになった。

#### ■第3章 実習施設対象ヒアリング調査(26ページ~)

・目 的:実習施設における介護過程の指導、養成校との連携について実態や課題、指導の工 夫について把握することを目的に実施。

・実施概要:5地域(北海道/仙台/東京/大阪/熊本)にて6回実施 合計17名の実習指導者を対象 グループインタビュー方式で実施

・結果概要:実習指導者が介護過程の展開を指導するにあたっては、利用者の選定、アセスメントの指導などについて課題を感じているという声が多かった。そのため実習施設では、巡回及びカンファレンスにおいて教員・実習指導者で情報共有を行う、介護過程の指導では答えではなくヒントを与える・学生自身が気づくように導く、施設内の実習環境調整として実習生の特性を実習フロア職員で共有するなど、様々な工夫に取り組んでいる。

また、養成校に対する要望としては、介護過程の展開(養成校の指導内容を実習施設・指導者と共有したい)、介護過程の書式・様式(養成校ごとに異なり指導しづらい)、巡回指導・帰校日(どのような指導をしたのか情報共有したい)、指導者への要望(指導の妥当性をチェックしたい)、実習後指導(報告会などを通した実習生の気づきや成長の共有)、外国人留学生(コミュニケーション場面や記録面の指導に苦労している、指導が不安など)等があがった。

#### ■第4章 研修会の実施(47ページ~)

- ・目 的: 既述の2つの調査から得られた介護過程展開の教授と指導の課題及び実践事例等を 踏まえ、介護過程の教授法や実習指導のヒントや工夫について、養成校の教員と実 習指導者等が共有し、介護過程の展開の実践力向上を目的として実施。
- ・以下の4時間40分の共通プログラムにより、仙台/東京/大阪/広島/福岡の5会場で実施。

12:20~12:40	はじめに	I 研修の目的、本日のプログラム
12:40~15:30	講義	<ul> <li>Ⅲ 介護過程とは</li> <li>Ⅲ - 1 アセスメント</li> <li>Ⅲ - 2 介護計画 ※途中休憩あり</li> <li>Ⅲ - 3 実施と評価(実習施設との連携)</li> <li>Ⅲ - 4 介護過程の理解を深めるために</li> </ul>
15:30~15:40	休 憩	
15:40~16:40	グループワーク	IV 介護過程の教授や指導において課題と感じていること、工夫していること
16:40~17:00	V 研修のまと	め

・参加者は以下のとおり。

実習施設	高等学校	専門学校	短期大学	大学	その他	合計
28名	52名	116名	29名	41名	16名	282名

・実施結果:83.2%が本研修会に満足と回答しており、介護過程の基本を再確認できた、他校の 事例紹介について参考になったという意見が多くあげられた。一方で、より具体的 な教授方法や実践事例の効果等を知りたいという意見があった。

> 少ない人数ではあったが、各会場ともに実習施設の指導者の参加があり、グループワークでは養成校の教員と実習指導者が意見を交換し、有意義な機会となった。 今後は、実習施設への研修の案内を積極的に行うと同時に、教育研究や教材開発を 行うなど継続した研修会の実施が望まれる。

#### ■第5章 調査研究の総括と今後の課題(70ページ~)

- ・学生の多様性に対応した教育実践:今後は、養成校と実習施設の協力のもと、研究会や勉強会などを定期的に開催し、学生の学修効果を高めるための教授・指導方法(ブラッシュアップを含む)や教材開発(例えば、介護過程の展開様式(シート)の標準化など)に関する意見交換をしたり、参考となる教材、演習の事例等について情報共有すること等が望まれる。
- ・養成校と実習施設との連携:介護過程は介護実践の中で展開されているため、介護実習において養成校と実習施設が連携し、学生が介護過程の実践力を修得できるように指導することが重要である。介護実習の際に介護過程の展開を指導する上での課題の解決に向けて様々な取り組みや工夫が行われているが、養成校の教員や実習指導者による差が大きいこともわかった。
- ・研修及び研究の必要性:養成課程で学んだことが現場で活かされない、現場ではケアマネジメントとの関係が不明確といった課題があげられていたが、実践の場において介護過程が展開されていくためは、「介護過程」の更なる構築が必要となる。そのためにも養成校と現場の枠をこえた「介護過程」そのものの研修や研究が必要である。
- •「介護過程の教授と指導の事例」の活用:研修資料をもとに、介護過程に関する知識の共有や 実践事例を紹介する「介護過程の教授と指導の事例」を作成した(第Ⅱ部に掲載)。研修後のア ンケート調査の結果から、資料の活用によって教員や実習指導者の課題を解決するための一材 料となることがうかがえた。実習指導者養成研修や介護教員研修などの研修の一資料として、 また、介護福祉教育や研究に役立てていくことが必要である。

## 第Ⅱ部 (73ページ~)

#### ■介護過程を教授・指導する視点 <パワーポイントスライド>

- ・研修会で使用したパワーポイントスライドに解説をつけた。
- ・教授・指導に関する経験に関係なく、また養成校・実習施設のどちらの関係者であっても共有 できる内容として作成した。

#### ■介護過程の教授や指導の実践事例

・各養成校がそれぞれの介護過程の教授や指導にあったかたちで参考にできるよう「実践事例」 を掲載した。また、研修会参加者からあげられた「もっと詳しく知りたいと」いう声に応える ために、資料のねらいや使用のポイントなどの解説を加えた。

## 介護過程展開の実践力向上のための調査研究事業 報告書 目次

第Ⅰ部	<b>邶 調査研究報告</b>	1
■第	1章 調査研究の概要	3
1	目的	3
2	調査研究の内容及び流れ	4
3	調査研究体制	5
(1	)検討委員会委員	5
(2	)作業部会委員	6
4	調査研究の経過	7
5	本報告書で用いている用語について	9
■第	2章 養成施設対象アンケート調査1	0
1	目的1	.0
2	調査実施の概要1	.0
(1	)実施の概要1	.0
(2	2)アンケート調査票1	. 1
3	集計結果1	.4
	)養成校で介護過程の展開を教授する上での課題1	
(2	!) 養成校における教授の工夫等(抜粋・要約)1	.6
	3)実習施設で介護過程の展開を指導する上での課題1	
( 4	.) 実習施設との連携の工夫(抜粋・要約)2	
4	養成施設対象アンケート調査のまとめ2	<u>2</u> 3
■第:	3章 実習施設対象ヒアリング調査2	6
1	目的2	26
2	調査実施の概要及びヒアリングガイド2	26
4	ヒアリング結果(実施順)2	28
	. )ヒアリング調査東京2	
(2	!)ヒアリング調査熊本3	31
	3)ヒアリング調査北海道①3	
-	.) ヒアリング調査北海道②3	
	5)ヒアリング調査仙台3	
	5)ヒアリング調査大阪3	
5	実習施設対象ヒアリング調査のまとめ4	12

■第4	章 研修会の実施47
1	目的47
2 7	研修実施の概要47
(1)	研修のプログラム(5会場共通)47
(2)	実施日時、会場、担当講師48
3 ł	研修参加者状況49
4 7	研修資料49
5 :	グループワーク実施報告とまとめ50
(1)	グループワークで出された意見等51
(2)	グループワークのまとめ56
6 ł	研修参加者へのアンケートの実施と結果58
(1)	研修参加者へのアンケート調査票58
(2)	アンケートの集計結果60
(3)	アンケートの自由記載61
7 A	研修会のまとめ67
■第5	章 調査研究の総括と今後の課題70
1 -	学生の多様性に対応した教育実践70
2 1	養成校と実習施設との連携70
3 -	今後の課題71
第Ⅱ部	介護過程の教授と指導の事例 73
<b>■1</b> 3	活用にあたって~作成の目的と留意点77
■2 :	介護過程とは
(1)	介護福祉士養成教育における介護過程の位置づけ78
	介護過程とは
	介護過程の意義と目的84
(4)	- 介護適程の補成要素85
	介護過程の構成要素
(5)	
(5) 3 :	介護過程とコアコンピテンシー86
(5) ■ <b>3</b> :	介護過程とコアコンピテンシー

(3)アセスメントの目的・視点・基盤	91
(4)情報収集	93
(5)情報の分析・解釈・統合	95
(6)生活課題の抽出	101
(7)教授や指導の課題と工夫例調査結果より	103
(8)実践事例1:利用者の全体像の理解を深める〜私の姿と気持ちシート	
<宮崎保健福祉専門学校>	105
(9) 実践事例2:利用者の思い・願いを基盤においたアセスメントシート	
~アセスメントシート<聖和学園短期大学・仙台白百合女子大学>	106
(10)実践事例3:情報の分析・解釈・統合の理解~課題分析ワークシート	
<静岡県立大学短期大学部>	107
(11)実践事例4:利用者の生活課題の理解~演習事例(A さん)	
<静岡県立大学短期大学部>	108
(12)実践事例 5:介護過程の思考過程の理解を深める〜旅行計画の作成	
<河原医療福祉専門学校>	109
(13)実践事例6:ICF の視点で理解を深める〜介護過程の展開シート	
<聖カタリナ大学>	110
- A - A=#=1:m	444
■ 4 介護計画	
(1)介護計画とコアコンピテンシー(2)介護計画とは	
(2) 介護計画 (2) (2) (2) (3) (4) (3) (4) (4) (4) (4) (4) (4) (4) (4) (4) (4	
(4)教授や指導の課題と工夫例調査結果より	11/
■ 5 実施と評価	119
(1)実施とコアコンピテンシー	119
(2)実施とは	121
(3)実施のポイント	122
(4)評価とコアコンピテンシー	123
(5)評価とは	125
(6)評価のポイント	126
(7)教授や指導の課題と工夫例調査結果より	129
■ 6 介護過程の理解を深めるために	
(1) カンファレンスとは	
(2) カンファレンスのポイント	
(3) ケーススタディとは	133

(4)ケーススタディのポイント	134
(5)実践事例7:多職種連携の理解~多学科合同によるケーススタディ	
<専門学校 ユマニテク医療福祉大学校>	135
(6)実践事例8:ケーススタディの体系的な実践〜ケーススタディ実施要項	
<熊本学園大学>	136
実践事例	137
実践事例1:利用者の全体像の理解を深める〜私の姿と気持ちシート	138
実践事例2:利用者の思い・願いを基盤においたアセスメントシート	143
実践事例3:情報の分析・解釈・統合の理解~課題分析ワークシート	152
実践事例4:利用者の生活課題の理解~演習事例(A さん)	162
実践事例5:介護過程の思考過程の理解を深める〜旅行計画の作成	175
実践事例6:ICF の視点で理解を深める~介護過程の展開シート	185
実践事例7:多職種連携の理解〜多学科合同によるケーススタディ	197
実践事例8:ケーススタディの体系的な実践~ケーススタディ実施要項	204
参考・引用資料 一覧	215
本調査研究 協力者一覧	216

# 第 I 部 調査研究報告

# ■第1章 調査研究の概要

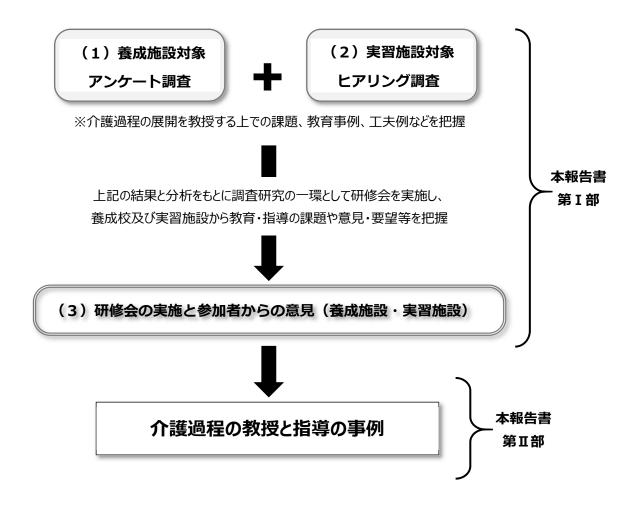
## 1 目的

介護過程とは、利用者が望む生活を実現するために取り組む、科学的思考と実践のプロセスである。介護過程は、養成校と実習施設が両輪となって、介護福祉士としての専門的知識と技術を修得できるよう教授・指導している。しかし、養成校により修学年限が異なることから、介護過程の教授の流れ、実習に行く時期等は各々である。介護過程の教授方法は養成校によって違い、また、介護過程の指導や実践も施設・事業所等によって違いがある。しかし、養成校で学んだ介護過程を、介護福祉士として施設・事業所等で活用できるようにするためには、養成校と施設・事業所等が介護過程について共通の理解を持つことが重要である。

介護福祉士には、介護福祉の専門職として介護職チームの中核的な役割を担うことが求められており、認知症高齢者や高齢単身世帯等の増加に伴う介護ニーズの複雑化、多様化、高度化等に対応できる介護福祉士を養成する必要がある。カリキュラム改訂により、これらを実現するためには「介護過程の展開」を実践できる力が重要であることが明示された。

本調査研究事業においては、介護過程の教授法について研究を行い、介護福祉士養成教育や介護現場における介護過程の展開の実践力の向上を図ることを目的とする。

## 2 調査研究の内容及び流れ



## 3 調査研究体制

当該事業を行うために、有識者や現場の実践者等による検討委員会を設置する。検討委員会は、介護福祉士が介護過程の展開を実践する現場となる事業者団体や、介護過程を教授する介護福祉士養成校の教員、卒後の継続研修を担う職能団体を構成員とし、本研究について検討を行う。

また、当該事業を機能的に展開するために作業部会を設置する。

## (1)検討委員会委員

(50音順・敬称略)

氏名	所属
石本 淳也	公益社団法人日本介護福祉士会
○荏原 順子	目白大学
大山 知子	公益社団法人全国老人福祉施設協議会
小川、義光	全国福祉高等学校長会
杉原 優子	地域密着型総合ケアセンターきたおおじ
野田 由佳里	公益社団法人日本介護福祉士養成施設協会 聖隷クリストファー大学
本名 靖	公益社団法人日本介護福祉士養成施設協会 本庄ひまわり福祉会
本間を達也	公益社団法人全国老人保健施設協会

#### ○委員長

#### オブザーバー

	社会・援護局福祉基盤課 民対策室 介護福祉専門官
--	-----------------------------

# (2)作業部会委員

(50音順・敬称略)

氏名	所属
安達 眞理子	公益社団法人日本介護福祉士会 医療法人敬愛会港島あんしんすこやかセンター
○荏原 順子	目白大学
木村 あい	神戸女子大学
品川 智則	東京YMCA医療福祉専門学校
鈴木 幹治	三重県立伊賀白鳳高等学校
鈴木 真智子	貞静学園短期大学
高木 剛	静岡県立大学短期大学部
武田 卓也	大阪人間科学大学
東海林 初枝	聖和学園短期大学
中山 見知子	群馬県立伊勢崎興陽高等学校
平野 啓介	旭川大学短期大学部
柊崎 京子	帝京科学大学
本名 靖	公益社団法人日本介護福祉士養成施設協会 本庄ひまわり福祉会
横山 孝子	熊本学園大学
吉岡 俊昭	トリニティカレッジ広島医療福祉専門学校

## ○部会長

## オブザーバー

伊藤 優子	厚生労働省社会・援護局福祉基盤課 福祉人材確保対策室 介護福祉専門官
-------	---------------------------------------

## 4 調査研究の経過

本調査研究の経過について、アンケート調査、ヒアリング調査、作業部会、検討委員会の実施状況を以下にまとめている。

なお、令和2年3月に第3回検討委員会の開催を予定していたが、新型コロナウィルス感染 症に関する政府等の対応方針をふまえ開催を取りやめた。

(開催・実施順)

開催(実施)	日時と場所(期間)	内容
アンケート調査	調査期間: 令和元年7月25日~8月10日	<ul> <li>・養成施設対象アンケート調査 (介護過程の展開の教授に関する調査)</li> <li>・令和元年8月現在、日本介護福祉士養成施設協会会員361校(375学科・課程)を対象に調査を実施</li> </ul>
打ち合わせ会	令和元年9月3日(火) 17:00~19:00 コインスペース五反田駅前店	・介護過程展開の実践力向上のための調査研究事業について ・作業部会の運営について ・養成施設対象アンケート調査について
第1回作業部会	令和元年9月13日(金) 14:00~19:00 ビジョンセンター八重洲南口701	・介護過程展開の実践力向上のための調査研究事業について
第2回作業部会	令和元年9月14日(土) 10:30~15:30 ビジョンセンター八重洲南口704	・作業部会の運営について ・養成施設対象アンケート調査について
第3回作業部会	令和元年9月29日(日) 10:30~16:30 ビジョンセンター東京駅前 704・706	・手引きの作成について ・研修会の実施について
第1回 検討委員会	令和元年10月20日(日) 13:30~15:30 ホテル東京ガーデンパレス桂	・介護過程展開の実践力向上のための調査研究事業について ・作業部会について ・研修会の開催について
打ち合わせ会 (アセスメント)	令和元年 1 1月 2日 (土) 10:30~16:00 TKP品川カンファレンスセンター ミーティングルーム8J	・調査結果の分析について ・研修会の資料作成について ・今後のスケジュールについて

開催(実施)	日時と場所 (期間)	内容	
打ち合わせ会 (介護過程とは)	令和元年11月3日(日) 13:00~16:00 AP品川10階I会議室	<ul><li>・調査結果の分析について</li><li>・研修会の資料作成について</li><li>・今後のスケジュールについて</li></ul>	
打ち合わせ会 (実施と評価)	令和元年11月3日(日) 13:00~17:00 TKP品川カンファレンスセンター ミーティングルーム8J	<ul><li>・調査結果の分析について</li><li>・研修会の資料作成について</li><li>・今後のスケジュールについて</li></ul>	
打ち合わせ会 (アセスメント)	令和元年11月17日(日) 9:30~12:00 帝京科学大学	・研修会の資料作成について	
第4回作業部会	令和元年12月14日(土) 10:30~16:30 AP品川アネックス1階D	・研修会の資料作成について	
第5回作業部会	令和2年1月19日(日) 10:30~15:00 A P品川アネックス1階A	・研修会の資料作成について ・研修会アンケートについて ・報告書と手引きの作成について	
第2回 検討委員会	令和2年1月19日(日) 15:30~17:00 AP品川アネックス1階・F	<ul><li>・研修会の実施について</li><li>・研修会アンケートについて</li><li>・報告書と手引きの作成について</li></ul>	
研修会_福岡	令和 2 年 1 月 2 5 日 (土) 1 2 : 3 0 ~ 1 7 : 0 0 福岡ガーデンパレス・宝満		
研修会大阪	令和 2 年 1 月 2 7 日 (月) 1 2 : 3 0 ~ 1 7 : 0 0 T K P ガーデンシティ新大阪 6 B	・介護過程の展開に関する研修会 〜教授方法と学生指導〜	
研修会広島	令和 2 年 1 月 3 0 日 (木) 1 2 : 3 0 ~ 1 7 : 0 0 広島ガーデンパレス孔雀・朱鷺		
ヒアリング調査東京	令和 2 年 2 月 1 日 (土) 1 4 : 3 0 ~ 1 6 : 3 0 ビジョンセンター新宿 1 0 0 5	・実習施設対象ヒアリング調査	
ヒアリング調査熊本	令和2年2月2日(日) 10:30~12:00 介護老人保健施設 フォレスト熊本	・実習施設対象ヒアリング調査	

開催(実施)	日時と場所 (期間)	内容
ヒアリング調査 北海道①	令和2年2月3日(月) 18:00~20:00 札幌医学技術福祉歯科専門学校 コミュニティルーム	
ヒアリング調査 北海道②	令和2年2月4日(火) 18:00~20:00 旭川大学短期大学部3階 平野研究室	
ヒアリング調査_仙台	令和2年2月5日(水) 10:00~11:00 特別養護老人ホーム 梅が丘	
研修会_仙台	令和2年2月8日 (土) 12:30~17:00 TKP仙台南町通 カンファレンスセンター・8B	・介護過程の展開に関する研修会
研修会東京	令和 2 年 2 月 1 5 日 (土) 1 2 : 3 0 ~ 1 7 : 0 0 ビジョンセンター東京八重洲南口	~教授方法と学生指導~
ヒアリング調査大阪	令和2年2月16日(日) 13:00~15:00 大阪人間科学大学正雀学舎 1号館3階1306教室	・実習施設対象ヒアリング調査
打ち合わせ会	令和2年3月18日(水) 10:00~12:00 A P品川アネックス1階・E	・報告書の作成について

## 5 本報告書で用いている用語について

本報告書においては、以下の用語を解説内容の意味をもって用いている。

養 成 校:福祉系高等学校、専門学校、短大、大学をまとめて「養成校」と表記した。

養成施設:養成施設と表現した場合は専門学校、短大、大学を意味し、福祉系高等学校は含んで

いない。

養成校の教員:福祉系高等学校を含めるため、本来ならば「養成校の教諭・教員」と表現すべき

であるが、「養成校の教員」と表記した。

実習施設:介護実習を受入れる施設・事業所等について、「実習施設」と表記した。

# ■第2章 養成施設対象アンケート調査

## 1 目的

介護過程の展開の教授に焦点をあて、養成校における教育方法や内容等について現状と課題を把握するとともに、具体的な教育事例、養成校と実習施設との連携等の実践事例等について情報の収集・分析を行う。

## 2 調査実施の概要

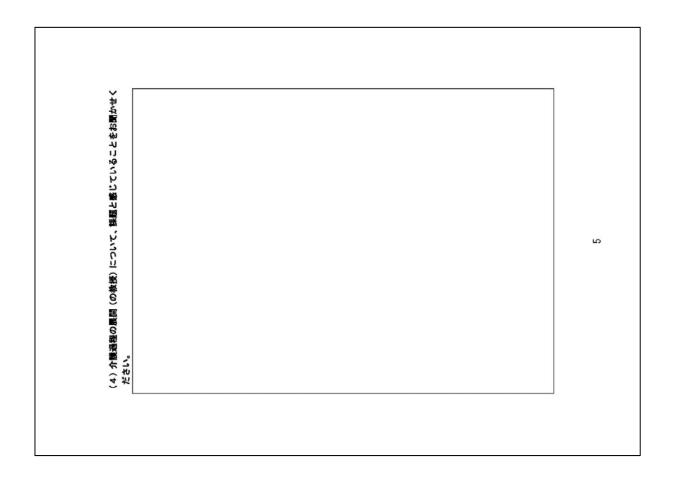
## (1) 実施の概要

対 象	・令和元年8月現在、日本介護福祉士養成施設協会会員 ・361校(375学科・課程)	
実施期間	<ul><li>・令和元年7月25日~8月10日</li><li>・上記締切り後も受付</li></ul>	
調査方法	・郵送配布・郵送回収 ・メール・ファクシミリでの回答も受付	
回収状況	<ul> <li>・対象数:361校</li> <li>・無効回答:1校(募集停止のため回答しない)</li> <li>・回答数:128校【内訳】 大学22校 短期大学27校 専門学校79校</li> <li>・回収率:35.5%</li> </ul>	
調査内容	貴校における介護過程の展開に関する教育等について ①課題と感じていること ②貴校において教育上、工夫していること ③貴校において使用している教材や資料 ④実習施設において介護過程の指導が図られるよう、貴校あるいは実習施設(実習指導者)と連携して行っている工夫や取り組み	

## (2) アンケート調査票

今和元年度社会福祉推進事業 <b>介蔵過程</b> 0	今和元年度社会福祉推進事業 ク塩過程展開の実践力向上のための調査研究事業 <b>介護過程の教授法等に関する調査</b>	2 責校における介護過程の展開に関する教育等についておうかがいします。(1) 小種過程の展開について、書校において教育上、工夫していることをお聞
	・・・回答にあたってのお願い・・・	かせください。
回答については、「 <b>介護過程」</b> 願い致します。	※回答については、「 <b>介養通程」の授業を主にご担当頂いている先生</b> にご記入をお願い数します。	
本調査票は、http://kaiyokyo.net ダウンロードすることができます。	※本調査票は、http://kaivokyo.net/member/index.html から、ワードファイルを ダウンロードすることができます。	
一ドに回答を記載する場合、	※ワードに回答を記載する場合、書式やレイアウトが崩れてもかまいません。	
ページ以降においては、回答 願いしています。同封の返仇	※次ページ以降においては、回答済み調査禁とあわせて、関連する資料等の送付をお願いしています。同封の返信用封督に入れて、「返送を必願いったします。	
ご多忙のところ恐縮やすが、E にお願いいたします。	※ご多忙のところ恐縮ですが、回答は <b>令和元年8月10日(土)</b> までにお願いたします。	
羅西斯や資本について、メーチによ 以下また近信をお願いいたします。	※離右駅や資料について、メールによる指付ファイルでの回答をご希望の場合は、 以下まで送信をお願いいたします。	
送信先:watanabe®kaiyokyo.net	lot	
回答する養成施設の基本属性についてご回答をお願	性についてご回答をお願いいたします。	
養成施設の名称		
施設が所在する都道府県	张 佐 摂 帰 〔	
1	大学 2 短期大学 専門学校 4 高等学校専攻科	
に 回答者のお名前		
ご回答者の連絡先電話	( )	※上記に関連する資料があれば、調査票とあわせて資料等のコピー等のご提出 をお師いパーキーます。
ご回答者の連絡先メール	(63)	0
	-	2

(3) 金額基数の額間に関する者に同し、支数において使用している数件や 変数に成立のようなものがあるか最終的に影響かせください。 本の数 1個か、質繁性の (全質性等性) と連携して行っている工夫や歌り組み を設置かせください。 1 日本のであれば、発表を作っている質素や数けを表がコピー等のご提示を表面。 いいてします。 ・ 不変数の質の数をながましている質素を数けっただっこと、ことはいた。 ・ いっします。 ・ 不変数の質の数をながましている質素を数けっただけでは、 ・ かっします。 ・ 不変数の質の数をながましている質素を数けっただけでは、 ・ かっしているがよスメンドン・ドゥウインメンドン・トゥウインメンドン・トの心臓師、分類学能等。	8
---	---

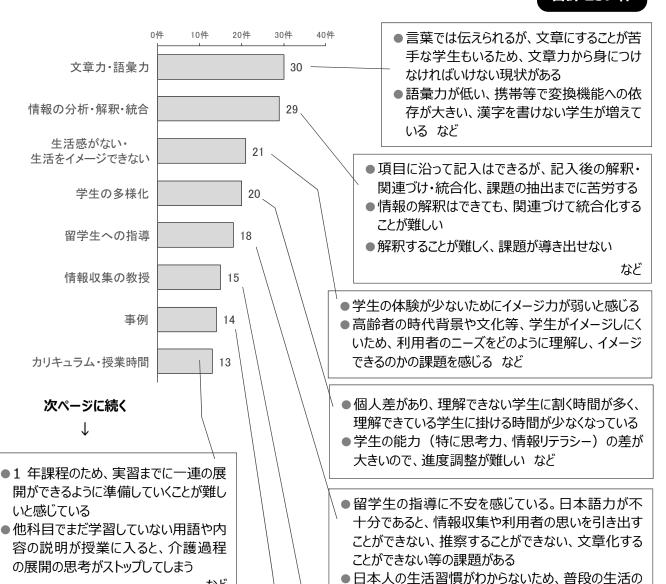


## 3 集計結果

※本調査は選択肢の設定はなく、すべて文章による回答の調査であり、集計にあたっては、 キーワードを集約し代表的な意見を要約等して掲載している。

## (1)養成校で介護過程の展開を教授する上での課題

合計 237 件



●紙面での事例では、本人の思い等は なかなか読み取れず、課題抽出が難 しい

など

- テキストの事例は、すでに加工された 情報が多く、その中から客観的事実 を情報収集していくのは限界がある など
- ●介護に必要な情報を利用者さんとのかかわりから得 ` ていくことが苦手

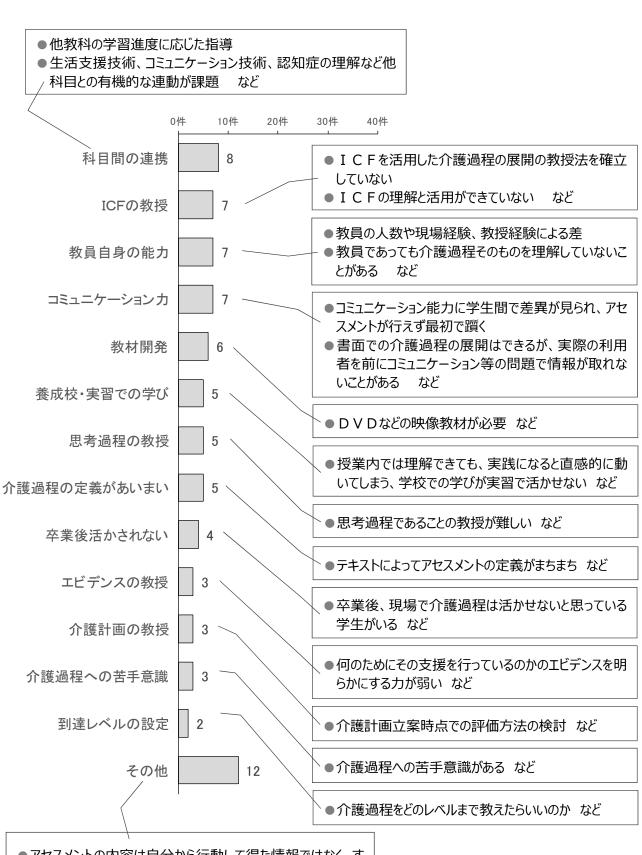
●認知症や加齢による障害についての基本的な考え

観察力・洞察力の差が大きい

方が違い、教授が難しいなど

想像が乏しい

表面化しない情報をキャッチすることができない(目に見えたことが全て) など



- ●アセスメントの内容は自分から行動して得た情報ではなく、すでに記録してあるところからしか得られない
- ●リハビリに取り組むことが重要だと考えてしまう傾向がある
- ●国家試験にどう結びつけるか
- ●人数が少なくグループワークを実施することが困難
- ●障害者に関する学びが少ない など

## (2) 養成校における教授の工夫等(抜粋・要約)

#### ■身近な題材の活用

- 自分自身、家族、クラスメート、教員など身近な人を対象に情報収集する練習からはじめている。
- 学生に「85 歳になった私」と題して、85 歳の姿を描いてもらう。高齢者になった自分を想像することにより、授業が進み、要介護状態になった自分をモデルにして、介護過程を展開する。
- 入学当初は「介護過程」という言葉に難しさを感じないようにするために、身近なことを題材に計画を立てる。今年度は、「車」がほしいという学生の計画を立案。昨年度は「旅行」に行きたいとのことから「旅行計画」を立てた。
- 観察力をつけるために、絵や写真など静止画から情報を得て、文章化し、それを他者と比較する。

#### ■高齢者や障害者への理解

- 利用者を理解し、コミュニケーションを図れるようにするため、ボランティアの時間を設けて施設やサービス 利用者さんと交流を持つようにしている。
- 授業において特別養護老人ホームへ足を運び、小人数グループでひとりの方のアセスメントを展開している。
- 地域にある高齢者と障害者施設の見学を行い、「地域で暮らすこと」について当事者の方や職員からの 講話をお願いしている。

#### ■視聴覚教材の活用

- 情報収集が行いやすいようDVDを作成。DVDは施設で働いている介護福祉士が利用者役をして、施設での様子を撮影したもの。
- 計画立案後の実施内容を動画撮影し、眼で見て確認する工夫をしている。
  - ・アセスメントによって導き出した生活課題に対して援助計画をグループワークで取り組む。
  - ・援助計画を自分たち以外のグループで実施してもらう。この際、動画を撮影し後の記録として残して おく。
  - ・その後、計画立案グループ自らも計画立案に沿って、実施をする。この時も動画撮影し、記録する。
  - ・2つの動画を比較し、自分たちの計画立案の意図が正しく伝わっているかを確認する。
  - ・内容が違う点やうまく伝わらなかった点を整理し、どうして伝わらなかったのかを検討した上で計画を 修正。
- ショート事例、ミドル事例、ロング事例の動画をつくり、検討の資料としている。
- 介護過程の授業を進める上で皆が知っている(話題)の映画を見せ、主人公やその人に関わる人たちの思い、願いは何かと考えさせる。映画を3回くらいに区切り、視覚的に理解させていく。

## ■多職種連携・チームアプローチの理解

- テーマごとにゲストスピーカーに来ていただく。医師、看護師、障害者施設職員、ケアマネジャー、ICT 利用のためには企業担当者など。
- チームアプローチについて学内・学外の多職種の専門職(看護職・社会福祉士・歯科医・理学療法士・作業療法士等)を外部講師に招き、講義形式の授業を実施。
- 介護計画の立案から実施が実習のなかでもスムーズにできるよう、また多職種連携について実践的な学びができるように、学生間で模擬カンファレンスを実施している。
- 関係施設に協力を仰ぎ、対象者 1 名を選定し、その支援計画を介護福祉の学科だけではなく、他学科 (理学療法士、作業療法士、歯科衛生、看護師)と話し合いながら、支援計画を作成する。

## ■ 模擬カンファレンス・ロールプレイの活用

- 模擬事例を用いた疑似ケアカンファレンス:学生が一人一事例を担当し、アセスメントから生活上の課題の明確化、実践可能な個別介護計画の立案を行い発表する。残りの学生は追加でアセスメントすべき事柄はないか、生活上の課題としてもっと優先順位の高いものはないか、個別介護計画の内容は妥当か、全員が理解できる内容であるかを相互にチェックし話し合いをする。
- 事例をもとに介護計画を立案し、ロールプレイを行い評価して介護計画全般の振り返りを行っている。
- 情報収集、アセスメント、実習後に、実際に出会った利用者の情報から介護計画を立案。
- ◆ 学生同士で実際にロールプレイし、評価モニタリングを行う。

#### ■個人ワーク、グループワーク

- 事例検討の際は、個人ワーク後に必ずグループワークを行い、お互いの意見を交換し、共有するようにしている。多様な視点があることを気づく機会としている。
- グループワークでの発表後、グループ毎に質疑応答等、意見交換を実施。個別での視点の違いから、グループでの視点の違いまで視野を広げ、振り返りを実施。
- 1年次のグループワークには、2年生の優秀者がアドバイザーとして各グループに入る。
- 自己学習→グループワーク→自己学習→グループワークを繰り返している。

## ■事例の活用

- プライバシーに配慮をしつつ、これまでの実習の実際の事例を活用している。
- 教員の経験等に基づく独自事例を作成して教材としている。
- 事例検討会等を、他学科、他学年などを含めて検討、評価を行う。
- 事例を蓄積してデータベースを作成し、活用している。
- 三重県介護福祉士養成施設協会が作成した「三重県版介護過程実践モデル集」をベース教材としている。リアルに基づいた事例構成となっており、初学者である学生にとってもイメージが描きやすいように工夫された編成がなされている。

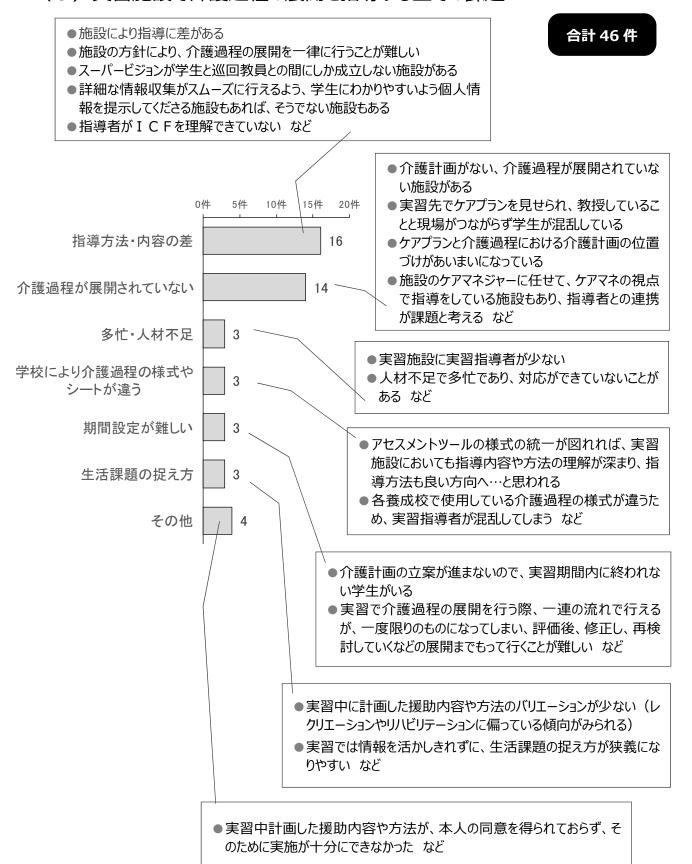
## ■科目間の連携・時間割の工夫

- 生活支援技術、介護総合演習の教員と協力して互いの授業に入ったり、一緒に教えたり、連携を図っている。
- 他の科目でも同じ事例を用いている。
- 1 日の時間割を1限:こころとからだのしくみ→2 限:生活支援技術 I (福祉用具・環境)→3 限:介護過程の基礎と連動させ、ひとりの利用者を事例として、関係する全ての授業で同じことを伝えていく方法を取り入れている。
- 「介護過程」を大きく4段階に分け、学年進行(関連科目)、実習とリンクさせながら理解を深めるシラバスを構成している。
- 1年、2年と同一教員が担当している(指導に継続性が持てるため)。

#### ■授業の方法、その他

- 介護過程に関する理解を定着・促進させるため、毎回、授業の冒頭に、前回の授業に関する小テストを実施。
- 1 事例を中心に、グループワークを取り入れ数名の教員が関わり、少人数制で行っている(場合により、 到達度別のグループ編成)。
- 基本的なコミュニケーション演習(日常生活会話の場面を切り取って学生同士にて実施)を実施。
- 留学生が加わったこともあり、授業の始まりの 10 分弱の時間で基本の確認をする。前回までの流れで 重要と思われること、例えば「アセスメント」とか「多角的に情報を収集する」などについて、最初の 3 分で ノートを確認した後、ペアになり互いに説明し合う。授業の導入と意識づけ。
- 介護過程展開の用紙は、北海道の養成校で統一している様式を使用している。
- アセスメントシートをもとにケア実践が展開されることを、実際の事例から学生がグループ別に手順書を作成し、実技の発表を行っている。

## (3) 実習施設で介護過程の展開を指導する上での課題



## (4) 実習施設との連携の工夫(抜粋・要約)

#### ■事前の打合せ・情報共有

- 授業で教えている内容がわかるように、授業で使用した資料を施設に渡している。
- 事前に実習施設に実習ファイルを持参し、担当者に日誌等の記入方法、指導内容、指導方法等を説明している。本校での介護過程の授業の取り組み内容や、実習生が介護過程の展開をどのくらい理解をして実習にあたるか、実習生の性格、前回の実習の取り組みの姿勢などを実習担当者に報告し、伸ばしてほしいところや注意してほしいところなどを教員よりお願いしている。
- 介護実習の第1~4の段階別に「実習説明会」を開催し、施設指導者、巡回指導者(非常勤)を 交え、本学の実習目標とその達成のための実習方法及び記録様式(介護過程の展開)等について 説明し、意見交換をして共有している。
- 実習施設へ「実習の手引き」を配布して周知している。アセスメント表や個別援助計画表など、具体的な書き方を「実習の手引き」に入れ込んで説明している。
- 学生の理解度を教員が把握しておき、実習前に指導者に学生の特性、不得意な部分を伝えている。
- 学生たちは、実習施設の事前訪問を行い、施設の雰囲気や施設内の生活状況を指導者とコミュニケーションを図り見学させていただくことで、安心できると考える。
- 実習依頼施設の介護過程展開マニュアル作成(介護学会事例発表)。

## ■巡回指導、帰校日等

- 実習巡回施設の担当教員を固定化している。
- 実習中は週1回の巡回や帰校日を設け、指導者との連絡や助言などを学生に反映できるようにしている。指導者とのやり取りの中で、必要時には随時巡回をして指導できるようにしている。
- 実習中は週2回担当の教員が巡回し、指導者・学生と面談している。週1回はケースカンファレンスを 指導者の参加のもと実施する。学生の状況を毎回情報交換し、早めの対応を心がけている。
- 実習施設での週 2 回の指導を行っている。週の前半の指導では、学生の個人指導(記録指導)を 行い、週の後半の指導では実習指導者に同席していただき、学生の指導、反省等を行っている。
- 土曜日に帰校日を実施。担当利用者の介護過程について個別指導を行っている。
- 巡回時のカンファレンスで、学生にアセスメントや計画立案を発表させて、教員を含めた三者でそれについて議論を行う。
- 実習最終日の実習反省会に教員が同席。実習の評価や注意点について相互理解を図る。事後指導 につなぐ。
- 施設で行われる中間反省会では、学生の情報収集に誤りはないか、また、学生は不足している情報を質問し個別対象者の情報収集を確認する。立案した計画の実施については、必ず実習担当職員の承認を得て実施する。最終反省会では取り組みの経過、結果についてまとめ発表する。
- 実習中盤に3日間の登校日を設け、校内で計画書の作成まで確認し、後半のスタートを行う。登校日を水曜日〜金曜日に設定し、さらに実習先にはその後の土日を休みにあてていただき、期間内に計画書作成できなかった学生は、土曜日に自主学習できる環境としている。教員も土曜日出勤し、指導できる環境を確保している。

#### ■ カンファレンス

- 介護過程カンファレンスを開催。その際に指導者や教員、関連職種が参加し、アドバイスや助言等を学生に伝える。
- 他職種の方から、話を聴く機会の設定、サービス担当者会議及びケアカンファレンスの参加。
- 実際の現場のカンファレンスのように、学生が作成した担当利用者のアセスメントと個別支援計画の成果物をもとに、介護職、看護職、栄養士など多職種の職員が集まり、会議を開催してもらっている。
- 担当している利用者以外について、実存の介護計画の作成までのプロセス、多職種との連携場面等 (カンファレンス、ケア会議、日々の申送り等)を示していただく。

### ■多様な学びの機会

- 施設での行事ボランティアに声をかけていただき、家族との関わりの機会をセッティングしていただいている。
- 家族とのコミュニケーションが図れる機会を確保している。
- 利用者宅への同行の機会を設けている。
- 受け持ち利用者の状態観察と介護計画の効果性を検証するために夜勤実習を1度入れている。

### ■実習指導者等と指導内容・方法の共有

- 毎に1回、実習指導者研究会を開催して、指導者用にパワーポイントを使って説明している。
- 『ケース・スタデイ(教授方法バージョン)』を実習指導者と共有している。
- 実習施設への本校からの出前講座。
- 年度末に「実習指導者懇談会」を開催し、教員と指導者の連携を図る。各施設の指導者の方々にグループ毎に意見交換や実習報告会に来校していただき、他施設での取り組みも聞いていただくようにしている。
- 毎年1回実習依頼先施設(全施設)を集め会議を実施している。
  - ① 今年度実習反省(全施設よりコメント)、②次年度実習説明、③実習段階別介護過程説明

## ■報告会等

- 「実習指導の実践報告会」を企画し、それぞれの施設がどのような工夫や取り組みをしておられるのか、 共有したり気づき合ったりできるようにする。
- 年度末に実習担当者を学内に招き、事例研究発表会を実施している。
- 卒業研究として、実際にご利用者に行った介護過程の展開を分析する学習をしている。完成時は発表会を計画し、実習指導者等に参加してもらっている。その発表が刺激となり、次の指導に活かされていると感じている。
- 実習後の成果として、介護実習に関係する方々を来賓に、事例報告会を開催している。その成果として、介護実習報告集を発行し、実習施設を中心に配布している。
- 「介護実習報告会」にて、実習施設(実習指導者)が来学し、報告内容について助言、指導をする場を設けている。この報告会には、他学年も参加し、取り組み内容等についての質疑応答にも参加している。

## ■その他の工夫

- 実習指導者に対し、実習アンケートを依頼。意見を実習に反映できるようにしている。
- 学生にアンケートを行い、実習施設にフィードバックしている。
- 学生が介護計画の対象としている利用者様に直接会わせていただける施設もあり、教員の目でみた介護過程の展開例を学生に提示することができている。
- 施設側にはあらかじめ受け持ち利用者を 2~3 名にしぼっていただき、早めに情報収集がスタートできるようお願いしている。
- 「介護計画立案」に関しては必ず実習指導者の了解と指導を受けてから実践をすることとしている。評価・考察においても同様にしているので再アセスメントの思考過程がスムーズに行えていると感じる。
- 巡回担当教員と実習指導者とで、学生の目標に対する受け持ち利用者の選定について相談を行っている。
- 個人情報保護を堅持しつつ、情報の開示について、巡回指導教員との打ち合わせ。
- 学生主導で中間反省会、最終反省会を実施している。

## 4 養成施設対象アンケート調査のまとめ

### ①養成校で介護過程の展開を教授する上での課題と授業の工夫

本調査から得られた養成校で介護過程の展開を教授する上での課題に関する代表的な意見を集約し、22のキーワード(その他を含む)を抽出した。そのうち、最も意見の多かったキーワードは、言葉では伝えられるが、文章にすることが苦手な学生がいるなどの「文章力・語彙力」(30件)であった。次いで、情報の解釈・関連づけ・統合・課題の抽出までの教授に苦慮するなどの「情報の分析・解釈・統合」(29件)、学生の体験が少ないためにイメージする力が弱いなどの「生活感がない・生活をイメージできない」(21件)であった。22のキーワードと意見の内容を分析し、課題を「介護過程の授業内容や教授方法」「教員自身の能力や教育体系」「多様化する学生への対応」の3つに整理した。

介護過程の授業内容や教授方法に関する課題には、観察力・洞察力、コミュニケーション能力を身につけ情報収集に活かすための授業を展開することの難しさ、情報の分析・解釈・統合の概念を教授する難しさ、思考過程が理解できる授業や根拠を導きだす授業の難しさ、介護計画における評価を教える難しさ、介護過程の到達レベルを設定する難しさなどがあった。また、介護過程を教授するためには、介護過程におけるICFの授業の確立、テキストによる介護過程の定義の違い等の統一、紙媒体中心の事例を用いた学習方法の限界などの課題もあった。このように介護過程の展開を教授する上での課題は多岐に渡るが、養成校では学生が介護過程を理解し介護現場で利用者の望む生活を実現するための方法として身につけることができるように、教育体系、授業内容や方法などを工夫していた。

介護過程の授業内容や教授方法の課題に対する工夫としては、学生が介護過程の展開に取り組みやすく、苦手意識を持たないように「車の購入計画」「旅行計画」などの身近な題材をもとに思考過程を学ぶ授業を実施するなどがあった。事例を展開する授業では、高齢者や障害者を理解するために授業時間を活用して高齢者施設や障害者施設へ出向き高齢者や障害者とかかわる授業、観察力を養うために絵や写真など静止画から情報を得て文章化し他者と比較する授業、事例を動画で示し展開しロールプレイを実施する授業、学外・学内の多職種の専門職を講師に招きチームアプローチや連携を理解する授業があった。また、学生が展開した介護過程を発表し、アセスメント内容、生活課題の優先順位、介護計画の妥当性などについて学生が相互確認をする模擬カンファレンス授業などの工夫も見られた。授業方法としては、個人ワークとグループワークを組み合わせ活用する方法、映像とロールプレイを併用した方法、三重県介護福祉士養成施設協会が作成した「三重県版介護過程実践モデル集」を活用する方法などが見られた。

次に介教員自身の能力や教育体系の課題を見ると、教員自身の現場経験や教授経験による介 護過程の教授力、所属する養成校の教育体系や、他科目との教育の順序性や科目間の連携の強 化などがあった。これらの課題に対する工夫としては、「生活支援技術」と「介護総合演習」を 担当する教員が共に授業案を作り実践する工夫、同じ事例を用いて1時間目に「こころとから だのしくみ」、2時間目に「生活支援技術」を学び、これらの学びを応用して「介護過程」を1 日で学ぶ工夫などがあった。

一方、留学生など多様化する学生への対応の課題としては、文章力・語彙力、理解力、コミュニケーション能力等の学生間の差が大きくなっていること、高齢期のイメージができずその生活をイメージできない、生活体験が少なく生活感がないために利用者の困りごとがわからない、生活習慣や文化の違いによる理解の相違などがあった。また、学内での学びを介護実習で活用でいないといった課題もあげられていた。

## ②実習施設で介護過程の展開を指導する上での課題と連携の工夫

実習施設で介護過程の展開を指導する上での課題に関する代表的な意見を集約し、7つのキーワード(その他を含む)を抽出した。そのうち、最も意見の多かったキーワードは、「指導方法・内容の差」(16件)であった。次いで、実習施設で「介護過程が展開されていない」(14件)、「多忙・人材不足」「学校により介護過程の様式やシートが違う」「期間設定が難しい」「生活課題の捉え方」(各3件)であった。また、7つのキーワードとその内容を分析し、課題を「実習施設や実習指導者によって指導方法や指導内容に差がある」「養成校で教授している内容と実習施設での指導に乖離がある」「学生の学習到達度の設定」の3つに集約した。

実習施設や実習指導者によって指導方法や指導内容に差が生じている現状には、実習指導者の介護過程のとらえ方や介護実習への関わり方、実習施設の方針等により介護過程の展開を一律に行うことの難しさがあげられた。また、ケアマネジャーの視点からケアプランと混同して介護過程の指導を実施しているなど、養成校で教授している介護過程の指導と実習施設が行う指導に乖離が生じ、学ぶ学生が混乱する状況に陥るなどの課題もあった。

これらの課題を改善するためには養成校と実習施設の連携が重要である。例えば、実習指導者を招いての事例報告会、事例研究発表会などの報告会、養成校の教育方針、指導内容や指導方法を共有する場の設定、実習の反省や次年度の実習の調整、介護過程の説明や介護過程の展開方法と様式の理解を行う連絡会などを実施している養成校もあった。また、介護実習期間中に介護過程を指導する教員と実習指導者とが、その具体的な指導内容や指導方法を共有できる関係も必要である。その工夫としては、例えば、実習指導者研究会を開催して介護過程等の説明、出前講座の実施、授業内容や学習進度の資料化と実習指導者等への配布、介護過程マニュアルの作成と配布、ケーススタディ(教授方法バージョン)の共有、巡回時の介護過程の指導に同席依頼などがあった。また、介護実習開始前に実習施設を訪問し事前打ち合わせを実施する養成校では、教員が実習指導者と教育目標や指導方法、指導内容の確認、記録などの記入方法、実習生の理解度等を共有していた。実習中においては、学生・実習指導者・教員の三者に

よる介護過程を指導するためのカンファレンスを実施していた。

次に、学生の学習到達度の設定には、介護計画の展開が円滑に実施できず、実習の設定期間内に介護計画を立案することが難しい、立案した介護計画がレクリエーションやリハビリテーションに偏っているなどの課題があった。学生が実習期間内に介護過程を学び終えるための学びの工夫としては、事前に実習施設に 2~3 名の受け持ち利用者の候補の選定を依頼し、学生が早めに対象者を決め、情報収集に取り組めるようにしていた。また、実習中盤に 3 日間の登校日を設定するなど帰校日の設定や巡回指導の回数を週 2 回に増やす工夫、家族と関わる機会や他職種から話を聴く機会の設定、サービス担当者会議やケアカンファレンスの参加など多様な学びの機会を提供することによって利用者理解を深め、生活課題を多面的に掘り下げて分析することにつなげる工夫があった。

また、実習施設で介護過程の展開を指導する上での多様な課題の背景には、介護過程とケアプランとの関係が曖昧なことや、介護過程を展開する様式が養成校によって異なること、実習施設で介護過程の指導ができる介護職員が十分ではないこと、介護人材不足、業務の多忙さなどが伺えた。養成校や教員はこれらの背景も鑑みながら実習施設や実習指導者と連携し、学生が実習施設で介護過程を学び身につけることができるように、学生個々に応じた具体的な指導方法などの共有を図る必要がある。

# ■第3章 実習施設対象ヒアリング調査

## 1 目的

本調査研究事業においては、介護福祉士養成施設と実習施設の介護過程の教育・指導の状況を把握・分析するとともに、モデルケース等を含めつつ、教授や指導の課題とともに工夫やポイントを内容とする「介護過程の教授と指導の事例」(本報告書第II部)を作成する。

本ヒアリング調査は、実習施設における介護過程の展開の指導、養成校との連携について実態や課題を把握し、「介護過程の教授と指導の展開事例」作成の資料とすることを目的に実施する。

## 2 調査実施の概要及びヒアリングガイド

ヒアリングは5地域、6回、合計17名を対象に実施した。次ページのヒアリングガイドを事前に対象者に周知し、同ガイドに掲載されている項目に従いヒアリングを実施した。

対象者は、本調査研究作業部会委員より推薦を受け、調査協力に応じてくださった事業所(実 習指導者等)を対象としている。

(開催・実施順)

実施	実施日時·場所	ヒアリング 対象者
ヒアリング調査 東京	令和 2 年 2 月 1 日(土) 1 4 : 3 0 ~ 1 6 : 3 0 ビジョンセンター新宿 1 0 0 5	介護老人福祉施設 計4名
ヒアリング調査 熊本	令和2年2月2日(日)10:30~12:00 介護老人保健施設 フォレスト熊本	介護老人保健施設 計1名
ヒアリング調査北海道①	令和2年2月3日(月)18:00~20:00 札幌医学技術福祉歯科専門学校コミュニティルーム	介護老人福祉施設 介護老人保健施設 計2名
ヒアリング調査 北海道②	令和2年2月4日(火)18:00~20:00 旭川大学短期大学部3階平野研究室	介護老人福祉施設 介護老人保健施設 計2名
ヒアリング調査 仙台	令和2年2月5日(水)10:00~11:00 特別養護老人ホーム 梅が丘	地域密着型介護老人 福祉施設 計1名
ヒアリング調査 大阪	令和2年2月16日(日)13:00~15:00 大阪人間科学大学正雀学舎 1号館3階1306教室	介護老人福祉施設 介護老人保健施設 認知症対応型共同生活介護 小規模多機能型居宅介護 計7名

#### 令和元年度 介護過程展開の実践力向上のための調査研究

#### ヒアリングガイド

#### 1 ヒアリングの目的

- 標記調査研究事業においては、介護福祉士養成施設と実習施設の介護過程の教育・指導の状況を把握・分析するとともに、モデルケース等を含めつつ、教授や指導の工夫やポイントを内容とする手引書(仮称)を作成する。
- 本ヒアリング調査は、実習施設における介護過程の展開の指導、養成校との連携について実態や課題を把握し、手引き作成の資料とすることを目的に実施する。

#### 2 今回のヒアリングの概要

■日 時: 令和○年○月○日(○) ○○:○○~ 実施時間は2時間程度を予定

■方 法: 以下の実施者による、グループでのヒアリングを実施

#### 3 ヒアリングの内容(項目)

- ①-1介護過程の指導においてどんな工夫をしていますか。
- ① 2 その効果はどのようなものですか。
- ②介護過程の指導において困っていること、課題は何ですか。
- ③介護過程の指導について、養成校への意見や要望はありますか。

#### 4 ヒアリングにあたっての留意事項

- ヒアリングは、記録のため録音をさせていただきます。記録した音声データは、研究終了後、廃棄いたします。
- 記録として、ヒアリング風景の写真を撮る可能性がございます。不都合な場合はお申し出ください。
- ヒアリング内容は、本調査研究事業の成果物である手引きの作成において活用します。
- 後日、お電話等にて追加の聞き取り、内容の確認・ご相談をお願いする場合があります。
- ヒアリング協力者として、お名前とご所属を報告書に記載する予定でおりますが、掲載不可の場合は 以下にお申し出ください。

▼ご不明な点につきましては、以下にお問い合わせください。

公益社団法人 日本介護福祉士養成施設協会 事務局 渡辺 祐介(watanabe@kaiyokyo.net) 〒113-0033 東京都文京区本郷 3-3-10 藤和シティコープ御茶ノ水 2 階

(https://goo.gl/maps/dnvQAiUW7jKawwRS8) TEL: 03-3830-0471 FAX: 03-3830-0472

## 4 ヒアリング結果(実施順)

## (1) ヒアリング調査\_\_東京

## 【要旨】

## ■ 1 介護過程の展開を指導するにあたり困っていること、課題と感じていること

- ・学生が対象となる利用者さんを選ぶ時に、情報収集しやすい人、コミュニケーションをとりや すい人を選ぶため、同じ利用者さんに集中する傾向がある。
- ・何故その人を対象に選んだのかを問いかけても、明確な回答ができない学生がいる。
- ・情報収集しやすい利用者、コミュニケーションをとりやすい利用者となると、比較的介護度が 軽く、介護計画が身体介護に関する内容というよりレクリエーション中心になりがちである。
- ・アセスメントにおいて、利用者さんが「買い物に行きたい」と発言すると、目標が「買い物」 になる場合がある。その人の経済的状況や家族状況から、実際には買い物は難しい、必要ない ことがある。発言=目標になりがちで、色々な側面を統合したアセスメントが難しい。
- ・アセスメントをしても、それが介護計画に結び付かないことがある。
- ・介護実習において、「学生としてできることを計画しなさい」という前提での目標設定となる と、本当の利用者のニーズやアセスメントとつながりにくくなる。外気浴、散歩などをして目標達成となってしまう。目標の達成は、実習期間中に完了することもあれば、その後の生活で達成されるべきこともあってしかるべきだと思う。アセスメントがしっかりできているのか、できていないのかが重要だ。
- ・実習が終わって実習生がいなくなった後どうするかを考えて、介護過程を展開するのではなく、 実習期間であろうとなかろうと、本来の情報収集ができていれば良いのではないか。
- ・学校や学生は評価までしたいという希望をもっていることがあるが、やってみてうまくできない時があり、達成できるプランに変えることがある。なぜできなかったのかを学ぶことも大切なのではないか。達成することだけが目的ではないことを伝える。うまくいかなかったことの「気づき」も自信になる。

## ■ 2 介護過程の展開を指導するにあたり工夫をしていること・その効果

- ・しっかりと時間をとって、巡回指導を実施していただいている。フロア担当者・実習指導者・ 教員 → 教員・学生 → 実習指導者・教員という流れで実施している。巡回指導をしっか りやる・やらないによって、成果が違うと思う。巡回指導をしっかり位置づけていることは、 介護実習の成功に通じている(巡回指導は3時間~半日)。
- ・巡回指導は、教員を交えての話し合いであり、フロアの職員の自信とスキルアップ、やりがいにもつながるので良い機会となっている。新しい学びに取り組んでいる学生から学ぶ機会にもなり、職員にとっては自分たちの学びを振り返るとともに、初心に帰ることができる機会になっている。
- ・卒業生が実習指導者として対応することで、実習生にとって安心感や質問のしやすさを支援している。

- ・計画を作成するプロセスにおいては、他職種の意見も聞くようにしている。
- ・実習報告会に参加した時、学生が実習で困ったことを話していた。それを聞いてから、施設で「実習の振り返りシート」を作成し、その日の目標、困ったこと、話を聞いてみたい職員はいるか等々、書くのに5分程度の用紙をつくり毎日記入する取り組みをしている。学生も聞きたいことを聞く努力はしているが、言いだせないことがあるので、施設側から歩み寄って聞きだす取り組みである。職員に対することも書いてくれていて、職員の励みになる場合もある。また、実習生に関する職員の連絡ツールにもなっている。なるべく負担にならないようなもの、補助ツール的な位置づけである。
- ・学生に「いつでも聞いて」と言っているが、聞けない現場の状況がある。そこで実習期間中は質問タイムを1時間~1時間半ほど設けている。一日を振り返る時間であり、明日につなげる内容の話し合いでもある。スタッフも知識のばらつきがあって、学生が困ってしまうことがある。それをなくすために、課長(同じ視点で見られる対応の立場の人、その日担当した職員以外のほうが言いやすい場合がある)に対応してもらっている。
- ・フロア担当が振り返りをして、学英に関する申し送りシートをつくり、次回の担当と情報共有 をしている。実習中にやった内容をグラフ化(この学生は一部介助をどこまでやったかなどを 見える化)し、その学生の取り組みの程度を、だれが見てもわかるように共有している。一人 ひとりの実習生にシートがある。初めは新人職員用の申し送り用だったが、実習生用に変更し て使用している。
- ・実習生の計画を職員全員が見ることができ、実習生の実習内容の申し送りをPCで閲覧できる 仕組みをとっている。PCではない時代は口頭でやっていたが、職員間でも言えないことがあ ったりしたが、それがなくなった。
- ・多職種を入れた模擬カンファレンスをしている。巡回指導時に設定して教員にも参加してもら うこともある。その時の教員の指導が、職員の学習にもつながっている。

#### ■ 3 介護過程の指導について、養成校への意見や要望はありますか

- ・「実習施設さんにお任せ」と丸投げの学校がある。学校との連携は必要である。
- ・例えば指導が難しい学生について、その背景や理由等をある程度は伝えてほしいが、学校としてどこまでを担当の職員に伝えていいのかを教えていただきたい。
- ・記入するシートについて、学校によっては記入例や書き方を記載したものを渡してくれる場合 もあるが、何もないところがある。留学生の多い学校は細かく書いている場合が多い。本来は 学生のためではあるが、施設の職員や実習指導者のためにもなっているので、記入例や書き方 を記載したものがあれば助かる。
- ・複数の学校からの受け入れをしている立場からすると、シート等について、ある程度統一的な ものであれば有難い。
- ・学生の介護過程に関する修得度が低く、介護過程の理解があいまいな学生が多くなっている。 一人ひとりについて、どこまで指導しないといけないのかわからないことがある。気をつけて ほしい部分やレベルを共有したい。
- ・巡回指導の時間をしっかりとっていただきたい。
- ・先生とお話しする時間が少ない、先生との情報共有が必要と感じている。
- ・介護過程を学びに来る留学生についてとても心配。フロアの実習指導者とも相談しながら、学

生に合わせてやるという合意を共有した。他の学生と比べないように気をつけたい。とにかくどうやって指導できるか心配である。

## ■ 4 全体をとおして(所感)

- ・対象となる利用者を選ぶ段階からアセスメント、介護計画の作成に至るまでの過程での指導の 迷いや課題があげられた。養成施設を対象とするアンケートでも同様の傾向があり、実習にお いても同様であった。
- ・実習生を受け入れることは、実習施設の職員の知識や技術の向上にも寄与できると実習施設側 も認識しており、養成施設の教員が、実習指導者や実習生だけでなく、現場で指導をしている 職員に対しても積極的にアプローチできれば、養成施設・実習施設・実習生の三者の連携によ る介護過程の学びがより深まることになる。
- ・学生の実習中のつまづき (困っていることや質問できないこと) を解消するために振り返りシートの作成等の工夫や、修得度等を職員間で共有するために申し送りシートを作成する等、実習施設は実習生を育てるという意識のもと、実習生に対する独自のサポート、指導の工夫や取り組みが行われていた。
- ・今回のヒアリングをとおして、他施設の取り組みが参考になったという声が参加者から聞かれた。実習施設における工夫例などの共有が推進されれば、介護過程の展開の指導や介護実習全体の充実につながると感じた。

## (2) ヒアリング調査 熊本

## 【要旨】

## ■ 1 介護過程の展開を指導するにあたり困っていること、課題と感じていること

・以前は実習指導をする体制が整っておらず、申し送りミスや指導ミスで実習生に辛い思いをさせることもあったが、今は指導者間でも申し送り方法を徹底することや、何かあればすぐに養成校に連絡をとり、対応して次につなげているので、大きく困っていることはない(現場でのケアの統一にも力を入れているので、実習生が別の職員に質問をしても同じような根拠が説明できるような体制がとれている)。

## ■ 2 介護過程の展開を指導するにあたり工夫をしていること・その効果

- ・実習生を受け入れるための職員教育を徹底している。各フロアに4名ずつ実習指導者研修修了者を配置しており(現在施設内に10名)、実習を受け入れる姿勢から現場職員に指導ができるような環境をつくっている。半分程度の職員が介護過程を確実に理解できていると思う。
- ・マニュアル整備を徹底している。受け入れの時点から、説明会や書類作成、指導方法について まで記載しており、誰が見てもわかるようにしている。
- ・介護過程についての施設内研修等は実施していないが、現任研修としてアセスメントについて 詳しく周知する機会をもっている。実際に日々のケア実践の中で展開できているので、実習指 導者以外の人でも介護過程についてある程度は答えることができる状況にある。
- ・実習説明会に参加した際、受け入れる実習生に簡単な自己紹介カードのようなものを記入して もらっている。長所・短所を記入する欄があり、そういった部分を参考にしながら、個々の学 生の特性を活かして指導を行うようにしている。また、養成校の教員に授業の様子を記入して もらい、実習指導の参考にしている。先入観を持たないようにするために、その用紙は実習開 始後しばらくしてから見るようにしている。
- ・担当利用者は学生自身が決めている。事前調査でどのような利用者を担当者に選びたいか(介護度や障害状況等)学生に聞いている。事前調査に近い利用者を5名程度ピックアップしておき、実習開始時に実習生にその方々とコミュニケーションをとるように勧めてみる。その中から担当利用者を決定する実習生もいるし、ピックアップしていた利用者以外から担当利用者を決定する実習生もいる。2日程度で担当利用者が決定できるためすぐに情報収集に入れる。
- ・利用者、家族にも必ず実習生が担当になりたい旨を説明し、承諾を得ている。承諾を得られなかった場合は、別の人に担当を決めるよう促している。
- ・情報収集の際、まずは記録物等を見せるようにしている。フェイスシート等に記載されている情報が古いこともあるので、その情報が正しいかどうか確認するよう実習生に話をしている。 1~2 日で情報収集シートをある程度埋めることができている。
- ・アセスメントの際、なるべく答えを言わないようにしている。情報収集に不足があってもヒントを与えて本人が気づくように促している。情報の解釈・関連づけ・統合化では、頭の中にイメージできているものを言葉にできない実習生が多い。時間はかかるが、できるだけ実習生の考えを引き出し、言葉にする作業を一緒に行うようにしている。
- ・実習生の考えを引き出そうとしても、展開に行き詰ってしまう実習生もいる。現場で行われて いる実践と結びつけて話をする場合や、実際のプランを見せることもある。そこから本人に気

づかせるような方法をとっている。

- ・実習生からは『排泄ケア』に関する生活課題が多くあがっている印象。立案の際にすぐに実施 に入れない内容を立案しようとする実習生もいる(例:介護ロボットを取り入れる等)。その際 には、違う支援方法に本人が気づけるよう促しを行っている。
- ・実習生が養成校に戻る際、立案した個別援助も終了する形にならないように、立案の時点で継続性も含め考えてもらっている。継続して成果が出た場合は、養成校を訪問した際に「あなたのケアが続いているよ」と実習生に声をかける。実習生はとても喜んでいる。
- ・職員よりも実習生の方が利用者の小さな状況に気づくことがある。(例) ズボンのゴムがきつくて自分でズボンを下せないことを学生が気づいた。ゴムを緩めることで排泄動作が自立したケースがある。そういった気づきは大切にし、実習生をしっかりと褒めるようにしている。
- ・外国人留学生を実習生として受け入れる際、理解度の把握が難しい。理解していない内容でも 「はい」と言ってしまう傾向にある。フィードバックや記録の時間等で関わる時間を、日本人 の実習生よりも多くとり理解につなげるようにしている。
- ・外国人留学生の出身国によっては「高齢者を敬って何でもお手伝いするのが優しさである」と 教えられて成長してきた実習生もいる。自立支援とは何かということを現場にある実際のケア 場面で説明し理解してもらっている。

## ■ 3 介護過程の指導について、養成校への意見や要望はありますか

- ・まれに用紙の記入方法を理解していない実習生がいる。記入内容はサポートするので記入方法 だけは周知させてもらいたい。
- ・帰校日に何を話したのかどのように指導したのかを教えてほしい。それを踏まえて帰校日以降 指導を行っていく。養成校によっては指導内容をワードで送ってくれるので参考になる。
- ・養成校の教員が実習生に指導をして、スムーズに展開できた際の指導方法が知りたい。何が良かったのか、ヒントになったのかを知り、自分たちの指導方法に活かしたい。
- ・施設職員も職能団体の活動に参加することや研修会に参加することで、養成校の教員と知り合いになり関係性ができてきた。双方が一緒に介護福祉士という資格を育てる気持ちが大切だと 思う。

## ■ 4 全体をとおして(所感)

- ・各養成校で介護過程の展開方法や最終到達目標も違うため、実習施設が各養成校に合わせて指導を行っている現状を再認識した。今後、各養成校が展開・指導方法の共有を行う機会を持つことで、介護実習の充実につながると感じた。
- ・実習施設によっては指導者が一人で実習生を指導する責任を背負い、なかなか充実した実習が 行えていない現状がある。今回のヒアリングを通して、指導者が変則勤務でも実習生に対して 統一した指導が行えるように様々な努力をしていることがわかった。これらの取り組みを各実 習施設で共有する機会が必要だと感じた。
- ・今回ヒアリングを行った実習施設では、養成校との連携を密に行っていた。養成校側から実習 施設に働きかけ、良好な関係づくりが行える工夫が必要だと感じた。そういった取り組みを行 うことで、実習内容が充実するだけでなく、実習施設で自分たちが提供しているケアを見直す 良い機会になると感じた。

## (3) ヒアリング調査 北海道①

## 【要旨】

## ■ 1 介護過程の展開を指導するにあたり困っていること、課題と感じていること

- ・実習施設側の指導方法について課題がある。統一した指導を行うことについて、介護福祉職の 見解が異なる場合がある。学生側は何が正しいのか、迷ってしまうのではないか。
- ・実習指導者のスキルが安定しない、指導経験年数の浅さがあること。
- ・学生は、コミュニケーションしやすい利用者に偏る傾向がある。志望動機が簡単で、取り組みやすい利用者に偏る。何故その利用者を決定したのか理由が不明確である。総まとめの実習としての学びにつながらないのではないか。
- ・学生の情報収集の取り組みについて、特に「利用者本人の思い」を汲み取ること。それを文章 化することに時間がかかる。実習指導者からの質問に、学生は「(その情報を)入れていいんで すか」と答える。
- 何気ない会話の中にある情報を捉えていない。
- ・学生は利用者のことを、よく観察している・良いかかわりをしているのに、その場面の重要点 を流してしまう。あるいはマイナスな面ばかり捉えて、プラスの側面を捉えていない。
- ・実習施設側として実習プログラムを決めているが、情報収集に時間を要し終わらない。介護過程の情報収集以降の実践時間が少なくなってしまう。
- ・学生が「何を聞いたら良いか」「こんな質問しても良いか」「質問することがマイナスなのでは」 と考えている。わからないことのほうが当たり前なのに、自信が持てないのだろうか。
- ・書くこと、用紙の空欄を埋めることに傾注し、分析で求められる「考える」ことに時間を割いてもらいたい。
- ・学生自身が考えている介護計画はありそうだが、情報の解釈・関連づけ・統合化ができない。 でも情報収集はできている。
- ・取り組みたいことは、頭に浮かんでいる。言葉には表せている。でも生活ニーズを列挙(文字に)することに苦労しているようだ。

#### ■ 2 介護過程の展開を指導するにあたり工夫をしていること・その効果

- ・学生と面談する。実習プログラム内で具体的期日を設定し、実習指導者から学生に指導する。 具体例としては、カンファレンスで言語化、文章化が円滑に進むようカンファレンス前に確認 し、内容と展開の道筋を指導者・学生間でプレカンファレンスを行っている。
- ・実習指導者の勤務を日勤帯にし、直接質疑応答できる環境をつくっている。毎日の振り返りが可能となり、介護過程ほかの助言がしやすくなった。学生も質問してくれるようになった。実習学生が少ない時代だからこそ、じっくりと関われる。良い成果だと思う。
- ・学生指導を重ねるうちに学生の特徴が理解できるようになってきた。性格、長所、短所、趣味、 着目しているところ、クラスにおける自分の立ち位置、キャラクターなど。それに応じた指導 を心がけている。

- ・実習指導者から、各現場の介護福祉職に発信し、誰に聞いても回答できるようにしている。状況により学生が、実習時間内に調べられる時間も確保している。
- ・考えること(疑問をもつこと)が実習現場では必要になることを教えている。すべてにおいて、 介護する理由があるから。
- ・生活支援技術について見学が多いという意見もあり、できるだけ生活支援技術は体験をしても らっている。

## ■ 3 介護過程の指導について、養成校への意見や要望はありますか

- •「実習施設さんにお任せ」と丸投げの学校がある。それはそれで良いが、学校との連携は必要である。
- ・例えば指導が難しい学生についてその背景や理由等をある程度は伝えてほしい。実習施設側が 実習生を受け入れることは、将来的に優秀な人材確保につながる。実習施設側への課題があれ ば教えてほしい。
- ・一緒に指導して、学生を育てていきたい。実習指導者会議で色々と教えてほしい。
- ・学生はどのような施設だったら実習がしやすいのか教えてほしい。
- ・提出物が多い。日誌のやり取りの効率化が図れたら。今はパソコンも使えるし、電子メール (パスワードをかけて)でやり取りすると、実習指導者と学生間でスムーズに行えるのではないか。

## ■ 4 全体をとおして(所感)

※36ページの「4 全体をとおして(所感)」にまとめて記載。

## (4) ヒアリング調査 北海道②

## 【要旨】

## ■ 1 介護過程の展開を指導するにあたり困っていること、課題と感じていること

- ・学生個々人の差が大きいと思う。養成施設で教えていることを、しっかり理解している学生と、 理解することが難しい学生がいる。
- ・学生が利用者のことばをひろう(収集する)ことが難しくなっている。自分で何かを感じる、 キャッチすることが難しい。
- ・積極的に質問ができる学生とそうでない学生がいる。
- ・情報収集が疾病、心身機能に偏る学生がいる。なぜその生活をしているのか、その人の生活背 景を捉えることの重要性を指導しても、難しい学生がいる。
- ・ケーススタディの対象者の選択について、コミュニケーションをしやすい人を選択理由にする。 この利用者さんを担当してみたいという関心がない。
- ・実習プログラム(時間)が足りなくなってしまう。介護過程の取り組みやすい人に目が行く。
- ・養成施設で準備している記録用紙のどこに書いて良いか理解していない学生がいる。整理する ことが難しい。
- ・情報の解釈・関連づけに苦労している。学生自身、情報収集はできているのに、分析になると、 途端にできなくなってしまう。
- ・実習施設の職員により、言うことが違うことがあり、学生が困ることがある。

## ■ 2 介護過程の展開を指導するにあたり工夫をしていること・その効果

- ・利用者から得た情報は日々変わるものであり、収集した以降も日々観察することが大切である ということ。
- ・全職種から情報をもらうと、利用者の全体像が理解できる。
- ・毎日の実習の最後に反省会をする。学生には質問をもってくるよう指導している。またその日 の実習から何を学んだのか言語化してもらっている。
- ・実習指導者へ随時質疑応答できるよう環境づくりに配慮している。勤務時間も日勤帯にしている。
- ・利用者の生活背景を理解させ、学生に興味を持たせるために、昔のことを調べさせる。
- ・情報収集後の分析につまづく学生には、先ずこの利用者にどのようになってもらいたいか考え させ、その理由を述べさせ、どの情報からそれを考えたかを段階を追って言語化させている。

#### ■ 3 介護過程の指導について、養成校への意見や要望はありますか

- ・例えば指導が難しい学生についてその背景や理由等をある程度は伝えてほしいが、学校として・ 学生個々人の力量の差がある。介護福祉士に是非なってほしい素敵な学生がいる。
- ・提出物が多い。大変そうである。パソコンを活用し、取り組みやすい環境を促進させる。

- ・自分たち(実習指導者として)の指導が適切なのか。指導が正しかったのか明確に言えない。 手探り状態でもある。
- ・養成施設の教員が「現場にお任せします」というが、それが困る。実習施設指導者に求める指導を明確にオーダーしてほしい。実習カンファレンスも三者で行うと効率も良いと思う。養成施設の訪問日も明確にしてもらえると待機して来訪に備えることができる。
- ・学生が複数で同施設に来る場合、学生の関係性により成果が違う。学生の実習環境が大切なの だと思っている。
- ・実習指導者同士の情報共有できる機会を設けてほしい。例えば研修の企画などを養成施設の教員が企画してくれるとありがたい。
- ・介護過程の様式が、学校ごとに違う。なんで一緒にならないのか。記録物(様式、スペース) にもそれぞれの特徴がある。指導しづらい部分がある。

## ■ 4 全体をとおして(所感)

- ・利用者を決定する際、「担当してみたい・関心がある利用者」というより「コミュニケーション しやすい利用者」「実習期間内に介護過程を終えることができる利用者」が基準となっている 傾向を実習指導者は気にかけている。
- ・情報収集では、利用者の全体像を理解することが求められるが、疾病、心身機能に着目しがちで、利用者個人がどのように生きてきたのか(生活背景、個人因子)という側面を捉えることに苦労している傾向がある。
- ・実習生は、コミュニケーション・観察を通じて利用者のことを捉えていることが言語化でわかるも、文章化となると困難になる。特に分析(情報の解釈・関連づけ・統合化)において顕著にあらわれる。
- ・実習生の介護過程の取り組みにおいて生じた疑問点、解決しなければならない点について、実習指導者等へ確認することができない、あるいは躊躇する、あるいは着眼点がわからない。実習プログラムの進度にも影響を及ぼすことになる。
- ・上記に対応するため、学生が実習しやすい環境づくりに力を入れていることが理解できる。毎日学生とコミュニケーションし、質疑応答の機会を確保する。実習指導者以外でも対応可能な情報共有をしている。具体的指導方法としては、学生に言語化させること。介護する根拠は何か意識させる(あるいは考えさせる)こと。体験できる機会を確保すること。利用者の背景を調べさせることを取り入れている。
- ・養成校への要望として、実習施設へのお任せではないということ。実習指導者自身も、指導の 妥当性・適切性・タイミングについて問題意識を持っており、養成施設(教員)との連携及び 要望を求めている。具体的には実習指導者会議の充実である。実習指導者同士の情報共有の機 会を増やす。養成校から実習施設にどのような実習が望ましいかオーダーする等があがった。 養成校と実習施設の連携を要望していることが伺える。
- ・「同じ介護過程なのに、何故学校ごとにバラバラなのでしょうか」という意見がある。実習施設 での指導にあたり、介護過程の記入様式の統一化をしてほしいという要望があげられている。

## (5) ヒアリング調査 \_\_ 仙台

## 【要旨】

## ■ 1 介護過程の展開を指導するにあたり困っていること、課題と感じていること

- ・体感ができていても言葉や文章で表現ができない学生が多くなっている。カンファレンスの合間に確実にシートをみるようにしているが、それでは補えない学生もいる。
- ・文章化が難しい学生には、対話で学生の考えや思いなどを聞くようにしているが、中には、それも難しい学生がいる。
- ・学生個々のできる・できないを把握、職員で共有し、指導に当たっているので、学生の能力差に困るといった感じはない。しかし、最後の実習なのにこれで介護福祉士の質の担保という点で、大丈夫かなという不安が残ることもある。
- ・外国人留学生を受け入れた時、考え方が違うというのはわかってはいたものの、実習最後の感想文などをネットで調べて転写するというのが当たり前になっているという現実がある。できないならできないという素直な感想がほしいところだが、なかなか難しいことだと感じている。
- ・コミュニケーションが難しい(スムーズにいかない)学生が増えたように思う。担当の利用者が複数人いる場合、話をしやすい受持ち利用者とだけ会話しようとするなど。
- ・実習後のアンケートに"もっとみてほしかった(記録の書き方や考え方など)"という要望があるが、今以上に指導する時間の捻出が難しい。
- ・指導者の指導スキルの向上や均一化を図っていきたい。

## ■ 2 介護過程の展開を指導するにあたり工夫をしていること・その効果

- ・教員との情報交換、コミュニケーションを通して、学生の特性をつかみ、能力に応じて指導するよう心がけている。
- ・実習を受け入れる体制として、実習指導者(本人)を中心に、室長補佐及び各ユニット(4つ) のリーダーに加えて多職種にも協力をもらいながら対応している。カンファレンスには、看護 職も参加するので、看護の視点からの助言も入る。
- ・担当の利用者を学生が選択するという自由度を妨げることになるかもしれないが、あらかじめ こちらで決めて、事前に基本的な情報をある程度提供、オリエンテーションの際にその方に会 うなどさせている。学校側もしっかり勉強して臨むように指導してくれているようで、ある程 度の予備知識をもってスタートがきれるので、何もわからない数日間の戸惑いが少なくなるよ うだ。
- ・職員の指導レベルの向上及び均質化が図れると、もっと幅広く教えていけるので、コーチング の研修など行っている。
- ・実施が難しい学生には、一緒にやってみる。自分がやって上手くいかない学生には、やって見せて、その後時間をとって、何が違ったんだろう、次はどうすれば上手くいくか等、問いかけ確認をした上で実施(実践)させている。
- ・記録類は、ユニットのリーダーがこまめにみて、誤字脱字、言い回しなど都度指導している。

- ・実習では、コミュニケーションが大事、しかし、そのコミュニケーションが苦しい学生もいる。 養成校を卒業した職員がほとんどなので、自分の経験をもとに、利用者とのコミュニケーションのフォローをする姿勢がある職員が多い。
- ・実習中の指導内容や状況を記録し、実習評価票と一緒に学校に提出している。また、学校から も学生の様子や帰校日での状況など、巡回時のみならず電話やメールで連絡し合っている。こ のような連携が維持できればと思う。
- ・巡回指導時、ユニット(現場)に教員が行き、職員から話を聞いたり、利用者と会ったりして もらっている。
- ・養成校の教員から、最新の技術や用語などを教えてもらう勉強会を開き、学生とのギャップを 埋めるのに役立っている。また、座談会などコミュニケーションの機会をつくっている。

## ■ 3 介護過程の指導について、養成校への意見や要望はありますか

- ・教えるために職員も勉強が必要なので、新人教育や職員自身の勉強につながっている。
- ・2 校の受け入れを行っている。記録の様式が違うが、それぞれの思考のアプローチや意図が読み取れて「なるほどな」と思う。しかし、観察項目をたくさんチェックする様式の場合、チェックに当てはまらない状況というのが介護にはたくさんあるので、その他のところの大切さを教えていくことが大事だと思う。
- ・カンファレンスの教員の発言、考え方に触れ勉強になる。
- ・外国人には、ポケトーク等のツールを用意してもらうと細かいことのコミュニケーションに有 効なのではないかと思う。
- ・介護職を目指す学生が少ない中、介護福祉士を目指す学生は貴重な存在だと思う。適性に問題がある学生もいるとは思うが、型にはめるという意味ではなく、この職業に適するように関わるのが実習施設にできることだと思っている。

## ■ 4 全体をとおして(所感)

- ・介護実習における介護過程のねらい、重要性などよく理解し、施設全体として受け入れる姿勢、 育てようとする姿勢がある施設では、実習した学生が就職につながるケースも多く、良い循環 になっている。
- ・実習施設からは実習巡回、カンファレンスなどにおける教員のかかわり方も問われており、また、学内の授業へ実習施設の職員を招聘するなど工夫の余地がある。改めて、学校と施設の連携の重要性を認識した。

## (6) ヒアリング調査 大阪

## 【要旨】

## ■ 1 介護過程の展開を指導するにあたり困っていること、課題と感じていること

- ・介護過程の展開のアセスメント部分について難しい学生がおり、教え方の難しさを感じている。 教え方として例えばヒントを出しながら、学生自身が考えながら理解できるように導いている。 計画において、実現可能な目標を設定するように、また短期目標では評価できるものを実習指 導者として伝えているが、学生自体の評価ができるのかなど、学生と指導者との温度差があり、 学校でどのように教えているのか、擦り合わせが必要かと思う。
- ・特別養護老人ホームには入所要件があり、入居者が重度化している。学生が理解を深めていく には、コミュニケーションをとりやすい対象者が少なくなってきている。
- ・学生がきめ細やかにアセスメントしているが、入居者は日々良くなることばかりではない。学生にはそのイメージが難しく、悩んだり、落ち込むことがある。ケアの目的に結果がでない部分、達成できない部分があることを、仕方ないこと、そういうものだと伝えるだけではなく、どのように伝えるのか難しい時がある。
- ・アセスメントについて、学生は一生懸命にシートに書いているが、問題や課題にだけ着目している場合が多く、課題の焦点が大きくなり、その方の過去の生活、背景や生活の豊かさに着目した目標設定につなげていくところが難しいのかと感じる。
- ・自施設において、介護過程をしっかりやっている職員が少ない。新人職員が6年入ってきていないこともあり、職員と学生とのギャップがあるが、その部分を埋めていくのが実習指導者である。学生が結果を残せないことがあるが、それが現実であることも知ってもらう。
- ・実際の現場では、ケアプランがあり、経験知や職員の思考から一足飛びで計画につながっており、アセスメントからの根拠をもとにしたシートを起こすことがないところがある。
- ・実習期間が限られているため、学生を見て「どうなるのかな?」と思っても、最終が決まっているためアセスメント不足があっても目をつぶってしまうこともある。介護過程の展開、アセスメント、計画で具体的に書き方を出してあげることもあり、学生自身の力では無理かなと思う時もある。学生が実習を嫌にならないように思うことが大事と思っている。持ち帰って自宅でもしっかり記録も頑張っている学生には、多少手伝う時もある。
- ・介護過程の展開でアセスメントをするためにはコミュニケーション技術が必要になるが、学生 に情報収集の段階から援助技術を活用することを伝え、情報収集の仕方から指導するようにし ている。日誌にどう書いているのか、日々の積み重ねが重要になり、学生の考えの引き出しも 大事にしている。
- ・学生に多くの入居者を経験させてあげれば良いのか、一人にじっくり付くのが良いのかを考える。学生にとって一人の入居者に付くことは難しく、どうしていいかわからないところがあり、手持ち無沙汰になってしまうようである。遠くから観察していれば良い時もあるが、技術優先でいくのかアセスメント優先であるのか、難しいことがある。学生一人ひとりの違いがあるので、学生を見ながら行っている。

## ■ 2 介護過程の展開を指導するにあたり工夫をしていること・その効果

- ・振り返りや記録として、何を書けば良いのかわからない、アセスメントが中々できない学生がいる。学生には、どこを知りたいのか、なぜ知りたいのかも深めるために一緒にアセスメントするようにしている場合もある。
- ・実習当日の目標を時間をかけてしっかり聞いている。その日の目標や1日の流れをしっかり聞くことによって身についていき、3週間程経過すると学生から自主的に今日の目標を言ってくるようになっている。
- ・学生には、施設のケアプランを見ないように、まず学生自身がある程度アセスメントした後で 見るようにと言っている。自身でアセスメントを行った後で施設のケアプランを見る方が、な ぜその計画になっているのか理解しやすい。
- ・思考の誘導ではなく、視点の誘導を行っている。見えていないところを見るように、視点を増やすことや多角的視点を持たせるように助言している。例えばAさんはいつもあそこの席に座っている。あそこの席に座っているという事実をいつもあそこになぜ座っているのかを考えてほしい。学生は、情報を整理するのが苦手であるので、目標設定については、スーパーバイズしている。イベント企画になっている場合は修正している。生活の質とイベント的なものとの違いがあることを伝えている。
- ・学生に色々と考えてもらうことが大事である。疑問を持って考えてもらうようにしている。日 誌に書くことが苦手な学生もいる。日誌を見直す(文章の適正化)、一緒に文章が書けるように 見ている。学生の休憩や終了後の時間を利用して行っている。
- ・学生自身の思い込みなど、なぜそう思ったのかを一緒に考えていくと、ちょっと間違っていた のかと修正してくれることもある。話すことはできるが、文章にすることが苦手な学生が多い ため、話したことをここに書いてごらんと導き、文章化することで整理ができるようになる。 褒めてできるように成長を促している。
- ・普段職員ができていないところや見えていないところ、職員では見えなかった視点や利用者からの本音などが聞けたりするなど、実習生を受け入れることで職員、利用者への効果もある。
- ・職員では見られない視点を学生が持っている。入居者は、学生には愚痴を言えている。入居者 のアセスメントからその方の好きなものに特化した物をつくり、入居者が喜び長く使ってもら えることになったことがあった。
- ・学生が切り込んでくれたことが対象者に良い影響を与える場合もある。結果だけではなく、過程が大事になっている。
- ・職員も学生を迎え入れることで、介護の考え方を意識することができた。適切なことも考え、 答えられるスキルも上がる。
- ・介護過程のエビデンスが必要であり、根拠あるケアが必要である。施設の現場職員も勉強しなければならない。
- ・現場教育として実習後も継続してできる目標としてほしいと言っている。洗面台の高さをしっかり観察し、本人が整容できる場所を見出した実習生もいた。
- ・学生の言葉を引き出すことで、徐々に自身の思いを出してくれるようになってくる。それにより現場職員との関係も良くなり、根底に抱えている価値観は違うけれど、介護が楽しく(自分で考えたことが実感としてあること)と感じてもらえる効果もあり、そのことから日誌も良くなってくることがある。

・じっくり時間をかけて学生が介護計画を実践してくれるので、施設で引き続きできることも多くあり、時間をかけて入居者と一緒に行えたことから入居者に良い効果があった。介護過程の 展開は学生が大きく成長できる結果につながっているし、施設のためにもなっている。

## ■ 3 介護過程の指導について、養成校への意見や要望はありますか

- ・介護過程について、学校ではどのような授業をされているのか、学校と違ったことを指導者として言ってはいないかと思うこともある。介護過程の展開を、学校でどのように教えているのか、指導者へどのような指導を期待しているのか。学生のレベルの違いもあるのではないかと思うが、教えてほしい。
- ・学校側から今の学生はこのような傾向があるということを情報発信してほしい。考慮しながら 実習指導していく。
- ・学校からの実習指導者への研修が必要ではないか。
- ・外国人の方が多くなる中、介護過程の展開が専門性の肝であると思うが、どのように教育と現場とリンクしていくのか。介護職が専門職として、いかに介護過程を展開していくのか。学生とは、ウインウインの関係であってほしいので、達成感を感じてもらえるような実習が効果的ではないかと思う。
- ・記録については、学生の苦手意識が多いので、学生時に払拭できるようにトレーニングすることも大事であると思う。
- ・3 年生のケース発表会に実習先として招待された。実習先のことを発表されている時に「すごいな」と感じた。介護を見る視点の広がりがあった(1 年生の意見)ことを聞き、継続していただけたらいいなと思った。学生が今後どう成長していくのか楽しみになり、このような場が必要と思う。
- ・留学生に限らず、どこまで理解されているのかの確認が必要であるかと思う。

#### ■ 4 全体をとおして(所感)

- ・特養では、入所者が重度化する中で、対象者の選定や良くなるばかりではない利用者の状態等を含め、どのように介護過程を指導すればいいのか課題と感じていた。
- ・対象利用者を選びやすいように、利用者の特徴を紹介するなど工夫しているが、コミュニケーションが取れる利用者に集中してしまうことがある。その人ではない人に持っていくことが、 実習生のモチベーションを下げてしまわないかと実習指導者も懸念している。
- ・実習生自身の気づきや思考を深めるため、「何故」という質問を用いたり、一緒に考える工夫を している。
- ・実習生を受け入れることは、職員とは別の視点での気づきがあることなど、指導する上で職員 にとっても学びになると感じている。

## 5 実習施設対象ヒアリング調査のまとめ

今回、養成校と実習施設との連携に向け、実習指導者等へヒアリングを行った。先ず、「介護 過程展開の実践力向上のための調査研究」へご協力いただいた、5地域・17名の指導者の皆様 に厚く御礼を申し上げる。時節柄ご多忙中にも関わらず、調査目的をご理解いただき、忌憚な いご意見を頂戴することができた。

ヒアリング項目は、「1. 介護過程の展開を指導するにあたり困っていること、課題に感じていること」「2. 介護過程の展開を指導するにあたり、工夫している点とその効果」「3. 介護過程の指導について養成校への意見・要望」であった。指導者等へのヒアリング結果から、「介護過程の指導、展開」の現状・課題は、「介護実習巡回・カンファレンスのあり方」「介護実習環境の整備」「指導者の指導力の向上」「実習指導に関する研修」「介護実習後の指導」「外国人留学生の対応」といった関連項目も含め、検討していかなければならないことが示唆された。

以下、「介護過程の展開の指導に関する課題」について、各ヒアリング項目であがった特筆すべき内容を整理する。次に、各地域でヒアリングに携わった実施委員の所感を踏まえ本項目の小括とする。

## 介護過程の展開を指導するにあたり困っていること、課題と感じていること

介護過程の展開を実践するにあたって、学生は担当する利用者を選定する。その選定にあたり「コミュニケーションしやすい」「情報収集しやすい」「実習期間内の経験が可能」等の理由が目立ち、何故その利用者を担当したいのかという根拠の乏しさについて意見があがった。実習期間内で介護過程を展開することが求められる状況において、学生は取り組みやすい利用者に着目しがちである。併せて実習施設側も、利用者の重度化により、対象者の選定が難しい状況がある。

介護過程の展開は、アセスメントが重要とされる。アセスメントは、情報収集、分析、生活課題(生活ニーズ)の明確化に分類され、その中で学生は利用者をよく観察していること、利用者の特徴を質問すると回答できる点について実習指導者は評価している。他方、情報収集については「養成校の情報収集用紙の記載方法と記載内容の理解が不十分(書き方がよくわかっていない)」「心身機能、疾病には着目できるが、利用者の生活歴・思い等を汲み取ることが難しい」「利用者のマイナス(できない)面に着目しすぎる傾向」「情報収集に時間を要し、実習プログラムの進度に影響がでてしまう」等の課題があがった。分析については、「様々な情報を関連させつつ分析することが難しい」「利用者の言動の背景まで理解した分析の難しさ」といった課題を抱えていた。これは、生活課題(生活ニーズ)の明確化へと影響する。収集した情報の「マイナス面に注目しすぎる」あまり「利用者の生活背景やストレングス」への着目が難

しく、いわゆる「利用者の表面的な理解に留まる」結果になってしまう。

アセスメントの後は計画立案、実施、評価へと続くが、実習指導者へのヒアリング結果からもアセスメントが重要であることは理解できる。アセスメントは、利用者との言語及び非言語コミュニケーションから様々な情報をキャッチすることから始まる。そこから実習生自身で、どれが重要な情報か取捨選択し、情報と情報を関連づけながら分析していかなければならない。実習指導者は「文章化への時間(を要する)」こともあげている。この文章化への課題は「学生個々人の特性」「コミュニケーションの質」等が影響していると考えられるものの、実習指導者の「実習施設側の統一した指導のあり方(指導の標準化)」「実習指導者等の指導スキル」「介護職員自身の介護過程の理解(不十分)」等、自施設にも課題があると考えていたことが印象的であった。

## ②介護過程の展開を指導するにあたり、工夫している点とその効果

ヒアリングの内容から、前述の課題に対しきめ細やかな工夫がされており、一定の成果もあらわれていることが理解できた。実習指導者が工夫している部分は、「巡回及びカンファレンス」「介護過程の展開」「実習施設内の実習環境調整」に分類できる。

「巡回及びカンファレンス」では、教員・実習指導者で情報共有を緊密にとっていることである。実習生の特性、実習の進捗・成果・課題、帰校日指導での学生の言動について積極的に行っていることが伺える。

「介護過程の展開」では、答えよりヒントや気づきを与えることがあげられ、それでも苦労する学生へは、介護過程の展開例に関する手本を示しフォローしている。どちらも実習生が介護過程を展開しやすいよう工夫をしていることが伺える。さらに特筆すべき工夫について、毎日のスーパービジョンの設定、カンファレンスの事前指導で質疑応答を通じて理解度の確認をしている指導者もおり、きめ細やかな対応がなされていた。

「実習施設内の実習環境調整」については、実習生の特性を実習フロア職員で共有する、実習マニュアルを整備し(介護職及び他職種が)均一に対応できるよう申し送りをしている、実習指導者の勤務を日勤帯にする、さらに実習生が気づいたこと、理解したことについては褒めるといった支持的な関わりをしている。

実習指導者は学生に対し「今の実践の省察と、常により良い実践への検討を継続すること」を実習で経験してほしいと発言しており、後継者の育成という観点も大切にしていることも伺えた。

## ③介護過程の指導について養成校への意見・要望

前述①及び②を踏まえ、「介護過程の展開」「介護過程の書式(様式)」「巡回指導・帰校日」 「実習指導者側への要望」「実習後指導」「外国人留学生」に整理することができる。 「介護過程の展開」について、養成校の指導内容を実習施設・実習指導者も共有したいという要望があげられた。養成校で「介護過程をどのように教授しているか」、さらには「実習指導者に対し、どのような指導を期待しているのか」を教員側より教示してほしいという要望もあった。この要望の背景として「実習生の質の多様化・学習面の習熟度」といった事項と「介護過程の書式(様式)」が養成校ごとに異なる現状がヒアリング結果から伺える。加えて受け入れ時期の重複や養成校ごとの指導の差異に関連する負担も伺えた。

「巡回指導・帰校日」では、養成校が実習施設・実習指導者にお任せする現状があることが あげられ、ほかにも帰校日で「学生がどのようなことを話していたのか、養成校はどのような 指導をしたのか」について情報提供の要望があがった。

「実習指導者側への要望」とは養成校から"我々指導者"にオーダーしてほしいということである。具体的には、指導の妥当性をチェックしたい(自分の指導が適切なのかわからない)、指導力を向上したい(研修参加の機会も少ない現状もある)といった課題が理解できた。さらには実習指導者から、どのような実習施設であれば実習がしやすいのか、施設及び実習指導者への評価の要望もあった。実習指導の妥当性を確認する場として「実習後指導」としての報告会(例:ケース発表会等)の参加から実習生の成長が垣間見えたという実習指導者もおり、実習中だけではなく実習後にまたがる要望に養成校は応えていく必要がある。

最後に「外国人留学生」についてである。国、言語、文化、慣習が異なる実習生の受け入れ数が増加している。現在の課題として、外国人留学生の学習能力・理解度等の把握とその能力に合わせた実習指導があがった。実習場面で外国人留学生に対するコミュニケーションや記録の指導に苦労している実情が伺えた。ほかにも、自立に対する考え方にしても国ごとにその捉え方が異なる等、今後の介護過程を含めて実習指導における新たな課題となることが予想される。

#### 4)小括

ヒアリング結果から「介護過程の指導、展開」及び下記関連項目について検討する必要性が 示唆された。最後に各地域でヒアリングに携わった実施委員の所感を踏まえ整理する。

#### ■介護過程の指導、展開

- ・対象利用者について、実習期間、介護過程の到達目標を踏まえた選定を検討する必要がある。実習生が、利用者へ関心を寄せ、主体的に介護過程が展開できることが重要である。
- ・アセスメントの情報収集では、利用者個人の生活背景、個人因子の理解が促進する教授 方法を向上させていく必要がある。
- ・アセスメントの分析(情報の解釈・関連づけ・統合化)では、言語化・文章化の教授方法を向上させていく必要がある。

・介護過程の書式・様式の統一化への検討をする必要がある。介護過程の記入様式の差異が指導に負担感を与えている実情を回避しなければならない。今後、介護福祉士養成施設協会、介護福祉士会が連携し介護過程の指導について協力体制を組むことが必要とされる。

## ■介護実習巡回・カンファレンスのあり方

- ・実習期間中の指導を「実習施設にお任せします」といった養成校による丸投げは少なく とも回避しなければならない。養成校で教授している内容を基盤にどのような介護福祉 士を養成していく(したい)のか、実習施設・指導者に忌憚なく伝えていく必要がある。
- ・学生個々人の特性、能力、性格等を踏まえ、養成校と実習施設がさらに連携し実習指導 にあたる必要がある。

## ■介護実習環境の整備

- ・養成校が学生に教授している介護過程のねらい・教授方法等について、実習施設へ伝達 していくことが必要である。
- ・実習指導者も養成校対して、教授内容の理解やより良い実習指導へのオーダーを要望している。養成校の多くが開催している実習指導者会議等でこれらを共有または内容を向上させていくことが求められる。

## ■実習指導者の指導力の向上

- ・実習指導者自身も、養成校との連携を要望している。指導の妥当性・適切性・指導の効果的なタイミング等々、課題や関心を抱いている。介護実習の受け入れそのものが、指導者のみならず介護職員全体の知識・技術向上の機会と認識していることが伺える。
- ・実習指導者研修の企画。養成校(教員)が、実習指導者や実習生ばかりでなく、現場職員に対しても積極的にアプローチできる仕組みを整えることができれば、養成校・実習施設・実習生の三者関係が盤石となる。

#### ■実習指導に関する研修

- ・実習指導者としての指導力向上につながる研修内容を検討する必要がある。将来の介護 人材を育成するという意識のもと、実習指導の工夫や実習指導者独自のサポートが行わ れていることが明らかになった。実習施設における工夫例などの共有が推進されれば、 介護過程の展開や介護実習全体の充実につながる。
- ・実習施設によっては指導者が一人で実習生を抱え指導する現状もある。今回のヒアリングで、実習生に対して統一した指導が行えるように様々な努力をしていることが理解できた。これらの負担を軽減するため各実習施設での共有が必要である。実習指導者が抱える悩みの解消や実習指導者同士が情報共有できる研修機会を増やしていく(もしくは

検討する) 必要もある。

## ■介護実習後の指導

・実習期間中の受入れだけではなく、学校と実習施設の関係性維持、指導の連続性においても介護実習後指導に携わることが重要である。実習報告会、学内授業へ招聘するなどし、実習指導者から意見をもらう機会を増やすなど工夫する必要がある。

## ■外国人留学生への対応

・今後の新たな課題になることは、介護福祉士養成の情勢をみても自明である。これについては、外国人留学生を受け入れている養成校の先行かつ指導事例を学習していくことが必要である。

# ■第4章 研修会の実施

## 1 目的

前述の2つの調査から得られた介護過程の教授と指導の課題及び実践事例等を踏まえ、介護 過程の教授法や実習指導のヒントや工夫について、養成校の教員と実習指導者等が共有し、介 護過程の展開の実践力向上のための研修会を調査研究の一環として実施した。

研修会の名称は「介護過程の展開に関する研修会-教授方法と学生指導」であり、全国 5 会場で実施した。養成校の教諭・教員、介護実習において学生を指導する実習施設の実習指導者等を対象とした。

## 2 研修実施の概要

## (1) 研修のプログラム(5会場共通)

12 : 20~12 : 40	はじめに	■ I 研修の目的、本日のプログラム		
12:40~15:30	講義	<ul> <li>■ II 介護過程とは</li> <li>■ II - 1 アセスメント</li> <li>&lt;休憩&gt;</li> <li>■ II - 2 介護計画</li> <li>■ III - 3 実施と評価(実習施設との連携)</li> <li>■ III - 4 介護過程の理解を深めるために</li> </ul>		
15:30~15:40	休憩			
15:40~16:40	グループ ワーク	■ IV 介護過程の教授や指導において課題 と感じていること、工夫していること		
16:40~17:00	■ V 研修 <i>0</i>	Dまとめ		

## (2) 実施日時、会場、担当講師

(開催・実施順)

開催	日時と場所	担当講師(敬称略、50 音	順)	)
福岡	令和 2 年 1 月 25 日 (土)	医療法人敬愛会港島あんしんすこやかセンター	安達	真理子
	1 2 : 3 0 ~ 1 7 : 0 0	東京 YMCA 医療福祉専門学校	品川	智則
	福岡ガーデンパレス・宝満	熊本学園大学	横山	孝子
大阪	令和 2 年 1 月 27 日(月)	神戸女子大学	木村	あい
	1 2 : 3 0 ~ 1 7 : 0 0	三重県立伊賀白鳳高等学校	鈴木	幹治
	T K P ガーデンシティ新大阪 6 B	大阪人間科学大学	武田	卓也
広島	令和 2 年 1 月 30 日 (木)	貞静学園短期大学	鈴木	真智子
	1 2 : 3 0 ~ 1 7 : 0 0	静岡県立大学短期大学部	高木	剛
	広島ガーデンパレス孔雀・朱鷺	トリニティカレッジ広島医療福祉専門学校	吉岡	俊昭
仙台	令和 2 年 2 月 8 日 (土) 1 2 : 3 0 ~ 1 7 : 0 0 T K P 仙台南町通 カンファレンスセンター・8 B	聖和学園短期大学 群馬県立伊勢崎興陽高等学校 本庄ひまわり福祉会	東海林 中山 本名	林 初枝 見知子 靖
東京	令和 2 年 2 月 15 日 (土)	目白大学	荏原	順子
	1 2 : 3 0 ~ 1 7 : 0 0	旭川大学短期大学部	平野	啓介
	ビジョンセンター東京八重洲南口	帝京科学大学	柊崎	京子

#### 研修会の案内チラシ





## 3 研修参加者状況

(開催・実施順、単位:人)

		内 訳					
開催	合計	実習施設	高等 学校	専門 学校	短期 大学	大学	その他※
福岡	51	5	17	12	7	6	4
大阪	76	13	6	40	4	7	6
広島	39	3	5	22	1	8	0
仙台	39	4	11	11	5	7	1
東京	77	3	13	31	12	13	5
合計	282	28	52	116	29	41	16

※その他:初任者研修や実務者研修の講師、介護福祉士会所属など

## 4 研修資料

●パワーポイント:介護過程の展開に関する研修会~教授方法と学生指導~

●配付資料集:養成施設対象アンケート調査(介護過程の展開の教授に関する調査)に おいてご提示いただいた教材等について、養成校の許可を得て資料とし て配付した。

●参考資料1:「介護福祉士の教育内容の見直しを踏まえた教授方法等に関する調査研究 事業 報告書 介護福祉士養成課程 新カリキュラム 教育方法の手引 き」平成31年3月、公益社団法人日本介護福祉士養成施設協会

●参考資料 2:「介護福祉士養成課程における修得度評価基準の策定等に関する調査研究事業報告書」平成 31 年 3 月、公益社団法人日本介護福祉士養成施設協会

研修において使用したパワーポイントと配付資料集は、その後の検討において修正等を加え、本報告書「第II部 介護過程の教授と指導の事例」に掲載をしているため、本章における掲載は省略している。

## 5 グループワーク実施報告とまとめ

グループワークは、5 つの会場すべてにおいて1 テーブル4~6 人のグループで実施され、参加者が教授や指導における「課題」、「課題に対する工夫等の取り組み」を付箋に記載し、グループ内で共有した(写真参照)。

5 つの会場で付箋に記載された「課題」や「課題に対する工夫等の取り組み」を一括して整理し、キーワードを抽出し、キーワードごとに件数をカウントした結果を次ページ以降にグラフ化して掲載している。また、具体的にあげられた課題や工夫等について、キーワードごとに要約して吹き出しで掲載をしている。

グループワークで出された 教授や指導における「課題」、「課題に対する工夫等の取り組み」

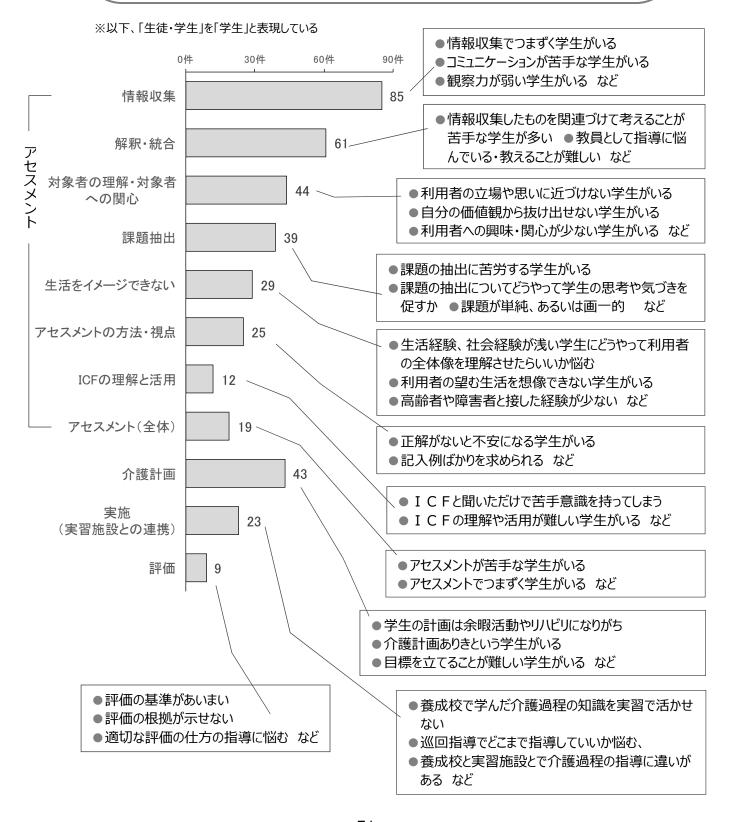


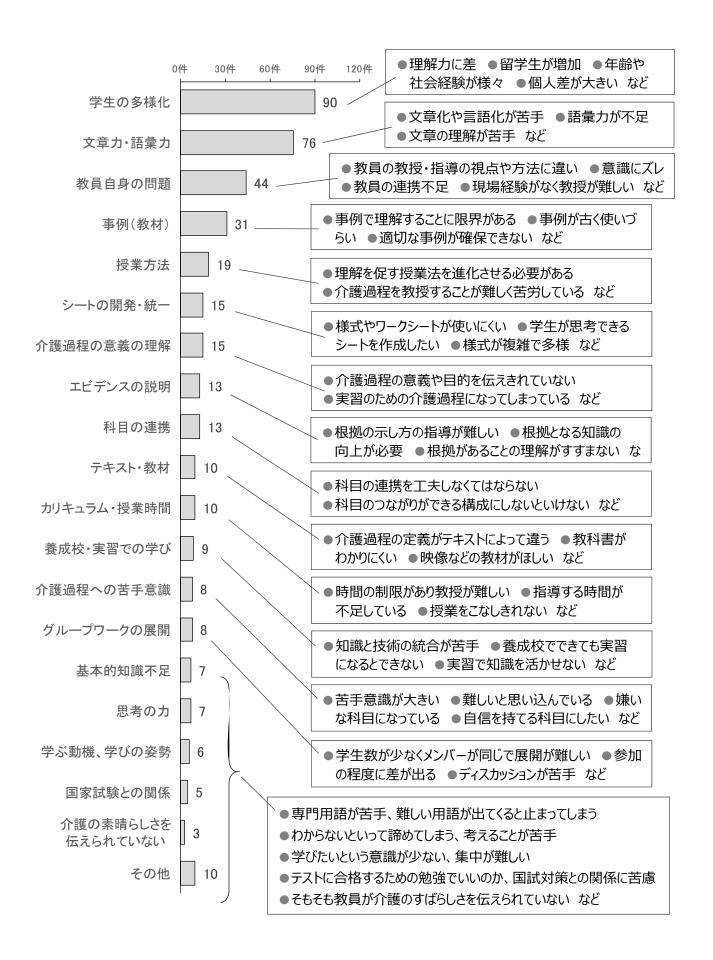


## (1) グループワークで出された意見等

## 養成校で介護過程の展開を教授する上での課題

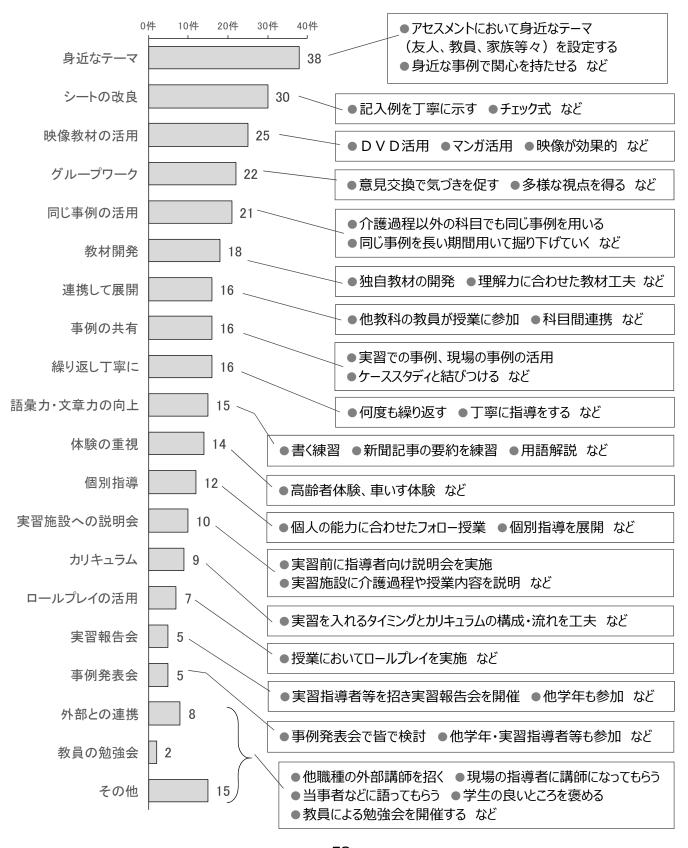
5 会場のグループワークで出された件数は、788 件





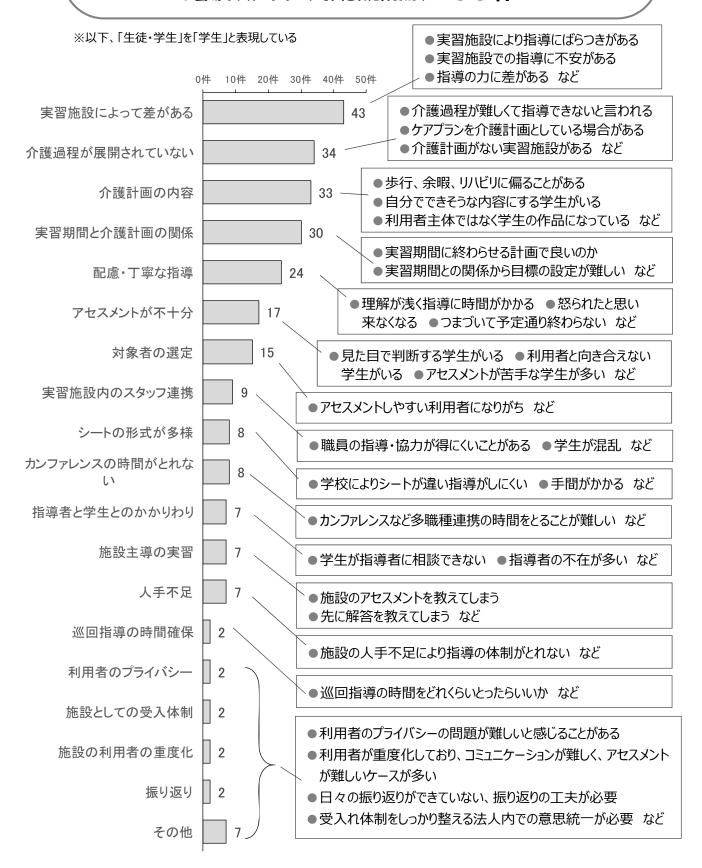
# 養成校で介護過程の展開を教授する上での工夫 5 会場のグループワークで出された件数は、3 0 4件

※以下、「生徒・学生」を「学生」と表現している



## 実習施設で介護過程の展開を指導する上での課題

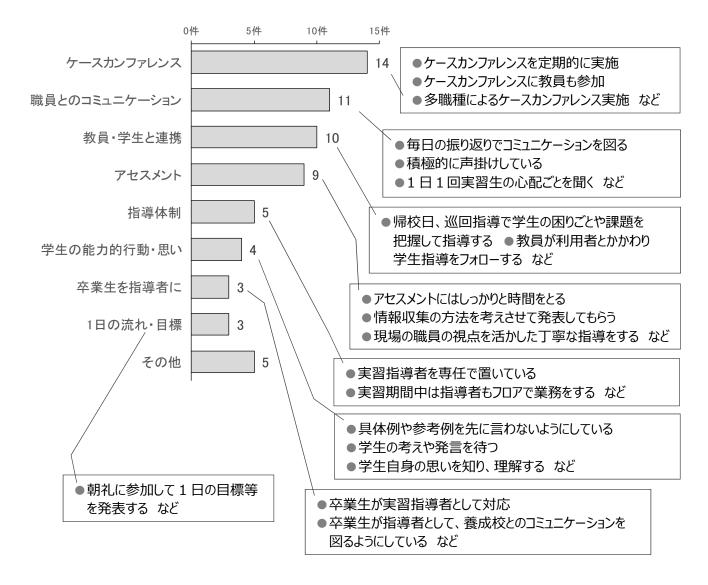
## 5会場のグループワークで出された件数は、259件



## 実習施設で介護過程の展開を指導する上での工夫

## 5 会場のグループワークで出された件数は、 6 4件

※以下、「生徒・学生」を「学生」と表現している



## (2) グループワークのまとめ

今回の研修には、6 会場の合計として専門学校 116 名、短期大学 29 名、大学 41 名の養成校の教員計 186 名、実習施設の実習指導者等 28 名、福祉を学ぶ高等学校の教諭 52 名、初任者研修や実務者研修の講師、介護福祉士会など 16 名が参加し、介護過程の指導を巡る課題や工夫点について意見交換をし、交流できたことが 1 つの大きな成果であると考えている。

各所属の参加者が意見交換できるようグルーピングを行い、それぞれの立場から課題と工夫点について話し合い、さらにグループの移動を行うことで他の参加者と意見交換し、それをもとのグループに持ち帰り話し合いを行うなど、できるだけ多くの参加者と交流できるような形式をとった。話し合いを段階的に進めることでより深い議論ができたのではないかと考える。特に、実習施設で介護過程を指導する立場からの意見を述べていただけたことは養成校として大きな学びとなった。

養成校での課題については、事前のアンケート調査と同様の問題や悩みが多かった。アセスメントについての課題が最も多く、次いで介護計画、実習施設での実施、評価と続いている。介護過程の各プロセスが進行するにしたがって課題が少なくなるのは、課題がないのではなくアセスメントの段階で指導に苦慮していることが多いことがうかがえる。今後は、アセスメントのみならず、プロセスの各段階についての研究も行うべきではないかと感じた。介護過程の各プロセスを理解し実践できない学生に対し、どう教授すれば良いのかについて課題を感じている指導者が多いこともわかった。

これら課題の背景因子になるものが 52 ページのグラフにあげられており、背景因子は3つに分類できる。1 つめは学生の多様化に対する課題である。学生が多様化し、知識・技術・態度における個人差が大きくなっている。さらに、近年は留学生の増加に伴い文化的な差異にも配慮しなければならないという現状がある。2 つめは、教材を含む教授する側の課題である。教材の課題として、テキストや事例、介護過程のシートの課題があげられている。3 つめは教育課程や学生数などの環境に関する課題である。ここで注意したいのは、国家試験との関係についての課題である。介護福祉士に必要な専門知識・技術・態度を身につけさせることが重要で、その結果として国家試験に合格するように指導しなければならない。介護過程の指導においては、介護過程の意義や目的を理解させ、実践的に展開できる能力を身につけることができるよう指導すべきである。

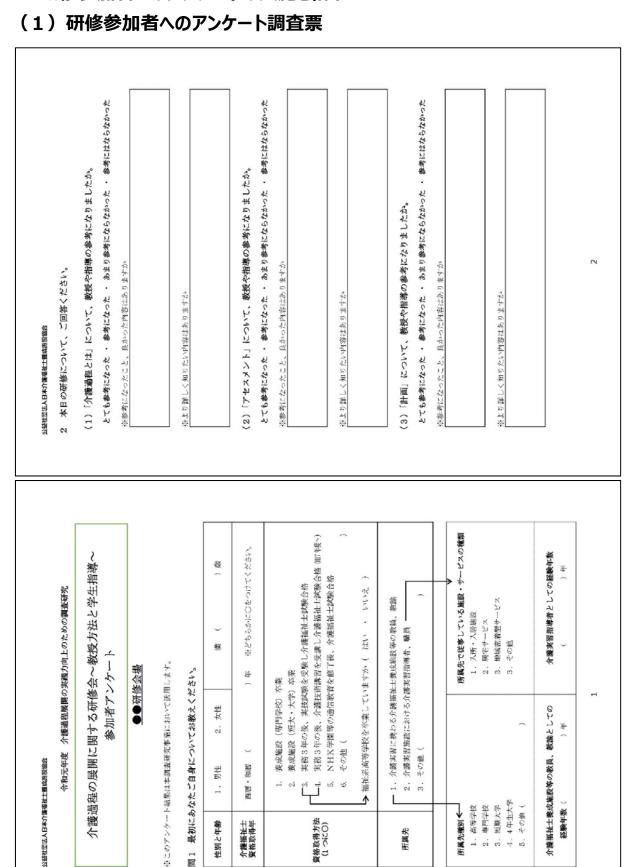
意見交換を行い、各養成校で様々な工夫が行われていた。介護過程を学生が身近に感じ、取り組みやすくするための工夫として、テーマや映像教材の活用、事例の工夫などが実践されている。さらに、学生の能力の差が大きいことに対して、シート等の教材をチェックシート式にするなどの工夫や、グループワークを実施し学生同士でピアサポートできる体勢をつくる、学習や体験を繰り返し丁寧に行う等の実践が行われていた。介護過程のシート様式が養成校によ

って異なっているという課題が実習施設側からあげられていた。1つの様式にまとめることには効果もあるが、課題も多い。まずは養成校の介護過程を展開するためのシートのねらいや目的、必須記入事項等について教育研究を行い、方向性を検討することが必要なのではないかと考える。課題を学生側・教授する側と分類したが、専門職である介護福祉士を育成するためには、学生の多様化に対し有効な教授法を実施することが求められる。研修会などで教授法についての情報交換や研究を行うことが必要であろう。

実習施設での課題は実習施設の課題、学生の課題、養成校の課題に分類される。今回、参加者の多くが養成校の教員であったことから、実習施設の課題が多くなっている。実習施設で介護過程について理解していただけないことがあるという課題に対しては、教育機関である養成校が積極的に実習施設に働きかけ、研修などを行う必要がある。養成校と実習施設が学生を専門職である介護福祉士に育てるために、どのように協働していくのかについて計画し実践していくべきであろう。

今回の研修は、様々な立場にある多くの参加者が課題と工夫について協議でき、貴重な機会となった。今後も、介護福祉士を目指す学生に対しより良い指導を実践できるよう、養成校、 高等学校、実習施設の関係者が参加できる研修会を開催することが望まれる。

## 研修参加者へのアンケートの実施と結果



資格取得方法 (1つにO)

介羅庙岩士 資格取得年

性別と年齢

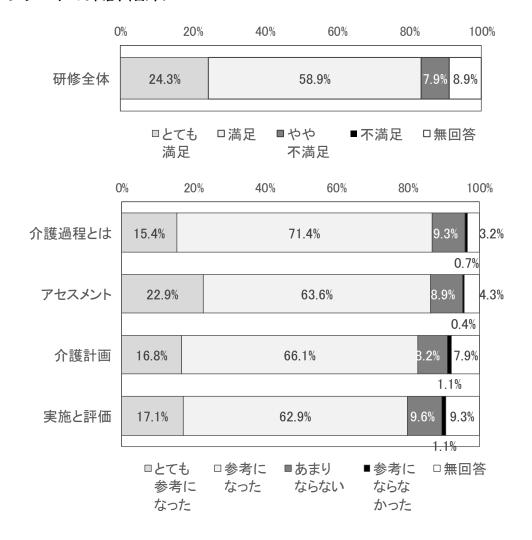
1. 高等学校 2. 専門学校 3. 短期大学 5. 十の街(

所属先續別 ←

所属先

公益社团活人日本介膜陽准土體成係股份会	■工夫		4 本園査研究において作成する「介護遠程の展開に関する教授と指導の手引き」(仮称) に、とりあげてほしい内容、ポイント等がございましたら、ご記入ください。	ご協力をありがとうございました。 本アンケートを受付にご報出ください。
公益社団四人日本企業指揮士権関係を設め (A. ) 一字 有って 第二十 イン・ア・サー ちょうしょ 一字 有って 第二十 イン・ド・サー ちょう	とたも春巻にならた・ 参考にならた・ 砂束り参考にならながらた・ 参考にはならなからた ※参考になったこと、見かった内容はありますか	※より詳しく知りたい内容はありますか (5) 研修全体についてはいかがですか。	接方名	

## (2) アンケートの集計結果



研修会実施後に研修参加者に対するアンケートを実施し、研修全体、介護過程とは、アセスメント、介護計画、実施と評価の5項目について満足度等を測定した。参加者の合計は282名、アンケートの回答者は280名であった。

研修全体では「とても満足」24.3%、「満足」58.9%であり、233名(83.2%)が満足と回答したが、「やや不満足」も7.9%となった。「不満足」は0%であった。今後もこの研修を実施する必要があると判断される。

"介護過程とは"については、「とても参考になった」「参考になった」と回答した人が合計して 243 名 (86.8%) であった。同様に、"アセスメント"にいては 242 名 (86.5%)、"介護計画"については 232 名 (82.9%)、"実施と評価"については 224 名 (80.0%) が参考になったと回答している。介護過程の研修が、教員・教諭、施設・事業所の実習指導者には必要な研修であることがわかった。

参考になった内容や詳しく知りたかった内容等は、次ページ以降の(3)アンケートの自由 記載に具体的な内容を記載している。

## (3) アンケートの自由記載

## 【介護過程とは】

「介護過程」という科目について、教員・現場共にまだ浸透できていないというのが、よくあらわれている。そのため「基本が確認できた」「今後の参考になった」という意見とともに、まだまだ「介護過程の定義」「介護過程の必要性」といったことをさらに深く知りたいという意見があるのはそのためかと思われる。教授法も手探り的であり、介護過程をどのように教えていくかの課題がある。

参考になった ところ	<ul> <li>基本の振り返り(44件)</li> <li>コンピテンシーの理解(26件)</li> <li>他校の取り組みが参考に(27件)</li> <li>今後の参考に(17件)</li> <li>同じ悩みを共有(8件)</li> <li>教育内容(5件)</li> <li>その他:チームの大切さ、評価基準、ケアプランと介護過程の関係性 など</li> </ul>
もっと知りた かったところ	<ul> <li>コアコンピテンシー(8件)</li> <li>介護過程(定義・必要性)(5件)</li> <li>その他:実習で取り組む際のケアプランとの関係性、指導方法、</li> <li>シートの共通化などの実践例、「生活者」の視点 など</li> </ul>

## 【アセスメント】

アセスメントでは、「他校の事例が参考になった」という回答が多く見られ、教授法についての情報交換を望んでいることが浮き彫りになった。全体的にアセスメントをどう進めて良いのか、深く研究したいという希望があるように思われる。

参考になった ところ	<ul> <li>・他校の資料・事例(81件)</li> <li>・分析・解釈・統合化(8件)</li> <li>・アセスメントの視点(9件)</li> <li>・アセスメントの再確認(8件)</li> <li>・その他:生活課題について、思考の進め方 など</li> </ul>
もっと知りた かったところ	教授方法(事例・授業展開・学生指導)(29 件)     分析・解釈・統合(16 件)     その他:アセスメントシートの統合化は必要か、課題の抽出方法、     「意図的」「総合的」を掘り下げてほしい、対象者の選び方、     実習での展開方法 など

## 【介護計画】

介護計画では、今回の研修会を通してあらためて計画の大切さを再確認したと同時に、事例を通し自らの指導方法を再確認でき、この機会が有意義だったと感じた参加者が多かったことが伺える。また、ケアプランと介護計画の関係性などもしっかり確認する必要性や、介護計画の内容がレクリエーションなどに流れがちなところをどう指導していくかなどの教授法を、さらに研修でとりあげる必要があるのかもしれない。

参考になった ところ	他校の事例(27 件)     計画(大切さ・大変さ・重要性)(22 件)     計画の指導の課題、指導の方向性の確認(21 件)     その他:計画の内容について、実習期間、実習施設との連携 など
もっと知りた かったところ	<ul><li>・他校の事例(具体的に知りたい・多く知りたい)(27 件)</li><li>・施設との連携(計画を立てる上での連携・地域連携・多職種連携)(8 件)</li><li>・その他:高齢者介護現場と障害者介護現場の違い、</li><li>評価、優先順位 など</li></ul>

## 【実施と評価】

ここでは、評価に関すること、ケーススタディについてなどが、参考になったという意見と ともに、もっと詳しく知りたいという声も多くあった。施設との連携についても課題のように 感じる。

参考になった ところ	<ul> <li>評価に関すること(19件)</li> <li>ケーススタディ(16件)</li> <li>事例(11件)</li> <li>実習施設との連携(11件)</li> <li>その他:コアコンピテンシー、内容を再確認できた など</li> </ul>
もっと知りた かったところ	<ul><li>・ 評価に関すること (13 件)</li><li>・ 事例を具体的に聞きたい (5 件)</li><li>・ その他 : 新人研修の内容、施設との連携、記録・チーム など</li></ul>

## 【介護過程の展開に関する教授・指導の課題(抜粋)】

- ・「過程」の評価ができていない。
- ・教員間の連携の必要性とともに、他科目との連携をどのようにおこなっていくのか。
- 介護現場との連携をどうするか。
- ・ 学生の学びの差をどうしたら良いか(年齢・学歴・職歴・能力)。
- ・事例の選択が難しい。教材の準備の大切さと難しさ(視聴覚教材を含む)。
- 用語の扱いをどうすべきか。定義から、細かな用語まで。
- ・ 学生にどのようにイメージをもたせるのかが課題。

#### 【介護過程の展開に関する教授・指導の工夫(抜粋)】

- 事例研究発表会を毎年実施。
- ・ 実習施設協議会にて介護過程をどのように教えているのかを説明。
- ・ PCC (パーソンセンタードケア) のセンター方式・ひもときシートを活用し、実際に検討してみる。
- ・視聴覚教材の制作をしている。
- ・気軽に自分の意見が言える機会づくりを実施。
- ・ 2 年生向けの事例は、課題が 1 つ見つけることができる短いものを使うことで、着眼点を養い、2 年生の実習から、アセスメントの練習を施設にお願いしている。
- ・ 施設との共通理解を求めるポイントを見直し、生徒や施設で混乱が起きないようにする。
- ・科目担当教員を固定し、専任で行う(介護過程・実習・介護総合演習)。
- ・ 小クラス制できめ細やかに対応している。
- ・ 伝えるだけでは理解につながらないので、実習等の事例を出させている。
- ・ 全員が考えるような工夫を心がけている。
- · できる限り教材を工夫し、学力差をなくす工夫を実施。
- ・ 利用者一人ひとりに関心をもたせることを実施。
- ・個人ワークとグループワークのバランスを考えながら展開している。
- より身近に感じる事例で学習してから、介護の事例を扱う。
- ・映像の教材使用時、まず音を消し(ナレーションの説明を聞かない→そこから情報をとるので)見て ADLを文章表現できるようにする。
- ・ICFのツールに落とし、データ化し、利用者の本質を見ることができるようにする。
- ・ 学生さんのほしいと思える知識と技術の提供を心がける。
- ICFを今も取り入れているが、本人の思いやその考えを書き加えられるようにしている。
- ・ 実習でおこなった介護過程を教材として発表し、クラス全員で検討することにより、「実習における介護 過程」のレベルを認識させている。

#### 【手引きへの希望(抜粋)】

- ・ 授業や実習で活用できるアセスメントシートのフォーマットや授業での事例の掲載。
- ・どこまで教育できているのか到達点を教えてほしい。
- · 介護過程の教鞭に使用できる文献や映像、DVDなどの一覧を紹介してほしい。
- ・介護過程の記録用紙、アセスメントシートの内容を教えてほしい。
- ・ アセスメントシートの共通のものがあれば紹介してほしい。
- ・具体的な介護過程の内容、アセスメントなど紹介してほしい。
- ・ 研修でのグループワークの内容(各会場の成果物)も取り上げてほしい。
- ・ 全国の養成校の介護過程で使う書式を集約して、養成校で統一したユニバーサルデザインで誰でも 使える書式づくりをしてほしい。
- 事例でとりあげていただいたところの先生による説明を掲載してほしい。
- ・ 使用可能な事例を掲載してほしい。もしくは、使用できるようしてほしい。
- ・ 介護過程の展開について実習施設と学校との連携方法(意思統一)。教授方法の工夫。
- ・ 事例と動画を取り入れた内容、I C T 教育導入に活かせる教材が良い。
- ・ 具体的な授業展開例などを紹介してほしい。その際には、指導案と指導計画や学生の反応なども紹介してほしい。

- アセスメントシートの書き方。情報分析、統合の方法。
- DVD、動画の活用方法。
- ケーススタディの事例や様式など、もう少し紹介してほしい。
- ・ICFとの関連。ケアマネジャーのケアプランをどこで学牛に開示するかを取り上げてほしい。
- ・高齢者、障がい者の種別など対象による共通項、違いについて知りたい。
- 教材としての事例があれば紹介してほしい。
- ・施設実習での実践なくして展開はできないため、施設との関係について紹介してほしい。
- ・実習指導者からの見解を紹介してほしい。
- ・意思疎通が困難な人の対応としては、どのような方法があるか知りたい。
- ・アセスメントシートを統一している地域もあると聞いたが、経緯、用紙、効果等について知りたい。
- 情報を分析・解釈・統合とあるのですが、整理→統合→解釈のほうが良いのではないか。
- ・修得度評価基準の策定等に関する調査研究事業報告書がわかりやすく、連携してほしい。
- 新カリになったポイントと、対策、工夫をとりあげてほしい。
- 現場からの介護過程指導マニュアル例がないのか。
- 教材作りについてとりあげてほしい。
- ・高校の実践例があると良い。
- ・アセスメントの中で分析・統合のポイントを、事例などを用いて解説してほしい。

### 【研修全体 良かったところ・参考になったところ(抜粋)】

- 様々な学校での取り組みを知り教授法のヒントを得られた。
- ・ 全体を通し、コアコンピテンシーを学べたことが良かった。
- 介護福祉士の質の向上をするためには必要な取り組み。
- ・具体的な介護過程のあり方は必要。
- ・ 改めて教授内容の確認ができた。
- あいまいだったところが整理できた。
- ・現場の視点と養成校側の視点の違いを知り良かった。
- ・養成校や施設での指導に役立つ事例や新カリキュラムの変更点について参考になった。
- ・ 総論部分でテキスト内容だけでなく、現場と養成校の課題を含めての講義がほしかった。例えば、介護過程の展開のスケジュールや対象者の決定等。
- 介護過程を伝えるにあたって、コアコンピテンシーの必要性がわかった。
- 実践内容や各学校のシート等を活用してくださり、学ぶことが多かった。
- 資料が充実しており、良かった。
- ・ 1 つひとつの説明がていねいであり、聞きやすかった。
- アンケート調査に参加し、そのプロセスで研修会を開催することに、非常に意義を感じた。
- ・講義を受けてからのグループワークはとても有意義だった。
- · 自分と違う視点で見ることができて良かった。
- ・現場の方のお話し等が聞けて良かった。
- ・介護教員講習会等での開催を含め、このような学習会、研修会を毎年実施してほしい。
- ・ 他の養成校の方々や現場職員の方とお話する機会はとても貴重である。
- ・ 養成校の先生から直接意見を聞いたことで、現場指導を見直す機会となりとても良かった。 介護福祉士養成協会の研修にはじめて参加し、新しい価値観と出会うことができた。
- ・職能団体は違っても根幹は同じことを実感できた。

- 様々な職業の方の話を聞くことができ、工夫など、学べる点は多くありました。
- 講義とグループワークのバランスが良かった。講義の後のグループワークの展開が良かった。
- ・ 高校の先生方とご一緒できたのは新鮮。
- これからも現場実習先指導者と養成校が協力し合える場があれば良い。
- ・ そもそも介護過程は"なりたい自分になる"ための支援だから、もっとわくわくするものだと言われた方がいて、その通りだと思った。
- 現場で介護過程が展開されていないのが最大の課題。
- ・介護過程の展開についての復習はもっと短時間でも良かったと感じた。

### 【研修全体 研修の改善点・もっと知りたかったところ(抜粋)】

- ・ 時間が足りないと感じた。1日の研修にしてほしい。
- ・他科目も学びたい。
- ・ 全国教員研修会のプログラムにしてほしい。
- ・外国人学生の話題があり、「外国人は」という言葉が気になった。
- ・施設側にも研修機会のアナウンスをお願いしたい。
- ・ 日程(国家試験との関係)を考慮してほしい。
- 対象者をわけてほしい。
- ・ 留学生への指導、雇用への継続性について知りたい。
- グループワークの時間をもっと取ってほしかった。
- ・ 介護福祉士養成課程における修得度評価基準が再確認できた。
- ・ 学生の傾向を整理しどのような課題、解決策に時間を費やしていくと良い。
- ・介護過程の内容の確認だけでなく、様々な養成校で実践されている教授内容を知りたかった。
- ・資料集や報告書、手引きなどを参照する手間が大変に感じた。
- ・ 全体的に課題及び工夫のところを掘り下げて聞いてみたかった。
- ・他の学校で取り組みをされている内容や資料を見せていただくことができ、自分の学校でも良い点を取り入れることができたらいいと思います。
- ・具体的な取り組み方法などの解決策を紹介してほしかった。
- ・ 学生指導の部分を掘り下げてほしかった。
- もう少し、実際の教授法や例について知りたかった。
- ・ 事例を多く紹介してほしい。
- ・ 具体的な評価基準 (ルーブリック等) が知りたかった。
- ・具体的な教授法を教えていただきたい。
- ・介護現場が忙しく、学生の介護計画を実習指導者しか見ていないのに、カンファレンス等で他職種からも協力を得られるのか・・・想像がつかない。
- ・共通認識的な内容ばかりだったので、もう少し各論に踏み込んだ内容を聴きたかった。
- ・「〜いいと思った」といった講師の主観ではなく、介護過程のあり方や考え方の方向性を根拠として解 説してほしかった。
- ・ I C F の視点を入れて介護過程の展開を行うことが必須だと思っていたが、活かしきれていないものが良い事例として出されているのに疑問を感じた。

### 【その他の意見(抜粋)】

- ・地方で開催してくれたこと。
- ・ 介護福祉士の専門性は、現在の状態・状況による生活支援の視点だけでなく、利用者の今まで生きてこられた「人生」を踏まえた「生活」支援にあるという視点を強調してほしい。
- ・再度、介護過程の研修を実施してほしい。
- ・もっと色々な科目を開催してほしい。
- ・「それをどうやって教えるのか?」の教育方法の専門的な研修をしてほしい。介護過程の目的を理解した教育学の先生に、教材や教育方法について、教授法を教えてほしい。
- ・養成校で学び介護の現場で働いている現役の介護福祉士に、「学校で学んだ介護過程のここが役に立った」「学校で学んだ介護過程のここは全く役に立たない」「学校で学んだ介護過程でもっとこんなことを学びたかった」を質問し、「本当に役立つ(現場から求められる)介護過程とは」を明らかにしてほしい。
- ・今後も地方での開催や地方の意見が中央にいくと良い。
- ・ 介護学という学問を確立してほしい。

### 7 研修会のまとめ

本研修会は、介護過程の教授法や実習指導のヒントや工夫について、養成校の教員と実習指導者等が共に学び合う機会として実施した。多忙な時期にもかかわらず、各会場ともに専門学校や短大・大学、高校の教員、実習施設の指導者等の多様な立場の参加者を得ることができた。

事前のアンケートや研修会後のアンケートでもあげられていたが、養成校の教員は介護過程の定義が定まらない中で、それぞれが課題を抱えながら工夫を重ね教授している。しかしながら、介護過程は、介護福祉士養成においては核となるものであることから、どの養成校においても科目の到達目標や教育に含むべき事項、そこに向かう介護過程の基礎が共有されていることが必要となる。このことから、研修会の前半では、学生を指導する教員や実習指導者が、介護過程の展開の基本について共通理解を図ることを目的として講義を行った。後半では、グループワークを通し、参加者それぞれの立場で具体的な課題や工夫について意見交換することにより、新たな学びの機会とした。

ここでは、(1)介護過程の基礎理解の共有、(2)養成校と実習施設の連携、この2点で整理し研修会のまとめとする。

#### (1)介護過程の基礎理解の共有

研修後のアンケートでは、介護過程の基本を再確認できたという意見が多くあげられている。 介護過程の定義や意義が未だ明確に定まっていないことが課題となる中で、教授する者それぞ れの理解において教授・指導している現状が推察される。加えて、実習施設の指導者において は、所持資格や学びの背景が多様であり、指導の均質化を困難にしているといえる。このよう な現状において、介護過程の目的や意義、アセスメントを始めとした各段階の視点や考え方と いった基本を養成校の教員と実習指導者が共に学ぶ機会は、教える側の介護過程の理解を深め るだけでなく、学校での学びと実習での学びが連続したものとなり、統一した教授・指導の実 現に寄与するものとして、意義あることと考えられる。

2 点目に、他校の事例紹介について参考になったという意見が多くあげられた。これは、教授法についての情報交換へのニーズがあると考えられた。学生の状況は多様化し、高校卒業後の者と社会人を経験した者まで年齢層は拡大し、外国人留学生、基礎学力の差がある者たちが同じ教室で学ぶ。思考過程である介護過程を教えることには、様々な工夫が必要とされ、研修会で紹介された事例も、学校でオリジナルの書式を開発し使用する、DVDの活用、実習施設の指導者を講師に招くなど多様であった。教材や指導の工夫は多様であっても、アセスメントで何を押さえなければならないのか、目標設定のあり方、計画立案の留意事項といった基本の考え方が統一されていることが重要であろう。

講義を通して介護過程の考え方、基本の確認をしていくことはできたが、より具体的な教授

方法を知りたいという意見もあり、次の段階の課題としたい。また、事例紹介については、今回は、どのような教材をどのタイミングで使用しているかの紹介が中心であったが、その教材を使用することにより学生の理解にどのような効果があったのかを含めて情報共有していくことにより、新たな教授法や教材開発につながるものと考える。

#### (2)養成校と実習施設の連携

少ない人数ではあったが、各会場ともに実習施設の指導者の参加があった。グループワークでは養成校の教員と実習指導者が意見を交わし、研修後のアンケートからも有意義な機会だったといえる。

養成校の教員は、学生が介護過程を理解し実習で展開していくために、実習施設及び実習指導者と連携した指導の重要性かつ必要性を認識している一方で、グループワークで出された意見をみると、実際には連携をしていく難しさを感じていることがわかった。

一方、実習を受け入れる側の戸惑いや困難も見えた。複数の養成校から実習生を受け入れている施設からは、アセスメントシートなど様式が学校ごとに異なることが、指導のしにくさにつながっていることがあげられた。また、目標設定のあり方など、養成校がどのように指導しているのかお互いに共通認識できていない現状も伺えた。

学校で介護過程の理論を学び、実習において実践し学びを深めていくためには、養成校と実 習施設の連携が欠かせない。学生が多様化し、実習施設の状況も多忙であることから、養成校 側と実習施設・実習指導者のコミュニケーションがますます重要となる。

講義の中では、実習先と密に連携をしている事例や工夫が紹介され、グループワークでも実際に取り組まれている工夫が示された。介護職だけでなく他職種を含めたカンファレンスの実施、養成校の教員が施設に赴いて行う介護過程の勉強会など積極的な取り組みや、学生の考えや発言を待つ、学生への丁寧な声かけといった実習指導者の姿勢、卒業生を実習指導者として配置することで養成校とコミュニケーションを図りやすくしている等、参考になったものと考えられる。人材不足はどこでも当てはまる状況の中で、このような取り組みを可能とする要因は、実習施設側と養成校側に分けられる。まずは、施設側の実習生受け入れに対する方針や姿勢である。これは実習生に限定されるものではなく、人材育成に対する方針とも関係しているだろう。次に、養成校側からの積極的な働きかけである。学校での学習状況、学生の個別状況の情報共有、介護過程を展開していくにあたっての実習先への要望、施設側からの要望の聞き取り、介護過程に関する勉強会の実施など、率直に意見を交わし連携していく環境をどのようにつくっていくか、今一度検討する必要があるのではないだろうか。

介護福祉士の養成、そして介護過程を展開できる実践力の向上には、養成校と現場の協力・ 連携が不可欠だ。共に学び合う機会は、共に介護福祉士を育てる意識を高め、連携の方法への ヒントとなり、このような機会を継続してつくっていくことが必要だろう。今回は養成校の教 員の参加人数と比較して、実習指導者の参加が少なかったことから、今後は、実習施設への研修の案内を積極的に行うと同時に、養成校相互のつながりを強めていく場として、継続した研修会の実施が望まれる。

# ■第5章 調査研究の総括と今後の課題

本調査研究で実施した「養成施設対象アンケート調査」(第2章)、実習施設対象ヒアリング調査(第3章)、介護過程の展開に関する研修会の参加者(福祉系高校を含む養成校の教員、実習施設の実習指導者等)を対象としたアンケート調査(第4章)などの結果から、介護過程展開の教授・指導に係る課題・工夫・関心等について、以下のことが明らかとなった。

### 1 学生の多様性に対応した教育実践

各養成校においては、学生の学修効果を高めるための工夫(例えば、身近な題材や独自に作成した事例を用いる、模擬カンファレンスを開催する、実習施設と事前に情報共有する等)が行われていた。そのため、教員及び実習指導者等が他の養成校で使用している教材、演習の事例等について興味・関心が高い(情報交換を望んでいる)こともわかった。しかしながら、養成校は社会経験のある学生(社会人学生)や留学生など多様な学生が在学しており、学生によってアセスメント能力や理解力、文章力などの差が大きいことに対して、どのように対応するかが課題であるととらえていた。また、実習指導者も介護実習での指導にあたって、同様の課題を認識している。

以上のことから、養成校の学生が多様化する中で、とりわけ介護過程展開の中核となるアセスメント能力のほか、理解力、文章力などを高める(一定水準の能力の涵養に資する)ための教授・指導方法や教材開発等の重要性が示唆された。今後は、養成校と実習施設の協力のもと、研究会や勉強会などを定期的に開催し、学生の学修効果を高めるための教授・指導方法(ブラッシュアップを含む)や教材開発(例えば、介護過程の展開様式(シート)の標準化など)に関する意見交換をしたり、参考となる教材、演習の事例等について情報共有すること等が望まれる。

# 2 養成校と実習施設との連携

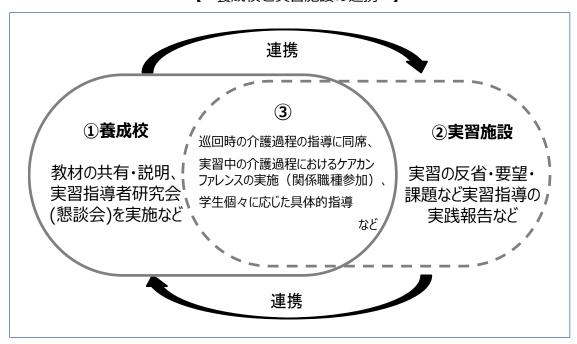
介護過程は介護実践の中で展開されていくため、介護実習において養成校と実習施設とが連携し、指導することが非常に重要であり、養成校と実習施設の連携として様々な工夫をされていた。一方で実習中の指導を施設に任せきってしまう養成校(教員)も存在するという指摘が実習指導者からなされた。養成校と実習施設との教育的な連携を強化するために、以下の工夫が行われていた。

①養成校から実習施設へ、介護過程をどのように教えているのかという介護過程やケーススタ

ディ(教授方法バージョンの教材等の授業内容や学習進度を資料化したもの)を実習指導者等へ配布し共有する。また、実習施設への出前講座の実施、実習指導者との懇談会等で、実習の反省、次年度の実習の調整、教育内容や介護過程の説明や介護過程の展開方法と様式使用方法を説明する機会を持つ(下図①)。

- ②実習施設から養成校へ、実習の反省や養成校への要望や課題など実習指導の実践報告や、他 施設と介護過程における実習指導についての課題や工夫の共有をする機会を持つ(下図②)。
- ③介護実習中に、学生・実習施設(関係職種)・教員の三者による介護過程を指導するためのカンファレンスを実施する。今後も学生が実践の中で介護過程を学び身につけることができるように、実習施設で介護過程の展開を指導する上での課題の解決に向けての取り組みや工夫、学生個々に応じた具体的な指導方法などの共有を図る必要がある(下図③)。

### 【 養成校と実習施設の連携 】



# 3 今後の課題

介護過程は、実践的教育の科目である。それは、独自の知識体系に基づき系統的・組織的に行われるということから、介護福祉士の専門性を示す指標となっている。上記1及び2で述べたように、本調査研究では、各養成校が学生の多様性に対応した教育実践に悩みながらも真剣に取り組んでおり、教授指導方法、教材の工夫、実習施設との連携について努力していることがわかった。一方で、養成校の教員の実習指導に対する関わり方の差が大きいことや、実習施設の指導者においても介護過程に対する理解や認識に差があることもわかった。また、それらは学生の介護過程の実践、ひいては介護観の形成へも影響を及ぼす。今後の課題として、以下

の内容があげられる。

介護過程について、養成校と実習指導者が一体となって研修及び研究を行うことの必要性があげられる。今回の調査研究では、福祉系高等学校、専門学校、短大、大学、実習施設の実習指導者が所属の枠を越えて研修を行うことによって、それぞれの立場が抱える課題を共有し、学生の介護過程の実践力向上のために、多様な視点で課題を解決する議論が行えた。今後も研修や研究会等(例えば全国教員研修会や介護教育学会等)において、今回のような教育研究を行うことが必要である。

今後残された最も大きな課題としては、「介護過程」そのものの構築である。「介護過程の定義がテキストによって異なっている」「養成校によって介護過程のシートが違う」「現場ではケアマネジメントとの関係性が不明確」などの課題があげられた。これらは「介護過程」そのものがまだ十分に合意されていないことや、実践に活かされていないことをあらわしている。

今回の調査研究では、教授法の工夫という観点からご協力いただけた養成校それぞれの教材やアセスメントシートなどを第Ⅱ部で紹介している。

ツールは様々であっても、「介護過程」のねらいや目的、教授すべき視点は同じである。介護 過程の実践力向上のために、養成校と現場が連携して教育研究、実践研究を重ね、「介護過程」 を構築することが求められており、それが介護福祉士の専門性を高めることにつながっている。

# 第Ⅱ部 介護過程の教授と指導の事例

# 介護過程の教授と指導の事例 Contents



	舌用にあたって〜作成の目的と留意点	
•	<b>↑護過程とは</b>	
	介護福祉士養成教育における介護過程の位置づけ	
	介護過程とは	
(3)	介護過程の意義と目的	84
	介護過程の構成要素	
(5)	介護過程とコアコンピテンシー	86
3 7	アセスメント	88
(1)	アセスメントとコアコンピテンシー	88
(2)	アセスメントとは	90
(3)	アセスメントの目的・視点・基盤	91
(4)	情報収集	93
(5)	情報の分析・解釈・統合	95
(6)	生活課題の抽出	101
(7)	教授や指導の課題と工夫例調査結果より	103
(8)	実践事例1:利用者の全体像の理解を深める〜私の姿と気持ちシート	
	<宮崎保健福祉専門学校>	105
(9)	実践事例2:利用者の思い・願いを基盤においたアセスメントシート	
	~アセスメントシート<聖和学園短期大学・仙台白百合女子大学>	106
(10)	実践事例3:情報の分析・解釈・統合の理解~課題分析ワークシート	
	<静岡県立大学短期大学部>	107
(11)	実践事例4:利用者の生活課題の理解~演習事例(A さん)	
	<静岡県立大学短期大学部>	108
(12)	実践事例5:介護過程の思考過程の理解を深める~旅行計画の作成	
	<河原医療福祉専門学校>	109
(13)	実践事例6:ICFの視点で理解を深める~介護過程の展開シート	
/	く聖力タリナ大学>	110
4 1	<b>~ 注:</b>	111
•	↑雑計画とコアコンピテンシー	111

(2)介護計画とは	113
(3)介護計画立案のポイント	115
(4)教授や指導の課題と工夫例調査結果より	117
■ 5 実施と評価	_
(1) 実施とコアコンピテンシー	
(2) 実施とは	
(3) 実施のポイント	
(4)評価とコアコンピテンシー	
(5)評価とは	
(6) 評価のポイント	
(7)教授や指導の課題と工夫例調査結果より	129
■ 6 介護過程の理解を深めるために	131
<ul><li>(1)カンファレンスとは</li></ul>	
(2) カンファレンスのポイント	
(3) ケーススタディとは	
(4) ケーススタディのポイント	
(5) 実践事例7: 多職種連携の理解~多学科合同によるケーススタディ	131
〈専門学校 ユマニテク医療福祉大学校〉	135
(6)実践事例8:ケーススタディの体系的な実践~ケーススタディ実施要項	133
(5) 久成子(7) 0 1 2 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7	136
、	130
実践事例	137
実践事例1:利用者の全体像の理解を深める〜私の姿と気持ちシート	138
実践事例2:利用者の思い・願いを基盤においたアセスメントシート	143
実践事例3:情報の分析・解釈・統合の理解~課題分析ワークシート	152
実践事例4:利用者の生活課題の理解〜演習事例(A さん)	162
実践事例 5 : 介護過程の思考過程の理解を深める〜旅行計画の作成	175
実践事例6:ICF の視点で理解を深める~介護過程の展開シート	185
実践事例7:多職種連携の理解〜多学科合同によるケーススタディ	197
実践事例8:ケーススタディの体系的な実践〜ケーススタディ実施要項	204
参考・引用資料 一覧	215
本調査研究 協力者一覧	216

# ■ 1 活用にあたって~作成の目的と留意点

令和2年に全国5会場で実施した研修会「介護過程の展開に関する研修会ー教授方法と学生 指導」において使用したパワーポイントスライドと配布資料をもとに作成しました。

### ■介護過程を教授・指導する視点 <パワーポイントスライド>

介護過程とは、「利用者が望む生活を実現するために取り組む、科学的思考と実践のプロセス」です。介護過程は、養成校と実習施設が両輪となって、介護福祉士としての専門的知識と技術を修得できるよう教授・指導しています。しかし、養成校により修業年限が異なることから、介護過程の教授の流れ、実習に行く時期等は異なります。また、介護過程の教授の方法は養成校によって違い、介護過程の指導や実践も施設・事業所等で違いがあります。しかし、養成校で学んだ介護過程を、介護実習で展開し、介護過程の実践力を修得するためには、養成校と施設・事業所等が介護過程について共通の理解を持つことが重要です。

「介護過程の教授と指導の事例」におけるパワーポイントスライドと解説は、養成校や施設・ 事業所等において介護過程を教授・指導する視点を共有することを目的に作成しました。教授・ 指導に関する経験に関係なく、また養成校・実習施設(事業所)のどちらの関係者であっても 共有できる内容になるように作成しています。

なお、パワーポイントは公益社団法人日本介護福祉士養成施設協会のウェブサイトにアップロードしますので、ダウンロードするなどして活用を図ってください。

### ■介護過程の教授や指導の実践事例

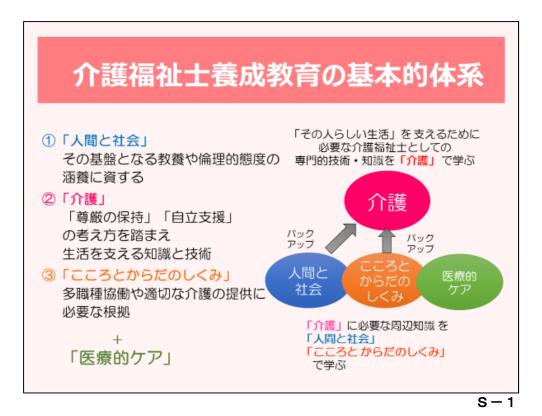
「介護過程の教授と指導の事例」では、各養成校が抱える課題に対する実践事例として研修会で紹介した事例を掲載しました。実際に授業等で使用されている教材や資料を養成校からご提供いただき掲載しています。また、研修会参加者からあげられた「もっと詳しく知りたい」という声に応えるために、資料の作成者にねらいや使用のポイントなどの解説を加えていただきました。

なお、ご提供いただいた「実践事例」は介護過程の教授・指導の流れの中の一部を切り取ったものです。他の科目との連携や他の資料の活用等があってこそ、理解や学びにつながるものもあります。それぞれの養成校の教授・指導の段階の中でこそ成り立つものであることをご理解の上、参考としてください。また、「実践事例」は「このようにすべき」という例ではなく、素材として捉えていただくことも重要です。

実践事例は、事例のご提供をいただいた養成校の先生や関係者が試行錯誤、創意工夫を凝ら し、時間をかけて作成しているものです。流用やコピーを避けるなど、倫理的配慮に基づく活 用をお願いいたします。

# ■ 2 介護過程とは

### (1)介護福祉士養成教育における介護過程の位置づけ



上図の右にあるのが介護福祉士養成教育の基本的な体系です。養成課程は3領域である「人間と社会」、「介護」、「こころとからだのしくみ」と「医療的ケア」で構成されています。領域「介護」の学びを豊かにするために「人間と社会」、「こころからだのしくみ」の基礎的な学びが必要であると体系づけています。

領域「人間と社会」では、「基盤となる教養や倫理的態度を涵養に資する」内容としています。新しい養成課程では「福祉の理念を理解し、尊厳の保持や権利擁護の視点及び専門職としての基盤となる倫理観を養う」等となっています。

領域「こころとからだのしくみ」では、「多職種協働や適切な介護の提供に必要な根拠」を 学ぶ内容としています。新しい養成課程では「介護実践に必要な根拠となる、心身の構造や 機能及び発達段階とその課題について理解し、対象者の生活を支援するという観点から、身 体的・心理的・社会的側面を統合的に捉えるための知識を身につける」等としています。

領域「介護」では、「尊厳の保持、自立支援の考え方を踏まえ、生活を支える知識と技術」としています。新しい養成課程では「各領域で学んだ知識と技術を統合し、介護実践に必要な観察力・判断力及び思考力を養う」として、領域「介護」が「人間と社会」と「こころとからだのしくみ」の領域で学んだ内容を統合し、専門職としての観察力や判断力、思考力を基礎とした実践力を培うことが求められています。

# 

平成 19 年の改正では、介護過程の教育内容のねらいは「他の科目で学習した知識や技術を統合して、介護過程を展開し、介護計画を立案し、適切なサービスの提供ができる能力を培う」としていました。介護過程の展開方法について述べていますが、目的については記載されていませんでした。

今回の改訂においては、介護過程の展開の目的が示されました。「本人の望む生活の実現に向けて、生活課題の分析を行い、根拠に基づく介護実践を伴う課題解決の思考過程を習得する学習とする」となりました。「本人の望む生活の実現」が目的であることがはっきりと示されました。「望む生活を実現する」ための「生活課題」を分析することが示されたことはとても重要です。客観的な生活課題を改善するのではなく、「望む生活を実現するための生活課題の分析」をし、優先順位を決めて、実践することが介護過程なのだと示されました。

ICF等アセスメントの視点から抽出された生活課題が本人の望む生活と関連づけられなければならないということが示されたことで、介護過程の展開は新しい内容となったと考えられます。

介護過程(150時間) <sub>—</sub> 教育に含むべき事項と留意点				
教育に含むべき事項	留意点			
①介護過程の意義と 基礎的理解	介護実践における介護過程の意義の理解をふまえ、介護過程を展開するための一連のプロセスと着眼点を理解する内容とする。			
②介護過程とチーム アプローチ	介護サービス計画や協働する他の専門職のケア計画と個別介護計画(介護計画)との関係性、チームとして介護過程を展開することの意義や方法を理解する内容とする。			
③介護過程の展開の 理解	個別の事例を通じて、対象者の状態や 状況に応じた介護過程の展開につなが る内容とする。			

S-3

新しいカリキュラムの各教育内容について、具体的にどのような内容の授業を展開することで、各教育内容のねらいや領域の目的を習得することができるのかを明らかにするため、「教育に含むべき事項」及び「留意点」が示された。

「介護過程」では、教育に含むべき事項として「①介護過程の意義と基礎的理解」、留意点として「介護実践における介護過程の意義の理解を踏まえ、介護過程を展開するための一連のプロセスと着眼点を理解する内容とする」とされています。一連のプロセスと着眼点を教授する必要があることが示されました。

次に、「②介護過程とチームアプローチ」、留意点として「介護サービス計画や協働する他の専門職のケア計画と個別介護計画との関係性、チームとして介護過程を展開することの意義や方法を理解する内容とする」とされています。個別介護計画は介護サービス計画(ケアプラン)との連動とともに、他の専門職のケア計画とも連動していることが必要となります。もちろん介護職チームの共通理解と連携が基礎となることは言うまでもありません。

最後に、「③介護過程の展開の理解」、留意点として「個別の事例を通じて、対象者の状態や 状況に応じた介護過程の展開につながる内容とする」とされています。個別の事例(対象者の 多様性に応じて)を準備し、対象者の状態や状況に応じた介護過程の展開を教授することが求 められています。

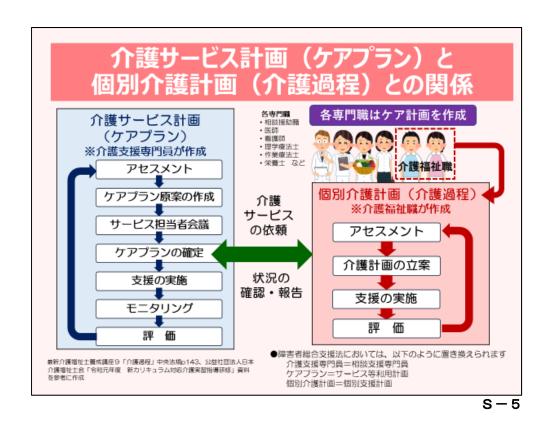
#### 介護実習(450時間) 教育に含むべき事項と留意点 留意点 教育に含むべき事項 介護過程の展開を通して対象者を理解し、 ①介護過程の実 本人主体の生活と自立を支援するための 践的展開 介護過程を実践的に学ぶ内容とする。 多職種との協働の中で、介護福祉士とし ての役割を理解するとともに、サービス ②多職種協働の 担当者会議やケースカンファレンス等を 実践 通じて、多職種連携やチームケアを体験 的に学ぶ内容とする。 対象者の生活と地域との関わりや、地域 ③地域における での生活を支える施設・機関の役割を理 生活支援の実践 解し、地域における生活支援を実践的に 学ぶ内容とする。

S-4

「介護実習」に関しても新たに教育に含むべき事項として3点が明示されました。「①介護 過程の実践的展開」、「②多職種協働の実践」、「③地域における生活支援の実践」です。「①介護 過程の実践的展開」、「②多職種協働の実践」については、これまでの教育課程では、教育に含むべき事項に明示されていませんでしたが、実際には実施されてきた内容です。

「③地域における生活支援の実践」が施設の大きな課題となります。事業所(通所介護・訪問介護)等は地域や在宅との関係が密ですから、取り立てて問題にはならないと思います。この課題については、通所介護事業所や訪問介護事業所で実施することが、自然なことだと思われますが、施設でも「③地域における生活支援の実践」を実施することが求められています。施設の役割として、「利用者の生活と地域とのかかわり、地域での生活を支える生活支援の実践」があげられます。

社会福祉士法の改正で施設にも「地域貢献」が求められています。介護実習でも、施設が地域社会の資源として地域に貢献する姿を学ぶことになります。施設が地域に目を向け、要介護者の地域生活の拠点となることが求められています。そして、介護福祉士がその実践の役割を担うことを示していただければと思います。



介護サービス計画(ケアプラン)と個別介護計画について解説します。まず、作成者が誰であるのかが問題です。施設の場合、ケアプランの作成者は介護支援専門員(ケアマネジャー)です。個別介護計画の作成者は介護福祉士(介護福祉職)です。この違いをまず理解しましょう。ケアプランを作成する場合のサービス担当者会議には、介護を提供する介護福祉士を含め、看護師、栄養士、リハビリスタッフ等が参加します。これら専門職の総合的な計画がケアプランです。

個別介護計画は介護福祉士(介護福祉職)が作成し、介護福祉職がチームとして実践する計画です。個別介護計画は多職種連携(ケアプラン)の計画でもあり、介護福祉職チームの計画でもあることを理解しなければなりません。この個別介護計画を作成することが介護保険法で規定されているのは、通所介護計画と訪問介護計画ですが、施設には個別介護計画の作成が義務づけられていません。ですから、個別介護計画が作成されている介護保険施設は少ないかもしれませんが、実際には、ケアプランの中に含み込まれていますので、計画として作成されていなくても、介護福祉職の役割を実践していることが多いと思います。

今回の介護過程の展開では、介護福祉職の役割を計画として作成し、チームとして実践する ことが求められています。

### (2)介護過程とは

# 介護過程とは

- 「利用者が望む生活を実現するために取り 組む、科学的思考と実践のプロセス」をい う。
- 介護過程は、介護実践の根拠となるものであり、利用者の生活支援において、個別ケアの方向性や具体的な介護方法を示すものである。
- 対象者が一人の人間として、自分らしく日常生活を営むための支援方法を探求する過程であることを意味している。

S - 6

介護過程とは、「利用者が望む生活を実現するために取り組む、科学的思考と実践のプロセス」です。なぜ、科学的思考と言えるのでしょうか。それは介護福祉の専門的知識を活用して、利用者の望む生活を困難にしている原因を見出し、それを解決するためにどのような介護が必要なのかを検討し実践へとつなぐという、筋道を立て組み立てていく課題解決の思考過程であるためです。

介護過程は、介護実践の根拠となるものであり、利用者の生活支援において、個別ケアの 方向性や具体的な介護方法を示すものです。経験的あるいは場当たり的ではない、科学的思 考により立案された個別介護計画に基づく介護実践は、利用者個々の心身の状況に応じた根 拠のある介護実践となります。

介護過程は、対象者が一人の人間として、自分らしく日常生活を営むための支援方法を探求する過程であることを意味しています。科学的思考により立案された個別介護計画に基づく介護実践を一定の期間ごとに評価をして介護過程の展開を連続させることは、介護福祉専門職として利用者の望む生活の実現に向けて質の高いケアを目指していくことになります。

### (3)介護過程の意義と目的

# 介護過程の意義と目的

- •介護過程の展開によって、利用者の心身の状況に応じた質の高い個別ケアを提供でき、利用者のQOLの向上につながる。
- •介護過程の目的は、利用者が望む生活 を実現する上で生じている生活課題を 解決することにある。

S-7

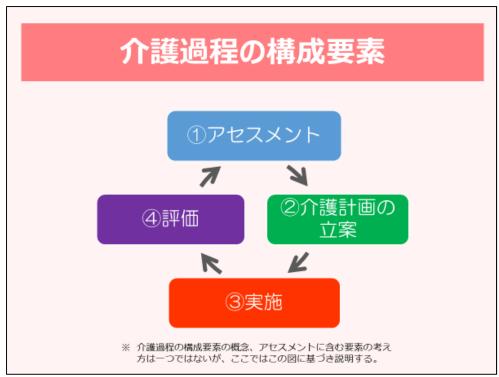
介護過程の意義は、介護過程の展開によって、利用者の心身の状況に応じた質の高い個別ケアを提供できることにあります。それは、利用者のQOLの向上につながります。

介護過程の目的は、利用者が望む生活を実現する上で生じている生活課題を解決することにあります。

ここでいう「生活課題」とは、問題というネガティブな捉え方ではなく、「本人の望む生活」 という観点からの課題として位置づけています。

介護福祉職の提供するケアの全てに通じることですが、介護過程の展開方法だけを修得できればいいという訳ではありません。その方法を用いることで、利用者にどんな意義をもたらすことになるのか、何のために用いるのか等を理解している必要があります。それは、介護福祉職の業務の目的や役割、仕事のやりがいを体得することにつながり、自立した専門職としての歩みの一歩になります。

### (4)介護過程の構成要素



S-8

介護過程の構成要素の概念やアセスメントに含む要素の考え方は1つではありません。本書では、図の①~④を構成要素とし、これに基づき説明をしていきます。

介護過程の構成要素は、①アセスメント、②介護計画の立案、③実施、④評価、の4つの要素からなり、PDCAサイクル(生産技術における品質管理のなどの継続的改善手法)を形成しています。

①のアセスントとは、(1)情報収集、(2)情報の分析・解釈・統合、(3)生活課題の抽出までをいいます (90 ページ)。アセスメント=情報収集として理解しないように留意する必要があります。

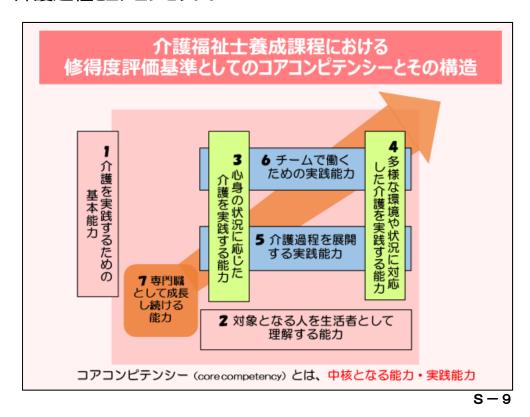
②の介護計画の立案とは、抽出した課題を解決するための介護目標を設定し、目標達成するための具体的な介護内容と支援方法を組み立て、介護計画を作成することです。

③の実施とは、②で立案した介護計画に基づく根拠のある介護実践であり、介護計画に示された介護目標と介護内容及び支援方法を介護チームで共有し、統一したケアを提供します。 ④の評価とは、利用者の生活課題の改善状況を、個別介護計画に示された介護目標にてら

して、その達成度を判定します。

一連の過程を介護過程といいますが、これは単なる流れではなく、4 つの構成要素別に求められる専門的な思考や技術を包含しているがゆえに、介護福祉士の専門性として位置づけられています。

### (5)介護過程とコアコンピテンシー



介護福祉士養成課程における修得度評価基準として、図にある「介護福祉士養成課程における修得度評価基準としてのコアコンピテンシー」が示されています。

コアコンピテンシーとは、「中核となる能力・実践能力」のことです。

この図は、7つのコアコンピテンシーの関係性を示したものです。

コアコンピテンシーの「1.介護を実践するための基本能力」「2.対象となる人を生活者として理解する能力」は、実践能力の中でも最も基盤となる能力であるため、図全体を囲むように配置されています。

中央には、4 つの実践能力が井桁を組むように配置されています。これは、4 つの実践能力が相互に影響しあう能力であることを意味します。「3. 心身の状況に応じた介護を実践する能力」「4. 多様な環境や状況に対応した介護を実践する能力」は、具体的な介護実践で求められる能力です。「5. 介護過程を展開する実践能力」「6. チームで働くための実践能力」は、利用者に対する個別ケアと、チームで行うケアの中で求められる能力です。「7. 専門職として成長し続ける能力」は、下から上方向に伸びる形であらわしています。これは、「専門職としての成長」という課題が、資格をとった後から始まるのではなく、養成課程在学中からの課題であること、将来に向かって継続が必要な課題であることを示しています。

※「介護福祉士養成課程における修得度評価基準の策定等に関する調査研究事業報告書」 (社団法人介護福祉士養成施設協会、2019年3月)



# 

S - 10

介護福祉士養成課程における修得度評価基準は、介護福祉士養成課程で身につけるべき基準を示したものです。つまり、養成校で何を教育したらよいか、養成校卒業時に何が求められるかを示したものです。

介護福祉士養成課程における修得度評価基準の枠組みは、中核となる能力・実践能力である「コアコンピテンシー」(上図左)と、コアコンピテンシーを身につけるために必要な「具体的能力」(上図右)、その具体的能力に紐づけて示された「介護福祉士養成課程における修得度評価基準」(次ページ)で構成されています。

「コアコンピテンシー」は 7 つ、「具体的能力」は 24、「介護福祉士養成課程における修得度評価基準」は 120 あります。

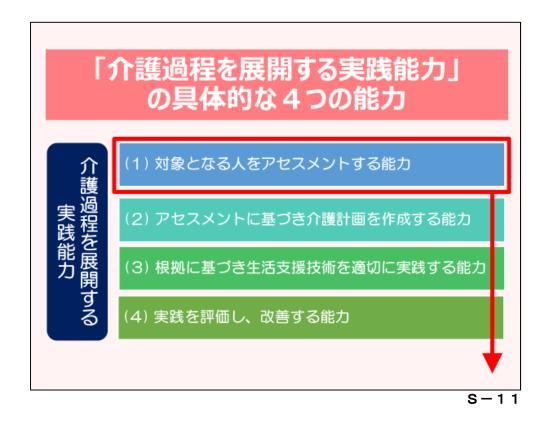
コアコンピテンシーの 1 つである「介護過程を展開する実践能力」(上図左)を身につけるための「具体的能力」は 4 つあります (上図右)。(1)対象となる人をアセスメントする能力、(2)アセスメントに基づき介護計画を作成する能力、(3)根拠に基づき生活支援技術を適切に実践する能力、(4)実践を評価し改善する能力、です。

本書では、この4つの「具体的能力」に照らし合わせて、介護過程の展開について説明します。

なお、コンピテンシーの意味は「能力」ですが、その他の意味には「資質」「適性」という 意味もあります。どのようにしたら「能力」を身につけられるかについては、教科書を読む だけでは身につきません。また、より良い結果や成果を導くためには、身につけた知識や技 術を活用しなければ、本当に能力を身につけているとは言えません。1 つの能力も、たくさ んの能力や知識、技術などがあわさって形成されます。コアコンピテンシー「介護過程を実 践できる」を形成する具体的能力の1つである「(1)対象となる人をアセスメントする能力」 だけをとっても、たくさんの修得度評価基準が達成された結果として身につくと言えます。

# ■3 アセスメント

# (1) アセスメントとコアコンピテンシー



介護福祉士養成課程における修得度評価基準としてのコアコンピテンシー「介護過程を展開する実践能力」を身につけるためには、(1)対象となる人をアセスメントする能力、(2)アセスメントに基づき介護計画を作成する能力、(3)根拠に基づき生活支援技術を適切に実践する能力、(4)実践を評価し、改善する能力の4つの能力を養うことが必要です。

コアコンピテンシーの「介護過程を展開する実践能力」を身につけるための具体的能力として、まず「(1)対象となる人をアセスメントする能力」が必要となります。

※「介護福祉士養成課程における修得度評価基準の策定等に関する調査研究事業報告書」 (社団法人介護福祉士養成施設協会、2019年3月)



### (1) 対象となる人をアセスメントする能力

#### 介護福祉士養成課程における修得度評価基準

- 91. 介護実践におけるアセスメントの意義と着眼点を説明できる
- 92. 事例と実習を通して、情報の分析・解釈・統合ができる
- 93. 状況に応じた介護や生活支援という目的を踏まえ、生活課題や介護の方向性を検討できる
- 94. 利用者の活動に影響をおよぼしている人間の心理、人体の構造と機能について説明できる

S - 12

「(1)対象となる人をアセスメントする能力」の修得度評価基準を示しました。

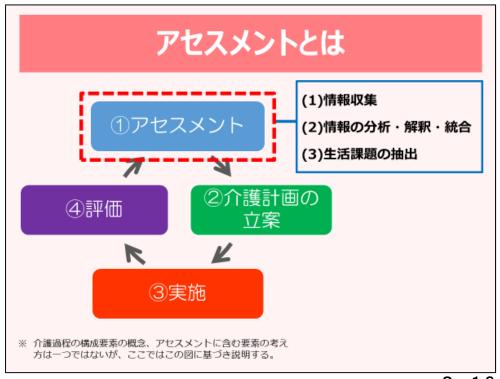
介護福祉士養成施設で学ぶ学生が卒業時に(1)対象となる人をアセスメントする能力を身につけるためには、どのような科目において教育を行い、どれくらい修得した能力を身につけたかを測る必要があります。それを示したものが介護福祉士養成課程における修得度評価基準です。

「介護福祉士養成課程における修得度評価基準」は 120 あります。91-94 の番号は、修得度評価基準全体の中の番号です。

- (1)対象となる人をアセスメントする能力の修得度評価基準は、以下の4つです。
- 「91.介護実践におけるアセスメントの意義と着眼点を説明できる」
- 「92. 事例と実習を通して、情報の分析・解釈・統合ができる」
- 「93. 状況に応じた介護や生活支援という目的を踏まえ、生活課題や介護の方向性を検討できる」
- 「94.利用者の活動に影響をおよぼしている人間の心理、人体の構造と機能について説明できる」

なお、(1)対象となる人をアセスメントする能力を修得するための、介護福祉士養成課程の 新カリキュラムの科目、教育に含むべき事項、想定される教育内容の例は、前ページの※に掲載されています。

# (2) アセスメントとは



S - 13

介護過程の最初の段階は、アセスメントです。

アセスメントに何を含むかは、いくつかの考え方があります。

本書では、アセスメントに含まれる要素を(1)情報収集、(2)情報の分析・解釈・統合、(3)生活課題の抽出の3つに分けています。

以下では、3つの要素で説明をしていきます。

# (3) アセスメントの目的・視点・基盤

#### アセスメントの目的と視点 ● アセスメントを行う目的は、利用者が望む生活を実現に向けて、生活 課題や介護の方向性を検討すること アセスメントの視点は、さまざまである。 「できること」と「できな 「利用者の言 ICFの「生活機能モデル」か いこと」を把握し、「でき 動」や「思い ら生活をとらえ、く生活課題の ること」を維持する工夫や、 や願い」を出 4要素>から支援を検討する 「生活の再構築」の視点か 発点にアセス 「活動」「参加」に注目する ら検討する メントする アセスメントの3つの視点 介護過程展開の視点 <自立の視点> <実践の目的(支援の指標)> 活動 (ADL、IADL) の維持・改善 (もてる力の発揮、もてる力を発揮するうえでの 支牌・困難、福祉用具の活用、意思表示の状況) 参加や役割の維持・拡充・実現 健康の維持・改善 <快適の視点> 社会生活や社会関係の維持・拡充 (プライバシーや自尊心の保持、生活スタイルや 価値観の維持、パワーレスを招く状態の有無) 安心・安楽、生活の満足感 <実践の基盤> <安全の視点> ・本人の願い、思い (生命の状態を悪化させている原因や悪化を招きそう な状況の有無、リスクマネジメントを要する状況の 有無) 介護サービスの理念 (尊厳の保持、利用者主体、自立支援)

S - 14

まず、アセスメントの目的と視点についてです。

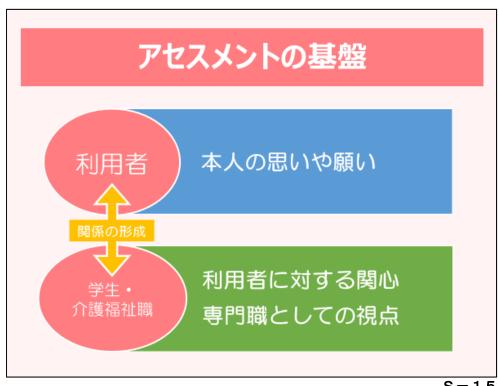
アセスメントを行う「目的」は、「利用者が望む生活の実現に向けて、生活課題や介護の方向性を検討すること」です。

しかし、現在、アセスメントは様々な方法で行われている現状があります。つまり、何を アセスメントするか、どのような考え方でアセスメントするかは、"様々な現状"があり、定 まっていません。

"様々な現状"の例を図に示しました。

スライドに記したように、「利用者の言動」や「思いや願い」を出発点にアセスメントする 方法があります。また、ICFの「生活機能モデル」から生活をアセスメントする方法や、 「できること」と「できないこと」を把握して生活を支援するなどの考え方があります。

あるいは、図にある「アセスメントの 3 つの視点」や「介護過程展開の視点」のように、アセスメントの視点を設定している例もあります。これらは、情報をどのような方向から考えて解釈するかや、生活課題や支援の内容を検討するための視点などの意味を持って設定されています。



S - 15

アセスメントの視点は"様々な現状"がありますが、どのような方法においても大切なこ とを、「アセスメントの基盤」として示しました。

1 つは、利用者と介護福祉職との「関係形成」です。実習の場合は、利用者と学生におけ る関係形成です。介護における望ましい関係性は、利用者主体を基本とし、利用者を尊重し てかかわることです。信頼関係の構築のために、利用者との関係形成という視点・態度をも つことは、介護過程を展開するための出発点であり、土台です。

関係形成は、出会った時から始まっています。日々の生活で関係形成をするという態度や、 関係形成をしてからアセスメントを行う、関係形成をしながらアセスメントを行うというこ とが大切です。

2つめは、「本人の思いや願い」を大切にすることです。本人の望む生活の実現に向けて支 援するには、利用者自身の思いや願い、利用者自身のニーズを踏まえて支援を考える必要が あります。

3つめは、介護福祉職や学生が持つべき態度や視点です。これには2つ大切なことがあり ます。1つは、介護福祉職や学生が利用者に対する「関心を持っている」ということ、「関心 をもってかかわる態度」を持つことです。2つめは、「専門職としての視点」です。専門職と しての視点がなければ、介護の質の向上、個別ケアの向上などにはつながらないと思われま す。

### (4)情報収集

# 情報収集の意義とシートの活用

#### ◆なぜ情報収集が必要か

- 利用者を総合的に理解するため。
- ・ 介護の目的にそった支援を行うため。

#### ◆情報収集シートを活用する意義

- 一定の枠組みからの情報収集ができる。
- 必要な情報をあげ、収集することができる。
- どの介護福祉職であっても、一定の情報収集を行うことができる。

#### ◆一定の情報収集シートを使用する限界

- 必要な情報は、介護の目的、介護サービスの種類、利用者の状況などによって違いがある。
- 項目にない情報がもれる可能性がある。

S - 16

情報収集はアセスメントの出発点です。

情報収集が必要な理由は、利用者を総合的に理解するため、介護の目的にそった支援を行うためです。そのために多角的な視点から情報収集を行います。何のために、どのような情報が必要なのかを考えながら情報収集します。

情報収集に偏りがないよう、一定の情報収集シートを使用することが多いと言えます。情報収集シートを活用する意義は、一定の枠組みからの情報収集ができることです。必要な情報をシート内に設定し収集するため、どの利用者に対しても、どの介護福祉職であっても等しく適切な情報収集を行うことを助けます。

一方、一定の情報収集シートを使用する限界もあります。必要な情報はどのような時にも同じとは言えないからです。つまり、介護の目的、介護サービスの種類、利用者の状況などにより情報収集の内容には違いが生じます。また、一定の情報収集シートを使用することは、シートに設定した情報項目以外はシートに記されない可能性があります。

いずれにしても、情報収集で得られた情報が、アセスメントの次の段階である情報の分析・解釈・統合を考えていく時の材料になります。情報収集で得られた情報の内容や、情報の量が次の段階にも影響を与えます。

# 情報の収集方法と留意点

#### ◆情報の収集方法

観察

・五感(視覚・聴覚・嗅覚・触覚・味覚)の活用

•検査、測定

コミュニケーション

・本人から聞く

・他職種、第三者から聞く

記録

さまざまな記録を読む

#### ◆情報収集の留意点

- 利用者とのかかわりの中で意図的に行う。
- 信頼関係の構築。
- 自分自身の受けとめ方の傾向を知る(自己覚知)。
- 継続的、多角的に情報収集を行う。
- 個人情報の管理。

S - 17

情報の収集方法は、観察、コミュニケーション、記録などがあります。

観察は、五感(視覚・聴覚・嗅覚・触覚・味覚)を活用し、利用者の状態を客観的に注意深くみることです。コミュニケーションは、本人とかかわったり、本人から聞いたり、家族や多職種といった第三者から聞くことを含みます。また、様々な記録から情報を得るということもあります。

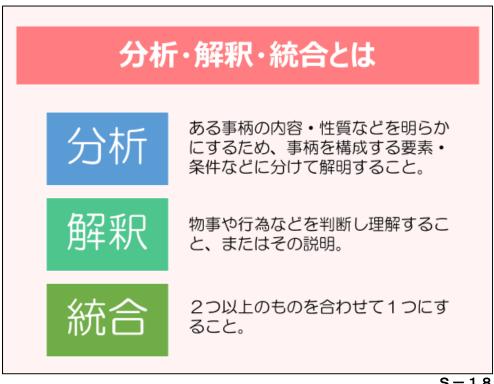
正確な情報を得るためには、情報は事実か、情報は正確か、情報は十分かを吟味しながら情報収集します。また、情報をありのままに受け取ることは難しいことです。私たちの中では、情報を受け取ると同時に、情報の解釈や意味づけが行われることが多いといえます。自分の経験や価値観が情報のもつ意味を変えてしまうことがあります。あるいは、第三者や記録から情報収集する場合は、既に意味づけされた情報を受け取ることもあります。事実は何かを意識して、情報収集することが大切です。

情報収集の留意点を5つ記しました。情報収集は観察や記録など多様な手段で行いますが、利用者とかかわりながら意図的に情報収集します。信頼関係の構築を図りながら、情報収集します。そして、自分自身の受けとめ方の傾向を知る(自己覚知)ことで、自分の偏りによる影響を少なくします。自分の受けとめ方の傾向を認識し、中立的な立場で情報収集をする態度が大切です。

また、1 つだけの情報で判断しないこと、情報は変化する可能性があるために、情報収集は継続的・多角的に行います。

専門職は秘密保持の義務を担っています。収集した個人情報の管理が重要となります。

### (5)情報の分析・解釈・統合



S-18

アセスメントの1つめの要素である「情報収集」に続く、2つめの段階は、「情報の分析・ 解釈・統合」です。

「分析「解釈」「統合」について、辞書的な定義を述べます。

「分析」という用語の辞書的な意味は、「ある事柄の内容・性質などを明らかにするため、 事柄を構成する要素・条件などに分けて解明すること」です。「解釈」とは、「物事や行為な どを判断し理解すること、またはその説明」をいいます。「統合」とは、「2つ以上のものを 合わせて1つにすること」です。

情報の分析・解釈・統合について、本書では次のように定義します。情報の分析・解釈と は「複数の情報を関連づけて情報の意味を明らかにすること」、統合とは「分析・解釈の結果 をまとめ、判断すること」です。

# 介護福祉の観点からの情報の分析・解釈・統合

- 専門的知識を活用して、情報を分析・解釈・統合 する。
- 情報と情報を関連づけて、情報を分析・解釈・統合する。 \_\_\_\_

介護福祉の観点から、生活課題を抽出すること、 支援を方向づけることにつながる。

S - 19

情報収集を通して得られた情報は、情報の意味を考え、情報が分析・解釈されてはじめて 情報収集の目的を達せられます。つまり、情報収集の目的である「利用者を総合的に理解す るため、介護の目的にそった支援を行うため」は、情報が分析・解釈・統合されることによ って達せられるといえます。

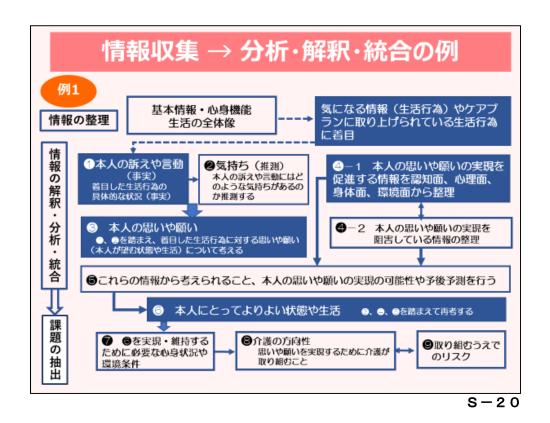
「情報の分析・解釈・統合」を行うために必要なことについて、基本的に大事なことは、 専門的知識を活用して情報を分析・解釈・統合することです。

専門的知識は様々あります。簡潔にいえば、介護福祉士養成課程における「人間と社会」「介護」「こころのしくみ」「医療的ケア」で学んだ知識・技術を活用して、情報を分析・解釈・統合を行います。

次に大切なことは、情報と情報を関連づけて、情報を分析・解釈することです。先に、情報の分析・解釈とは「複数の情報を関連づけて情報の意味を明らかにすること」と述べました。例えば、65歳という1つの情報が意味するものは限定的ですが、健康状態やその他の情報と関連させて分析すると、分析は違ったものになるはずです。

既述のとおり、アセスメントの方法は様々です。利用者の「思いや願い」を大切にするのか、「できること」「できないこと」を把握して生活を支援するのかでは、同じ情報であっても違った解釈が行われる可能性があります。つまり、情報を関連づけて情報の意味を明らかにするという根本は同じでも、どのような視点を持ってアセスメントするかで、分析・解釈・統合の結果は異なることがあります。

考え方によって異なる結果が生ずることは批判されるべきではありません。多様な視点があることを踏まえ、どのような方法であってもアセスメント結果に一定の妥当性があり、利用者が納得するものであれば問題ないと言えます。



次は、分析・解釈・統合をどのように行うかの例です。

アセスメントの視点は、様々な現状がありますが、これから説明する例は一例です。どの 方法が第一に良いとか、どれが悪いということはありません。

1つめは、本人の思いや願いを中心にアセスメントする方法です。

図の中に番号が記してありますが、この番号の順にアセスメントを進めます。

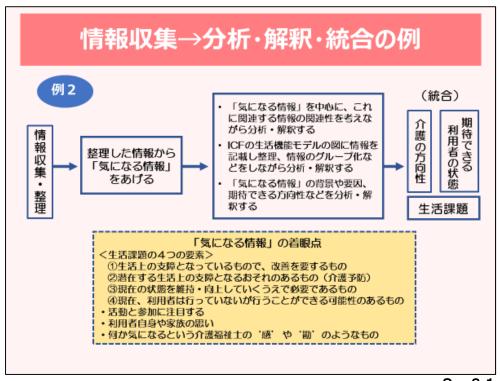
気になる情報やケアプランに取り上げられた生活行為に着目し、①で「本人の訴えや言動 (事実)」に焦点を絞り、それに対する分析を②から⑨の順に進めます。

具体的な情報分析・解釈・統合のプロセスとして、まず、望みや困りごとを単純に記載するのではなく、利用者の具体的な言葉や様子と、利用者の生活全体の様子や言動から利用者の思いを推測します(②③)。

そして、その思いや願いの実現を促進する情報として、認知面、心理面、身体面、環境面から整理し、またその思いを阻害する情報も整理します(④)。これを踏まえ、利用者の思いと客観的情報から、状況を判断・考察し、そして現段階で実現可能な本人にとってより良い状態や生活像を導き出します(⑤⑥)。

最後に、課題の抽出として、願いや思いを実現・維持するための心身の状況や生活環境の 要件を列挙し、その中から介護領域が取り組むべき支援の方向性を検討し、取り組む上での リスクを考えます(⑦⑧⑨)。

このように、思いの実現の可能性や予後予測をし、本人にとってのより良い状態や生活像 を導きだし、課題を抽出するという方法です。



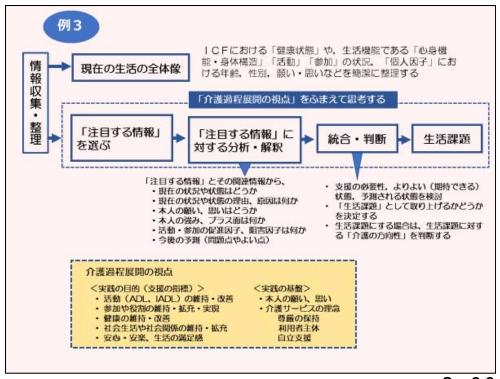
S - 21

2 つめの例は、「情報の収集・整理」を行い、その情報の中から「気になる情報」をピックアップし、「気になる情報」を中心に、これに関連する情報の関連性を考えながら分析・解釈する方法です。

アセスメントの過程を、図の左から右の方向に向かって書かれている内容にそって、段階 的に進むプロセスとして図式化しています。これらの過程では、それぞれのプロセスを踏み ながら思考すること、思考した内容を文章化するという作業を伴います。

「気になる情報」のピックアップですが、図の中の黄色で示した箇所の中に、「気になる情報の着眼点」が提示されています。

分析・解釈の段階では、「ICFの生活機能モデルの図に情報を記載して整理」したり、「気になる情報」の背景や要因、期待できる方向性などを分析・解釈することを行います。そして分析・解釈の結果を統合し、介護の方向性や、期待できる状態などと関連させながら、生活課題の抽出を行うという方法です。



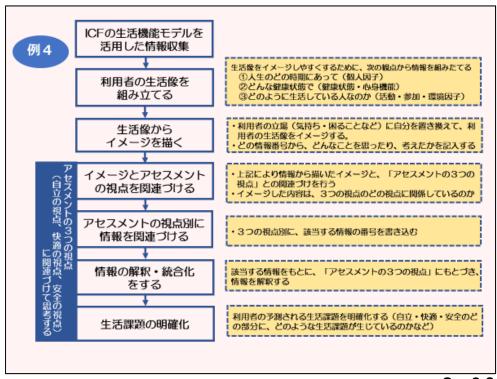
S-22

3つめの例は、2つめと同じく、「注目する情報」を中心に分析・解釈するという方法です。 アセスメントの過程を、図の左から右の方向に向かって書かれている内容にそって、段階的 に進むプロセスとして図式化しています。

方法としては、「情報の収集・整理」をした後に、「現在の生活の全体像」の理解を行います。「現在の生活の全体像」を整理することで、その人の生活状況や、思いなどを理解し、分析・解釈に活かします。

そして、「注目する情報」を選び、それを中心に分析・解釈をします。

図の中の黄色で示した箇所に「介護過程展開の視点」が記されていますが、この視点は、「注目する情報」を選ぶ段階から、「生活課題」の抽出や、「介護の方向性」の判断までの過程に対して、全体的にかかる視点として提示されています。



S - 23

4 つめは、アセスメントの 3 つの視点として「自立」「快適」「安全」を置き、アセスメントする方法です。アセスメントの過程を、図の上から下の方向に向かって書かれている内容にそって、段階的に進むプロセスとして図式化しています。

まず、「ICFの生活機能モデルを活用して情報収集」を行い、情報を踏まえて「利用者の 生活像を組み立てる」ことや、「利用者の生活像をイメージ」します。

そして、「利用者の生活像をイメージ」した内容は、「アセスメントの3つ視点」とどう関連しているかを考えます。その上で、アセスメントの3つの視点別に、該当する情報をもとに「情報を関連づける」や「情報の解釈・統合化」を行います。

また、「生活課題を明確化」する段階でも、アセスメントの 3 つの視点のどこに生活課題が生じているのかを踏まえて検討します。

以上、4 つの例を示しましたが、様々な方法で、分析・解釈・統合が行われています。

#### (6) 生活課題の抽出

# 生活課題とは

- 利用者が望む生活を実現するために、「利用者自 身の生活上の課題」と「それを解決する」という 意味が含まれている。
- 利用者の望む生活や、期待できる利用者の状態を 目指すための課題である。
- プラス面(強み・長所・よい点)、マイナス面 (機能低下や問題)など、多面的なものを含む概 念である。
- 介護福祉職が支援を行うことで解決・改善・維持・実現できる。

S-24

まず、「生活課題とは何か」ですが、注意しなければならないのは、生活課題は、利用者の 問題点や改善点など、マイナス面やネガティブな面だけを捉えることではないということで す。

「生活課題」の用語の意味には、利用者が望む生活を実現するために、「利用者自身の生活上の課題」と「それを解決する」という意味が含まれています。つまり、生活課題は、利用者の望む生活や、期待できる利用者の状態を目指すための課題です。利用者自身からみた課題です。

生活課題は、利用者の問題点や改善点などのようなマイナス面だけを捉える用語ではありません。プラス面(強み・長所・良い点)、マイナス面(機能低下や問題)など、多面的なものを含む概念です。

最後に、生活課題は、介護福祉職が支援を行うことで解決・改善・維持・実現できることです。生活課題が利用者自身からみた課題であるとはいえ、介護福祉職が取り組めないことは生活課題になりません。

# 生活課題の抽出

- 「情報の分析・解釈」を踏まえ、生活課題を抽出する。
- 生活課題は、「利用者を主語」に表現する。
- 生活課題の表現方法は、下記のようにさまざまある。
  - ✓ 「~したい」「~なりたい」など、目標指向型で表現。
  - ✓ 「○○○」と、利用者の状況や、ニーズを記入する。
- 生活課題が複数ある場合は、優先順位を考える。

S - 25

「生活課題の抽出」については、次のことを意識します。

1つは、「情報の分析・解釈」を踏まえ、生活課題を抽出します。

2つめは、生活課題は、「利用者を主語」にして表現します。

利用者を主語にした上で、生活課題の表現をしますが、表現方法は様々あります。「~したい」「~なりたい」など、目標指向型で表現する方法が一般的です。例えば、「他の入居者とのコミュニケーションを増やしたい」「食事摂取量を維持したい」などです。あるいは、「服薬を忘れることがある」「夕方から夜間に不安感がある」など、利用者自身の状況や、利用者からみたニーズをそのまま記述します。利用者を主語にした表現であれば、この他の表現方法でもかまいません。

3 つめは、生活課題が複数ある場合は、優先順位を考えます。生活課題の優先順位を決める判断基準は様々です。例えば、「利用者の願いや思い、要望」を優先したり、「生活の継続性の尊重」「生命を脅かすような緊急性のあるもの」「自立した生活の妨げとなるもの」などがあります。

#### (7) 教授や指導の課題と工夫例 調査結果より

# アセスメントにおける教授や指導の課題

~調査の結果から~

課題 1 情報の分析・解釈・統合の教授・指導が難しい

課題 2

ICFと関連づけて理解を促すことが 難しい



上記以外にも例えば・・・・

- ●学生が多様化している(年齢、社会経験、留学生など)
- ●生活のイメージが難しい・生活感のない学生がいることがある
- ●情報収集、観察を苦手とする学生がいる
- ●語彙や文章力、コミュニケーションが苦手な学生がいる
- 介護過程への苦手意識
- ●事例の活用が難しい・事例に限界がある など

S - 26

「介護過程展開の実践力向上のための調査研究」(令和元年度、公益社団法人日本介護福祉士養成施設協会)では、養成校や実習施設を対象に介護過程の教授・指導に関する課題や工夫点を把握するための調査を実施しました。

養成校の教員が感じている課題は、アセスメントに関する教授・指導が多くあげられました。具体的には、情報収集とともに、分析・解釈・統合に関する教授・指導が難しいと感じている教員が多くいました。ICFを活用したアセスメントを教授・指導することの難しさもあげられています。

その背景の1つに学生の多様化があります。高等学校を卒業したばかりの学生から社会人としての経験を有した人まで学生の年齢は幅広く、近年は留学生の増加も認められます。若い学生は利用者の生活をイメージすることが苦手な場合があり、また年齢の高い学生は固定観念が強い特徴があげられました。日本人も留学生も、語彙や文章力、コミュニケーションが苦手などの課題があげられています。

アセスメントについては、この段階でつまづく学生が多い、介護過程の苦手意識にもつながりやすいという指摘があります。

# アセスメントにおける教授や指導の工夫

~アンケート調査の結果から~

工夫 1

独自のシートを作成している

工夫 2

自分自身、家族、クラスメート、教員など身近なところから情報収集する



上記以外にも例えば・・・・

- ●情報収集が行いやすいようD V Dを作成
- ●事例の統一を教員間で行っている
- ●個人ワーク→グループワーク 気づきを促す など

S-27

調査からは、アセスメントの教授・指導における養成校の多様な取り組みが把握できました。

情報収集の方法として自分自身や家族、クラスメート、教員など身近なところから情報収集をして情報収集の視点や内容を学ぶ工夫があげられました。身近な事例を通して、苦手意識を持つことなく、相手に興味を持つ姿勢を学んだり、コミュニケーションの力をつける取り組みとなります。

そのほか、それぞれの養成校がアセスメントのために各種シートや様式を独自に作成していたり、映像を独自で作成する、マンガやアニメを使うなどの教材の工夫、事例を科目間や教員間で統一し他の科目との連携を図る、グループワークで他者の意見を知り多様な視点があること・自分に足りない視点を理解するなどの工夫があげられました。

# (8) 実践事例 1: 利用者の全体像の理解を深める〜私の姿と気持ちシート 〈宮崎保健福祉専門学校〉

事例1:利用者の全体像の理解を深める	
事例1	私の姿と気持ちシート(宮崎保健福祉専門学校)
講義・演習 の特徴	<ul><li>利用者の姿をシートの中心にイラストで記載</li><li>利用者の気持ちや聞き取った言葉を記載</li></ul>
教育の ねらい・効果	<ul> <li>利用者の姿をイラストで記載することによって、利用者を 観察する</li> <li>利用者の方とコミュニケーションを図りながらイラストを 書くことで利用者との関係が形成できる</li> <li>アセスメントシートの項目を埋めることではなく、利用者 の思いに目を向けることができる</li> </ul>

S - 28

介護過程は、利用者主体として考えることが重要です。しかし、生 活経験の浅い若い学生や、生活様式が利用者とは全く違う学生にとっ て、利用者の立場でものごとを考えることは困難です。日本文化の畳

詳細資料と解説 は 138 ページ〜

や、障子、ふすまのない家に住み、いつでもコンビニに行けば、手に入るものが豊富な時代に生きる学生たちです。言葉の表面だけを捉えがちな学生にとって、我慢、辛い経験、本心と裏腹な態度、喜怒哀楽の入り混じった感情など、利用者の真意を理解することはとても難しいことです。学生が見て感じた利用者のイメージとなる様子を描き、利用者が言葉にしたことや、日ごろの生活を観察した中から利用者の思いを吹き出しとして書き出します。利用者を絵に描き、可視化することで、学生が頭の中で、ぼやっと考えている利用者の全体像を明確にし、アセスメントの切り口が見えやすくなると考え取り組んでいます。

介護過程の特徴として、これまで学習した内容を統合して答えを導き出さなくてはなりません。特に疾患についての関連性が弱いことが課題です。詳細資料 様式3の全体像だけを見ると、「風船バレーがしたい」という言葉に学生はヒットしがちです。利用者を図にして可視化すると、思いと身体状況に心不全を患っている90代の利用者という情報の関連性を持たせることが需要だと思います。可視化することで、利用者は「在宅酸素」を利用している事を思い出させます。利用者が言葉に出したことと、身体状況の関連性を考えるきっかけとなると考えています。

利用者を描くことで、他者との情報の共有化が図りやすいと考えています。

介護はチームワークが重要です。他者と情報を共有する時に、全体像が描いてあると、利用者をみんなでイメージしやすいようです。言語化するのが苦手な学生が多い中、絵による情報は共有しやすいようです。

# (9) 実践事例2:利用者の思い・願いを基盤においたアセスメントシート ~アセスメントシート〈聖和学園短期大学・仙台白百合女子大学〉

事例 2 : 利用者の思い・願いを基盤においた アセスメントシート	
事例2	アセスメントシート(聖和学園短期大学・仙台白百合女子大学)
講義・演習 の特徴	<ul><li>介護過程の意義・目的にそったかたちで思考するプロセスのフレーム化</li><li>ポジティプアプローチによる課題解決</li></ul>
教育の ねらい・効果	<ul> <li>利用者の持てる力(潜在的な力)に気づく感性、建設的に考える力を培う</li> <li>未来を創るケアを実施することで、ケアの楽しさ・やりがいを体感できる</li> <li>通り一遍の観察、表面的に見るから踏み込んで観ることが必要な事に気づく</li> <li>利用者の内面の洞察があがる 小さな気づきが増える</li> <li>知ることが楽しい、関わることが楽しい</li> </ul>

S - 29

2011~2015 年度にかけて、「現場の実事例を用いた介護過程の展開」 について、現場に出向き、施設研修会を企画実施する中で、施設職員 が取り組みやすい介護過程の展開シートの開発を模索した結果、たど り着いたものです。

詳細資料と解説 は 143 ページ~

施設職員には、介護過程、ICFという言葉を知らないという人、ケアプランの存在さえ知らない人もおりました。しかし、なぜ介護の仕事をしているのか、どういう介護がしたいのかと問うと、人とかかわるのが好き、役に立ちたい、笑顔にしたいなどという思いを持っていることは確認できました。いざ利用者の観察・情報となると、○○ができない、△△が大変など表面的な部分における情報の認識でしかなく、支援方法についてもその根拠を明確に持つ人はおらず、それぞれに違いがあることも初めて知ったというような状況でもありました。以前に実習で使用していたシートも問題解決思考のプロセスを辿ることから抜け出せず、学生の知識不足を嘆くとともに、この導き方でいいのかいう疑問がありました。

改めて、介護の意義・目的に沿う形で物事を進めていくには?大切なことを中心に据えた 思考のプロセスを具現化する必要があると感じ、本シートの作成に至りました。ポジティブ アプローチは、「ありたい姿」=理想を描き、そこにたどり着くためにどうするかを考えるア プローチで、基準や対象が不明確な状況下に有効とされており、「この強みやできることを 活かして一」というふうに、強みや可能性に注目しながら、目標到達へのシナリオを追究す る思考です。

# (10) 実践事例 3:情報の分析・解釈・統合の理解~課題分析ワークシート <静岡県立大学短期大学部>

事例3:	情報の分析・解釈・統合の理解
事例3	課題分析ワークシート(静岡県立大学短期大学部)
講義・演習 の特徴	<ul><li>生活課題の分析等に係る枠組み(視点)を項目化</li><li>生活課題の分析等を文章化する「型」を提示</li><li>介護過程展開シート(配布資料参照)と併用</li></ul>
教育の ねらい・効果	【教育のねらい】  ● 生活課題の分析等の枠組み(視点)を修得する  ● 生活課題の分析等の文章作成法を修得する  【教育の効果】  ● 生活課題の分析等の枠組み(視点)が明確になる  ● 生活課題の分析等について、根拠を示しながら筋道を立てて文章化することができる(一定水準の文章化に資する)

S - 30

利用者の情報を分析・解釈・統合する上で、本学では「課題分析ワークシート」(以下、「シート」という。)を活用しています。

詳細資料と解説 は 152 ページ~

このシートの「特徴」は3つあります。第一に、利用者の情報を分

析・解釈・統合する枠組み(視点)を項目化していることです。具体的には、①「現在の状況」、②「原因・理由」、③「今後、予想される結果」、④「望ましい状態」、⑤「必要な支援」、⑥「留意すること」の6項目を設定しています。第二に、利用者の情報を分析・解釈・統合した内容を文章化する1つの「型」を提示していることです。上記6項目には、それぞれ、「現在○○の状態である」、「それは△△が原因だと考えられる」、「この状態が続くと◇◇になる恐れがある」などの文章の「型」を設定しています。○○、△△などの部分に該当する利用者の情報、あるいは自身で考えたこと等を記入し、それらをつなげることで、利用者の情報を分析・解釈・統合した内容を文章化することができます。そして、第三に、このシートは単独で用いるのでなく、「介護過程展開シート」と併用することです。「介護過程展開シート」に記録した利用者の情報をもとに、利用者の情報を分析・解釈・統合する際にこのシートを活用します。

また、このシートを活用した「教育のねらい」は、利用者の情報の分析・解釈・統合の「枠組み(視点)」を学生に修得させることと、利用者の情報の分析・解釈・統合にかかる「文章作成方法」を学生に修得させることです。そして、「教育の効果」として、利用者の情報を分析・解釈・統合する枠組み(視点)が明確になることや、根拠を示しながら筋道を立てて文章化することができるため、一定水準の文章化に資することが期待できます。

# (11) 実践事例4:利用者の生活課題の理解〜演習事例(Aさん) <静岡県立大学短期大学部>

事例4	:利用者の生活課題の理解
事例4	演習事例(Aさん)(静岡県立大学短期大学部)
講義・演習 の特徴	● 事例を用いて利用者(Aさん)の生活課題を捉える
教育の ねらい・効果	【教育のねらい】  ■ 事例により生活課題の分析等について基本的理解を深める 【教育の効果】  ■ 比較的短文の事例のため、多くの時間を要することなく基 礎的な分析等の能力を涵養することができる
	S — 3

S - 31

利用者の生活課題を捉えるための学修として、本学では「演習事例 (Aさん)」を使用しています。この事例 (Aさん) は、本学1年生の前期 (7月下旬:介護過程展開の概要についてひと通り学修した段階)の演習用として使用しています。

詳細資料と解説 は 162 ページ〜

事例(Aさん)を用いた演習の「特徴」は、事例を通して利用者Aさんの生活課題を捉えることです。また、「教育のねらい」は、事例により生活課題の抽出に係る基本的理解を深めることです。そして、「教育の効果」として、比較的短文の事例のため、多くの時間を要することなく生活課題を抽出する基礎的能力を涵養することが期待できます。

本学では、以前も事例による演習に取り組んでいましたが、事例が長文になりがちで利用者の情報も多かったため、学生が利用者の生活課題を捉えるのに苦労していました。そこで、これらの壁を少しでも解消し、学生の学修効果を高めるために短文の演習事例(Aさん)を用いることになりました。

演習では、「介護過程展開シート」にAさんの情報を記録した後、「課題分析ワークシート」を活用してAさんの情報を分析・解釈・統合し、それを踏まえて生活課題を抽出します。事例が短文であるため、Aさんの生活課題を抽出するまでに多くの時間を要することなく計画的に演習を進めることができます。

# (12) 実践事例 5:介護過程の思考過程の理解を深める~旅行計画の作成 <河原医療福祉専門学校>

事例5:介護過程の思考過程の 理解を深める	
事例5	旅行計画の作成(河原医療福祉専門学校)
講義・演習 の特徴	● 介護過程の課題解決的思考法を理解する
教育の ねらい・効果	<ul> <li>旅行という学生にとっても身近な問題について考える         →介護過程の思考過程を理解する</li> <li>「旅行計画を作りましょう」で演習の流れを提示         →問題点を予想→解釈・関連付け・統合化→計画立案</li> <li>登場人物の情報(体の問題、本人の希望 等)を項目番号にする         →考察時間を十分にとりつつ演習時間を短縮する</li> </ul>

S - 32

「介護過程」をこれから学ぶ学生に対して、「旅行計画の作成」という身近な事例から考えることにより、苦手意識を克服することをねらいとし、その後のテキスト事例や現場実習時に「介護過程」を理解して展開できるように学びます。

詳細資料と解説 は 175 ページ~

特徴としては、「旅行」という多くの人が想像するのに容易な題材を、それぞれ過去の経験を踏まえ、どのような情報が必要かを簡単に予測し「楽しく安全で満足できる旅行に行くために解決すべき課題」⇔「対象者が臨む生活をおくるために必要な課題」と置き換えて理解します。

本演習は二本立ての構成となっており、思考する内容が過度に複雑にならないように配慮してあります。

演習時間に関しては、進行状況を考えながら適宜指示を出します。

※2つの演習内容の詳細は、「Aはじめに考えてみましょう資料解説」スライド解説(河原医療福祉専門学校 上田)」と「B旅行計画を作りましょう資料解説」スライド解説(河原医療福祉専門学校 上田)」を併せて確認して下さい。

# (13) 実践事例 6: ICF の視点で理解を深める〜介護過程の展開シート 〈聖カタリナ大学〉

事例6:ICFの視点で理解を深める	
事例6	介護過程の展開シート・受け持ち利用者の記録 (聖カタリナ大学)
講義・演習 の特徴	情報の整理とアセスメントの思考プロセスの可視化
教育の ねらい・効果	<ul> <li>ICF分類シートにより弱みと強みを理解する</li> <li>→ICFの各項目の情報の相互関係を可視化し、</li> <li>生活障害および生活機能とその背景が理解できる</li> <li>生活課題(ニーズ)の根拠を文章化する</li> <li>→分析内容の文章量が増え、強みを分析に加えられる</li> <li>情報整理~介護計画立案につながる分析の流れを可視化する</li> </ul>
	→他者と思考プロセスが共有でき、振り返りのツールとなる

S-33

利用者を生活に支障がある者としてのみ捉えるのではなく、ICF の視点によって、生活機能を理解する必要があります。そういった意 味で、介護過程の展開におけるワークシートを検討した結果、詳細資

詳細資料と解説 は 185 ページ~

料にある現在の形になりました。現場経験や高齢者・障害者の状態像のイメージが薄い学生にとって、ICFの基本的特徴を講義によって教授し、理解を得るのは難しいため、いかに演習を通じて感覚的に馴染んでもらえるかがポイントだろうと考えています。

収集した情報をICFの「健康状態」と、「心身機能・身体構造」、「活動」、「参加」、「環境因子」、「個人因子」それぞれのプラス面、マイナス面に分けた 11 からなる分類表により、利用者のマイナス面(弱み)とプラス面(強み)に整理します。同時に、情報同士がどのように作用しているのかを矢印でつなぎながら、弱みについては生活障害として、強みについては生活機能として、それらの背景を理解します。また、【利用者本人の困りごと】を文章化する上で、形式的書き方を提示し、それに準じることで、少なくとも以前に比べて、分析内容の記載量は増加していると感じています。さらには、情報の整理で理解した生活機能を、困りごとに活用できるよう分析に取り入れることで、より根拠のある分析につながります。そして、アセスメントの過程の中で【医学モデル】や【社会モデル】によって分析した内容を、介護計画の具体的支援内容に連動させ解決を図っていくことが、視覚的に理解できます。情報を整理から生活課題の抽出までの流れが、ワークシート内で確認できるため、他者と支援を検討するカンファレンスや実習指導者・教員による指導、または学生自身の分析の振り返りに有用だと考えています。

# ■ 4 介護計画

#### (1)介護計画とコアコンピテンシー



介護福祉士養成課程における修得度評価基準としてのコアコンピテンシー「介護過程を展開する実践能力」を身につけるためには、(1)対象となる人をアセスメントする能力、(2)アセスメントに基づき介護計画を作成する能力、(3)根拠に基づき生活支援技術を適切に実践する能力、(4)実践を評価し、改善する能力の4つの能力を養うことが必要です。

介護計画では、4つの具体的な能力のうち、(2) アセスメントに基づき介護計画を作成する能力を身につけることが必要になります。

<sup>※「</sup>介護福祉士養成課程における修得度評価基準の策定等に関する調査研究事業報告書」 (社団法人介護福祉士養成施設協会、2019年3月)



#### (2) アセスメントに基づき介護計画を作成する能力

#### 介護福祉士養成課程における修得度評価基準

- 95. 介護実践における介護計画立案の意義について説明できる
- 96. 立案した介護計画の根拠や内容について、 同職種や他職種に説明できる
- 97. アセスメントにより設定した生活課題と介護の方向性に基づき、介護計画を立案できる

S - 3.5

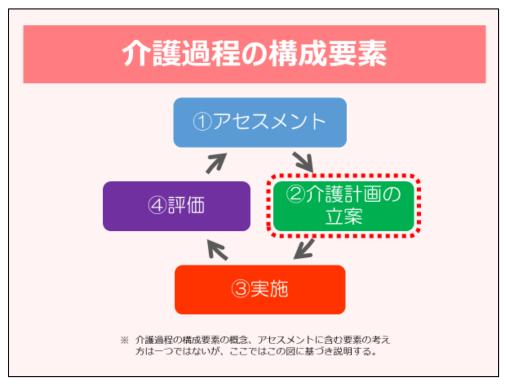
「(2) アセスメントに基づき介護計画を作成する能力」の修得度評価基準を示しました。 介護福祉士養成施設で学ぶ学生が卒業時に(2) アセスメントに基づき介護計画を作成す る能力を身につけるためには、どのような科目において教育を行い、どれくらい修得した能 力を身につけたかを測る必要があります。それを示したものが介護福祉士養成課程における 修得度評価基準です。

「介護福祉士養成課程における修得度評価基準」は 120 あります。95-97 の番号は、修得度評価基準全体の中の番号です。

- (2) アセスメントに基づき介護計画を作成する能力の修得度評価基準は、以下の3つです。
  - 「95. 介護実践における介護計画立案の意義について説明できる」
  - 「96. 立案した介護計画の根拠や内容について、同職種や他職種に説明できる」、
  - 「97. アセスメントにより設定した生活課題と介護の方向性に基づき、介護計画を立案できる」

なお、(2) アセスメントに基づき介護計画を作成する能力を修得するための、介護福祉士養成課程の新カリキュラムの科目、教育に含むべき事項、想定される教育内容の例は、前ページの※に掲載されています。

## (2)介護計画とは



S - 36

「介護計画の立案」は介護過程の4つの構成要素の概念のうち、「①アセスメント」の次に位置づく段階です。

# 介護計画とは

- 介護計画の立案では、アセスメントによって抽出した生活課題を解決するための「介護目標」を設定し、その介護目標を達成するために必要な支援内容及び支援方法を組み立てる。
- ・介護計画は、本人や家族への説明と同意の もと、介護福祉職チームのメンバーが利用 者一人ひとりに応じた介護方針や支援内 容・支援方法を共有するものである。

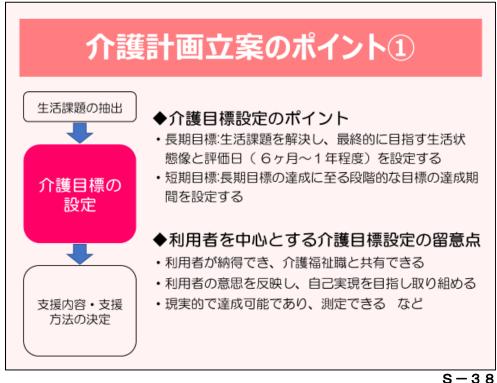
S - 37

研究会では、改めて「介護計画とは」の検討を行いました。

介護計画の内容を確認すると、アセスメントによって抽出した利用者の生活課題を解決するための介護目標の設定と、その介護目標を達成するための支援内容や具体的な支援方法の立案があります。また、立案した介護計画を実践するためには、利用者や家族への十分な説明と同意のもと、介護福祉職チーム内で介護方針や支援内容・支援方法を共有し、協働して利用者の生活を支えることも必要です。

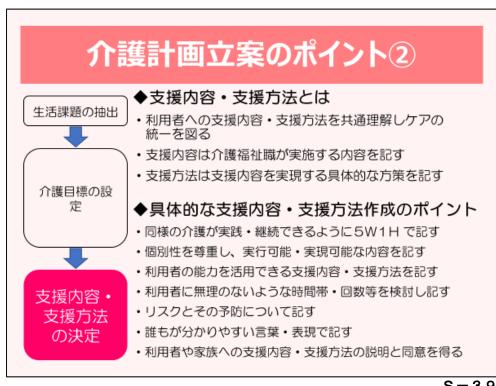
つまり、介護計画とは、アセスメントによって抽出された生活課題を解決するための「介護目標」を設定し、その介護目標を達成するために必要な支援内容及び支援方法の組み立てと、本人や家族への説明と同意のもと、介護福祉職チームのメンバーが利用者一人ひとりに応じた介護方針や支援内容・支援方法を共有するものといえます。

#### (3)介護計画立案のポイント



介護計画立案のポイントとして、生活課題を抽出した後、その生活課題にそった介護目標 を設定するポイントと、利用者を中心とする介護目標設定の留意点について示しています。 介護目標設定のポイントは、まず生活課題を解決し、最終的に目指す生活状態像とその評 価日(6か月から1年程度)を設定した長期目標を設定します。そして長期目標の達成に至 る段階的な目標の達成期間を設定する短期目標を設定します。

次に、利用者を中心とする介護目標設定の留意点を示します。介護目標は利用者の目指す 生活状態像のため、介護福祉職が一方的に決めるものではありません。介護福祉職は利用者 との関係性の中で、利用者がどのような生活を望んでいるのかという思いや意思を反映し、 利用者が納得して自己実現を目指して主体的に取り組める現実的に達成可能であり、測定で きる介護目標を設定する必要があります。



S - 39

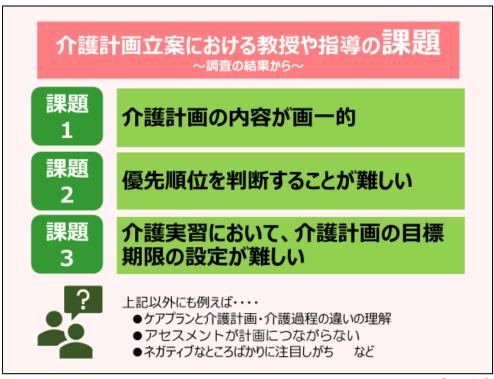
介護計画立案のポイントとして、介護目標の設定の次の段階である支援内容・支援方法の 決定と、具体的な支援内容・支援方法の作成のポイントについて示しています。

まず、支援内容・支援方法とは何を示すのかを確認します。支援内容とは、介護目標の達 成に向けて介護福祉職が実施する内容です。支援方法とは支援内容を実現するための具体的 な方策のことです。介護福祉職は介護目標の達成に向けて、だれがみても共通理解ができて、 統一したケアが実践できる具体的な支援内容・支援方法を設定し、記す必要があります。

次に、介護目標にそった具体的な支援内容・支援方法を作成するためのポイントを示して います。

そのポイントは、介護福祉職が同様の介護を実践・継続できるように5W1H(When いつ、 Where どこで、Who だれが、What 何を、Why なぜ、How どのように)を用いて記すこと。利用 者の個別性を尊重し、利用者の能力を活用した実行可能、実現可能な支援内容・支援方法を 記すこと。支援内容・支援方法は、利用者への過重な負担にならないように無理のない時間 帯・回数等の設定や、ケアの実践に伴う考えられるリスクとその予防方法についても検討し 具体的に記すこと。介護福祉職は分かりやすい言葉・表現で作成した支援内容・支援方法を 利用者や家族に十分に説明を行い、同意を得ておくことです。

#### (4)教授や指導の課題と工夫例 調査結果より



S - 40

「介護過程展開の実践力向上のための調査研究」(令和元年度、公益社団法人日本介護福祉士養成施設協会)では、養成校や実習施設を対象に介護過程の教授・指導に関する課題や工夫点を把握するための調査を実施しました。

介護計画を立案する段階での課題には、介護計画が画一的、優先順位を判断することが難しい、介護実習における目標期限の設定が難しいなどの課題があげられました。介護計画が画一的という意見は、リハビリやレクリエーションに偏りがちであったり、利用者の発言がそのまま介護計画になるなどの課題としてあらわれています。そのほか、ケアプランとの関係の理解を進めることの難しさ、ネガティブなところばかりに注目しがちで介護過程の本来の目的を見失ってしまうなどの指摘がなされています。

#### 介護計画立案における教授や指導の工夫 ~アンケート調査の結果から~

工夫 1 作成した介護計画を自分たち以外の グループが実施、計画を検証・評価

工夫 2

模擬カンファレンスを実施



上記以外にも例えば・・・・

- ●外部講師を招いて、それぞれの専門職の立場から 講義
- ●動画を活用してケアプランと介護過程の違いの 理解をすすめる など

S-41

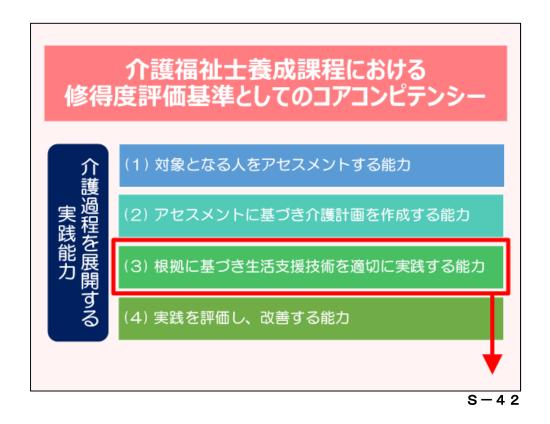
調査からは、介護計画立案に関する教授・指導において養成校の工夫を凝らした取り組みが把握できました。

作成した介護計画を自分たち以外のグループが実施して介護計画を検証・評価する、模擬カンファレンスで介護計画を評価する、外部講師を招いてそれぞれの立場から講義をしてもらうなどの工夫例があげられました。

介護計画の内容について、講義や実施を通して様々な視点や展開があることを学ぶ工夫が みられます。

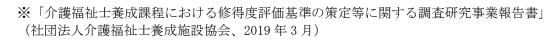
# ■ 5 実施と評価

#### (1) 実施とコアコンピテンシー



介護福祉士養成課程における修得度評価基準としてのコアコンピテンシー「介護過程を展開する実践能力」を身につけるためには、(1)対象となる人をアセスメントする能力、(2)アセスメントに基づき介護計画を作成する能力、(3)根拠に基づき生活支援技術を適切に実践する能力、(4)実践を評価し、改善する能力の4つの能力を養うことが必要です。

実施では、4 つの具体的な能力のうち、(3) 根拠に基づき生活支援技術を適切に実践する 能力を身につけることが必要になります。





#### (3) 根拠に基づき生活支援技術を適切に実践する能力

#### 介護福祉士養成課程における修得度評価基準

- 98. 立案した介護計画を、チームメンバーと連携し、指導のもと実践できる
- 99. 立案した介護計画を、利用者の状況にあわせて指導のもと実践できる
- 100. 日々の介護実践を、専門職の支援として 記録できる
- 101. 具体的な支援の根拠を説明できる

S - 43

「(3) 根拠に基づき生活支援技術を適切に実践する能力」の修得度評価基準を示しました。 介護福祉士養成施設で学ぶ学生が卒業時に(3) 根拠に基づき生活支援技術を適切に実践 する能力を身につけるためには、どのような科目において教育を行い、どれくらい修得した 能力を身につけたかを測る必要があります。それを示したものが介護福祉士養成課程におけ る修得度評価基準です。

「介護福祉士養成課程における修得度評価基準」は 120 あります。98-101 の番号は修得度評価基準全体の中の番号です。

- (3) 根拠に基づき生活支援技術を適切に実践する能力の修得度評価基準は、以下の4つです。
  - 「98. 立案した介護計画を、チームメンバーと連携し、指導のもと実践できる」
  - 「99. 立案した介護計画を、利用者の状況にあわせて指導のもと実践できる」
  - 「100. 日々の介護実践を、専門職の支援として記録できる」
  - 「101. 具体的な支援の根拠を説明できる」
- なお、(3) 根拠に基づき生活支援技術を適切に実践する能力を修得するための、介護福祉士 養成課程の新カリキュラムの科目、教育に含むべき事項、想定される教育内容の例は、前ペー ジの※に掲載されています。

#### (2) 実施とは

# 実施とは

- ・実施とは、介護計画を介護福祉職チームで 共有し、介護計画に基づく根拠のある介護 実践をいう。
- 介護過程の展開における「実施」は、日々 の介護の実践そのものであり、立案した計 画を実行することである。
- •介護実践においては、介護福祉職チームの 意識統一、サービス提供の態勢が重要であ り、介護目標の達成度に影響を与える。

S - 44

介護過程の展開における実施とは、日々の介護実践そのものであり、立案した計画を実行することです。ここで大切なことは、ただ単にケアをするのではなく、介護計画に示された目標や具体的方法を介護福祉職チームで共有し、介護計画に基づく根拠のある介護実践を行うことです。介護計画に基づく介護実践をチームでよりよく実施していくためには、介護福祉職チームの意識統一やサービス提供の態勢が重要であり、このことは介護目標の達成度にも影響を与えます。

#### (3) 実施のポイント

# 実施のポイント

#### ◆ 「目標」と「具体的方法」を確認して行う

- 利用者が目指している状態像の確認。
- ・目標の達成を基準とした観察の視点の確認。
- 支援内容や方法について介護福祉職チーム全体での共有。

#### ◆利用者の反応をみながら、安全に留意して行う

- ・正しい介護技術を身につけ事故防止に努める。
- 利用者との信頼関係の構築。
- ・肯定的な心理的サポート。

#### ◆実施時の利用者の反応などを記録する

- 計画した援助内容をどのように実践したか記録する。
- 実践のなかで利用者はどのようであったか記録する。
- 記録は事実のまま、簡潔に記入する。

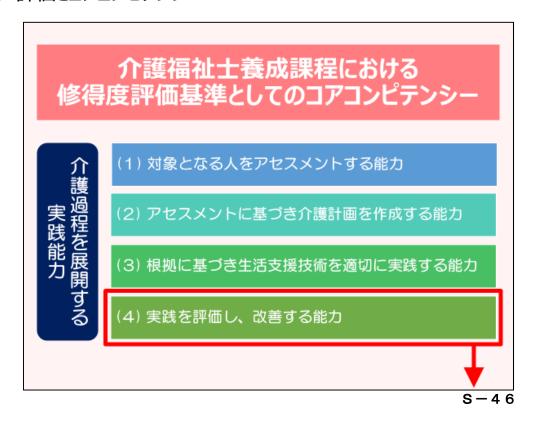
S - 45

実施において大切なことは、「目標」と「具体的方法」を確認することです。「目標」と「具体的方法」を確認することで、利用者の目指している状態像や目標の達成を基準とした観察の視点を再確認することができます。再確認することで、観察を効果的に行えることや、新たな課題や可能性の発見につながります。また、計画に位置づけられていないような状況が起こったとしてもその時の状況に応じた対応が可能になります。次に、大切なことは、目標・具体的方法ついて介護福祉職チーム全体で共有することです。チーム全体で共有することで意識統一につながります。日常的に会議やカンファレンス等において意見交換を行い、目標について確認しておくことが求められます。

さらに実施では、利用者の反応をみながら安全に留意して行うことが大切です。正しい介護技術を身につけ事故防止に努めることや、利用者との信頼関係の構築につとめることが求められます。肯定的な心理的サポートを通して利用者の安全と安心を守ることが大切です。

利用者に支援を実施した場合は、実施時の利用者の反応などを記録します。記録は、評価の際にも大切なので、実施には、記録までが含まれることを理解しておく必要があります。記録では、計画した具体的方法をどのように実践したか、実践の中で利用者はどのようであったかなどの実施状況を観察し、その観察した内容を記入します。さらに記録は利用者にかかわるチーム全員が目を通すことになります。そのため記録は、事実のまま簡潔に記入し、正確で客観的であること、誰にでもわかりやすく書かれていることなどが大切となります。

#### (4) 評価とコアコンピテンシー



介護福祉士養成課程における修得度評価基準としてのコアコンピテンシー「介護過程を展開する実践能力」を身につけるためには、(1)対象となる人をアセスメントする能力、(2)アセスメントに基づき介護計画を作成する能力、(3)根拠に基づき生活支援技術を適切に実践する能力、(4)実践を評価し、改善する能力の4つの能力を養うことが必要です。

評価では、4 つの具体的な能力のうち、(4) 実践を評価し、改善する能力を身につけることが必要になります。

<sup>※「</sup>介護福祉士養成課程における修得度評価基準の策定等に関する調査研究事業報告書」 (社団法人介護福祉士養成施設協会、2019年3月)



#### (4) 実践を評価し、改善するする能力

#### 介護福祉士養成課程における修得度評価基準

- 102. 介護実践における評価の意義を説明できる
- 103. チーム (同職種・多職種) における評価の 意義を説明できる
- 104. 介護計画にそって実施できたか、介護計画 は適切・妥当であったかについて評価できる
- 105. 目標到達の状況を踏まえ、再アセスメント の必要性について検討できる

S - 47

「(4) 実践を評価し、改善する能力」の修得度評価基準を示しました。

介護福祉士養成施設で学ぶ学生が卒業時に(4)実践を評価し、改善する能力を身につける ためには、どのような科目において教育を行い、どれくらい修得した能力を身につけたかを 測る必要があります。それを示したものが介護福祉士養成課程における修得度評価基準です。

「介護福祉士養成課程における修得度評価基準」は 120 あります。102-105 の番号は、修得度評価基準全体の中の番号です。

- (4) 実践を評価し、改善する能力の修得度評価基準は、以下の4つです。
- 「102. 介護実践における評価の意義を説明できる」
- 「103. チーム (同職種・多職種) における評価の意義を説明できる」
- 「104. 介護計画にそって実施できたか、介護計画は適切・妥当であったかについて評価できる」
- 「105. 目標到達の状況を踏まえ、再アセスメントの必要性について検討できる」

なお、(4) 実践を評価し、改善する能力を修得するための、介護福祉士養成課程の新カリキュラムの科目、教育に含むべき事項、想定される教育内容の例は、前ページの※に掲載されています。

#### (5)評価とは

# 評価とは

- 介護実践の後には、その評価を客観的に行う必要がある。
- これまでのプロセスを振り返り、目標が達成できているか検証する。そのうえで、実践された介護を今後どのようにするのかを検討する。
- ・評価は立案時に設けた期限(評価日)及び 利用者の生活状態に変化が生じたときに行 う。

S-48

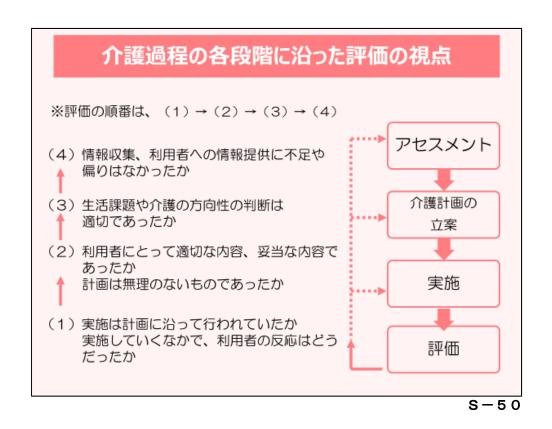
介護実践における評価とは、立案した介護目標がどれくらい達成されているか、その成果を判定することです。利用者の生活課題の解決に向け、実施されている具体的方法やその内容が利用者にとって妥当なものであったかどうか、それぞれの目標で設定された一定期間をめどに確認をします。さらに介護実践における評価では、その評価を客観的に行う必要があります。評価を客観的に行うためには、これまでのプロセス(アセスメント→計画の立案→実施)を振り返り検証します。その上で、実践された介護を今後どのようにするのかを検討します。

なお、評価は、立案時に設けた期限(評価日)及び利用者の生活状態に変化が生じた時に 行います。

## (6)評価のポイント

# 評価の視点 目標が達成された場合 ・今後も具体的な方法を継続する必要があるか否かを判断する ・完全に解決された場合には新たな生活課題について再アセスメントする 目標が達成されなかった場合 ・介護過程の各段階にさかのぼって検討し、見直しを行う

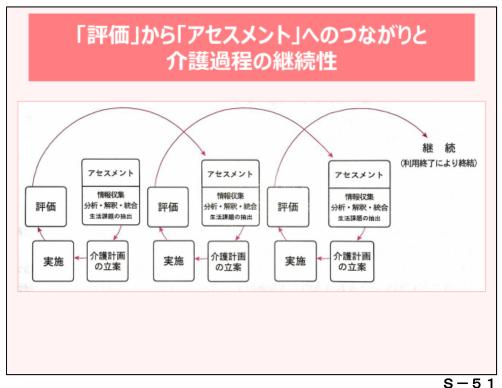
評価では、実施された介護実践が、利用者の生活課題の解決に向けた内容として、妥当なものであったかどうかを評価します。評価は、まず、目標が達成できたか否かをみます。目標が達成された場合には、なぜ目標が達成できたのか振り返ります。その上で、今後も具体的な方法を継続する必要性があるか否かを判断します。さらに完全に解決された場合には、生活課題について再アセスメントするようにします。目標が達成されなかった場合は、介護過程の各段階にさかのぼって検討し見直しを行います。



目標が達成されなかった場合には、なぜ達成されなかったのかを検証する必要があります。 そのためには、介護過程の展開を振り返り、介護過程の各段階にさかのぼって検討し、見直 しを行います。介護過程の各段階に沿った評価の視点は次の4つです。

(1) 実施は計画に沿って行われていたか、実施していく中で、利用者の反応はどうだったか、(2) 利用者によって適切な内容、妥当な内容であったか、計画は無理のないものであったか、(3) 生活課題や介護の方向性の判断は適切であったか、(4) 情報収集、利用者への情報提供に不足や偏りはなかったか、となります。また、評価の順番は  $(1) \rightarrow (2) \rightarrow (3) \rightarrow (4)$  となり介護過程の各段階をさかのぼって評価をします。

評価の視点では、利用者や家族の満足度、安全性、効率性などもあげられます。



評価では、まず目標が達成されているか否かをみていきます。目標が達成できていないと 判断した場合は、なぜそうなったのかを介護過程の各段階をさかのぼって検討しどこに原因 があったのかを探ります。原因が明らかな時はその部分から、また、原因が明確ではない場 合は最初から再度展開を行います。このことを、再アセスメントを行うといいます。最終的 には、計画を変更修正します。そしてまた実施し、評価され、再アセスメントを行います。 このように、介護過程は評価して終わりではありません。評価した後は、さらにアセスメ ントへとつながっていきます。図の『「評価」から「アセスメント」へのつながりと介護過程 の継続性』に示しているように、介護過程は、継続性のなかで展開されることが重要であり ます。そして、この介護過程の継続性を通して、時間の経過とともに少しずつ変化していく 利用者の生活に対し、対応していくかかわりが求められるのです。

#### (7) 教授や指導の課題と工夫例 調査結果より

# 実施と評価における教授や指導の課題 ~調査の結果から~

課題 1 計画や実施内容について、実習指導者としか 共有されていない →チーム内での共有が求められる

課題 2

実施のための介護計画になっている

課題 3

実践を振り返り深めることが必要



上記以外にも例えば・・・・

- 介護計画を立案していないところがある
- ●養成校によりシートや様式がバラバラで現場が混乱する
- ●養成校ではできていても実習になるとできなくなってしまう など

S - 52

「介護過程展開の実践力向上のための調査研究」(令和元年度、公益社団法人日本介護福祉士養成施設協会)では、養成校や実習施設を対象に介護過程の教授・指導に関する課題や工夫点を把握するための調査を実施しました。

実施と評価の段階における課題には、実習指導者と日々の指導者の連携が図られていない、 実習のための介護計画を作成している、振り返りが十分ではないなどの指摘のほかに、施設 で介護計画を作成していない、ケアプランと混同している、ケアマネジャーの視点での指導 がなされているなどの課題があげられました。また、養成校ではできていても実習ではでき なくなってしまう学生がいるなどの指摘もあります。

# 実施と評価における教授や指導の工夫

~調査の結果から~

工夫 1

実習指導者に介護過程の展開の授業の演習疑似体験をしてもらう

工夫 2

実習現場に対する教員の出前講座、 研修会の実施



上記以外にも例えば・・・・

- ●巡回指導の増回、巡回指導時にケースカンファレンス
- ●シート記入例の配付・説明
- ●養成校共通のシートを作成(三重モデルなど)
- ●実習指導者を招いて事例報告会(発表会) など

S - 53

調査からは、実施と評価において養成校と実習施設がどのように連携をしているかという 事例が多くあげられました。

巡回指導の充実に向けた取り組み、事前の説明会等で実習の目的や到達度・シートの記入方法・実習生の到達度を知らせる、シートの記入例を作成・配付するなどの取り組みのほか、実習指導者に養成校に来てもらい介護過程の授業を体験してもらう、あるいは養成校が実習施設に出向いて介護過程の教授内容を施設側に伝えるなどの取り組みもみられました。また、県において共通の記入シートを作成・共有することで実習施設の指導の混乱を回避する取り組みなどもなされていました。さらに、実習指導者を招いて事例や実習の報告会をすることで、他の実習施設の取り組み等を知る、学生の成長を実感する機会を創出する取り組みもなされていました。

# ■ 6 介護過程の理解を深めるために

#### (1) カンファレンスとは

# カンファレンスとは

- 実施の過程において、課題解決やより良い支援に向けて討議すること。
- チーム内における、支援に関する情報共有と共通理解の場。
- ・職員の新たな気づきや学びの機会でもある。

S - 5 4

介護過程を展開し適切な支援を提供する上で、カンファレンスや事例研究は効果的です。 介護実習においても、学生が介護過程をより深めるために、カンファレンスや事例研究を取 り入れていくことが望ましいとされます。

まず、カンファレンスとはどのようなものか確認をします。

1つめ、実施の過程において、課題解決やより良い支援に向けて討議することです。

2 つめ、カンファレンスの場は、チーム内における、支援に関する情報共有と共通理解の場であります。

3 つめ、職員の新たな気づきや学びの機会となります。実習においては、学生の新たな気づきや学びの機会ということです。

#### (2) カンファレンスのポイント

# **介護実習における** カンファレンスのポイント

#### ◆カンファレンスの実施時期

各時期に、計画の妥当性や進行状況等について検討を行う。 必要に応じて、他職種からも助言をもらう。

- 介護計画作成時 目標設定や介護内容は適切か、役割の確認。
- 2. 計画実施中(中間カンファレンス) 計画通りに実施できているか。 実施にあたり問題は生じていないか。
- 3. 評価時 目標は達成できたか。介護内容は適切であったか。 新たな課題はあるか。 介護過程の展開全体において適切だったか。

S - 55

実習中に適切なタイミングでカンファレンスを持つことで、より学生の介護過程の展開に 対する理解が深まります。

まず、介護計画作成時に行います。この時には、学生自らが立案した介護計画について、 実習指導者や他職種に対して説明を行い、助言を受けながら、目標設定や介護内容の適切性、 役割の確認をします。

次に、計画実施中(中間カンファレンス)に、実施の途中経過でもつカンファレンスになります。計画通りに実施できているか、実施にあたり問題は生じていないか、また、学生が実施をしている中で困ったことや悩みが生じていないかを確認します。

そして、評価時に行うカンファレンスは、目標は達成できたか、介護内容は適切であったか、新たな課題はあるか、介護過程の展開全体において適切だったかを、学生と実習指導者や他職種とともに振り返ります。

このように、複数回カンファレンスを取り入れることで、学生の介護過程の理解、そして チームケアに対する理解もより深まります。

#### (3) ケーススタディとは

# ケーススタディとは

- ケーススタディ(事例研究)とは、具体的な介護 実践の事例を基に、その介護過程を客観的に振り 返り、学びを深めることである。
- ケーススタディは、体験と理論の統合を意図する。
- ケーススタディにおいて、共に学び考えることが、 チームや多職種連携への基礎となる。

S - 56

ケーススタディとは、本来「解決すべき内容を含む事実について、その状況・原因・対策 を明らかにするため、具体的な報告や記録を素材として研究していく方法」と定義されてい ます。しかし、学生の場合は、実践事例が実習事例であるため、終了した実習体験を研究素 材として、その事例への取り組みを評価すること、またその取り組みの中から他の事例にも 応用できる援助の共通項を導き出すこと、に焦点をあてケーススタディに取り組むことにな ります。

ケーススタディは、実習体験という具体的な事実から理論にてらして一般的な原理・原則 を導き出す帰納法としてのアプローチをするため、個別事例に対する援助の方向性や方法が、 何を根拠にしたものかが問われます。つまり、実習中の介護過程の展開のあり様が問われる ことになるため、実習開始前にケーススタディへの導入をしておくことが求められます。

ケーススタディにおいて、共に学び考えることが、チームや多職種連携への基礎となります。介護過程を展開する前提として、一人ひとりの介護福祉観が求められます。介護福祉観の具現化として多様な考え方が存在し、同職種でも同一ではありません。介護福祉チームのみならず多職種を交えた意見交換ができることで、相互の専門性や価値観を共有しやすくなります。

#### (4) ケーススタディのポイント

# ケーススタディのポイント

- 事例を追体験することで、自身の学びを深めることにつながる。
- 介護過程を担当している教員、巡回指導者、介護 実習指導者、介護実習に関係する施設職員、他の 専門職等、多様な人たちの参加を設定し、意見交 換を深める。
- 介護過程の学びにあたっては、実習終了後にケーススタディをすると効果的である。

S - 57

ケーススタディの発表会を開催することで、他者の研究発表を通して事例の捉え方やかか わり方などの追体験が可能となり、参加者の学びを深めることにつながります。

発表会にあたっては、介護実習に関係する施設職員、実習指導者、実習巡回指導者、介護 関係教員、在学生、関心のある人など多様な人たちの参加を設定し、質問や意見交換の場が 活性化するよう環境づくりをします。

介護過程の学びにあたっては、実習開始前の介護総合演習や介護実習、介護過程の科目と 連動させ、有機的なつながりの中で実習体験をし、実習終了後にケーススタディでさらに深 めることが効果的です。 (5) 実践事例 7: 多職種連携の理解~多学科合同によるケーススタディ <専門学校 ユマニテク医療福祉大学校>

事例7:多職種連携の理解	
事例了	多学科合同によるケーススタディ (専門学校 ユマニテク医療福祉大学校)
講義・演習 の特徴	<ul><li>● 同じ事例を多学科合同で検討する</li><li>● 多職種連携を意識</li></ul>
教育の ねらい・効果	<ul> <li>職種による視点の違いや問題点のとらえ方の違いを理解する</li> <li>多職種の役割が理解できる</li> <li>実習においての介護過程の振り返りではないが、一つの事例を、他学科の学生とともに考えていくことは、ケアプランのサービス担当者会議からの介護過程への繋がりを踏まえたものとなっている。「介護過程」「介護実習II」で学んできたものを、さらなる学びへと繋げる取り組みである</li> </ul>

S - 58

大学校には5学科(理学療法学科・作業療法学科・鍼灸学科・歯科衛生学科・介護福祉学科)があり、5学科の卒業年生(理学療法学科・作業療法学科4年生、鍼灸学科・歯科衛生学科3年生、介護福祉学科2年生)合同で1つの事例を検討します。

詳細資料と解説 は 197 ページ〜

各学科からケアプランを持ち寄り報告することで、職種によってアセスメントの視点が違い、職種の特徴、専門性に気づくことができます。将来サービス担当者会議やケースカンファレンス等において介護福祉士として専門的な立場から意見を交換しなければなりません。介護の必要性を多職種に説明するために、介護の根拠を明確する介護過程の重要性を学ぶ授業です。

# (6) 実践事例8:ケーススタディの体系的な実践〜ケーススタディ実施要項 <熊本学園大学>

事例8:ケーススタディの体系的な実践	
事例8	「ケーススタディ実施要項」(熊本学園大学)
講義・演習 の特徴	● 体系的にケーススタディを学ぶことができる
教育の ねらい・ 効果	<ul> <li>体験の意味を問う思考作業により、利用者の理解を深め、自己を客観視できる</li> <li>介護過程を研究スタイルに組み立てることで、論理的思考を高める</li> <li>ケーススタディの方法及び発表等について、体験的に理解、習得できる</li> </ul>
	S – 5

S - 59

熊本学園大学では、講義・演習の特徴として、ケーススタディについて体系的にかつ実践的に学べるよう「実施要項」(冊子)を作成・配付し、要項にそって展開しています。

詳細資料と解説 は 204 ページ〜

研究の取り組み段階で「研究計画書」(研究動機と研究目的、仮テーマ)を作成し、それに基づき研究材料となる実習での介護体験を抽出し、再整理を行います。テーマの観点から介護体験の評価・考察を深め、研究目的の答えを導き出します。この一連の作業を、既定のスタディレポートに完成させ、発表、講評を行うという、研究の取り組みから発表に至るまでの研究の基本的事項について学べるよう工夫しています。

教育のねらい・効果としては、①教員とのやり取りをしながら、実習中の介護体験の意味を探ることで気づきが深まり、利用者理解を深めると同時に、自己の客観視ができる、②実習中の介護過程の展開を改めて見直し、研究スタイル(論文構成)に組み立てることで論理的思考能力を高める、③実施要項に基づき体験的に理解することで、研究方法の修得度を高め、卒業後に活用できることを意図しています。